

Title	西ドイツ刑法学の現状：刑法学者の業績を系譜学的にみて
Sub Title	The bibliography of criminal science in west Germany
Author	宮沢, 浩一 (Miyazawa, Kōichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1965
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.8 (1965. 8) ,p.64- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刑事法学の当面する諸問題 資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650815-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西ドイツ刑法学の現状

— 刑法学者の業績を系譜学的にみて —

解題

一 日本におけるドイツ法の研究、就中、ドイツ刑法学の研究がかなりの程度に進歩していることは、よく知られた事実である。たしかに、私達昭和生れの者は幾多の諸先輩によつて多年にわたり究明され、整理されきたつたドイツ刑法学に関する多くの知識によつて、どれ程大きな恩恵に浴したことであつたらう。

又、戦後の西ドイツ刑法学の展開についても、私達より数歩先に学界に足を踏み入れた人々の積年の御努力が、いかに私達の前に導きの星の役割を演じたことか。要するに私達は非常に多くの人々の、学恩をかたじけなくしているのである。

では一体、私達にはどのような仕事が残されているのだろうか。すべて物事の始まりは、疑うことから出発する。輝かしいドイツ刑

法学研究の現況は文字通り、ドイツ刑法学の現況を反映しているであらうか。疑うことを許されない權威はないといふ先学の教えに従いつつ、現況を批判的に分析した結果、残念ながらその誇るべき成果は実体を正しく反映してはいないと断定せざるを得ないのである。

二 明治維新以来、余りにも急激に法律制度をヨーロッパ化しなければならなかつたという現実的、政治的な要請が厳密なるべき学問の継承、学説の批判的摂取に強く作用したという事情はよく分る。又、日本における学問の形成過程がヨーロッパのそれとは出発点において大きく異なつた路線の上を進んだといふ事情も考え併せなければなるまい。ヨーロッパ、特にドイツの刑法学において、いわゆる古典派とよばれる刑法学が完成した形で一応存在し、それ自体として華麗な体系を誇り、テーゼとして確固とした地歩を築き上げたのに対し、我が国の刑法学では真にその名に価する古典派の形成が終らないうちに、いや古典派の陣營の整備とはば並行する形で、

アンテテーゼたる新派刑法学が輸入され、こちらの方がむしろ有力な形をとつてしまつたのである。その後の日本における論争の多くは先に主張された新派刑法学に対し、あとから続いた人達、いわゆる新古典派の学者が論争をいどむという形をとるに至つたのである。

ここに見られることは、ドイツの古典派の学者の中、例えばビンディングの著書を時間をかけて渉猟するという余裕の見られなかつたという重大な事実であり、オエトカー、シエーテンザック、フィッシャーといつた人達（日本における学派の争いに登場したビルクマイヤーは極くまれな例外である）の作品の多くは殆んど手つかずに終つたという出来事である。

そして次に關心の対象となつたのが、構成要件論と規範的責任論の展開である。これについては、非常に究明がすすんでは居る。特に、ペーリング、マイヤー、メツガー⁽³⁾の業績についてはかなりの程度研究が進められている。だが、エベルハルト・シュミット⁽⁴⁾についての評価は殆んどその一部分の拡大に終つてゐる。その法史学の業績、法学と医学の境界領域をきわめ、株式会社刑法について精緻な註釈をものしたといつた事實は案外知られていないし、⁽⁵⁾戦争中、陸軍法務官として活躍し、反ナチスの裁判官として人権を守ることに挺身し、又その頃の小書の中ですでにウェルツェルの学説に対し批判的に言及している事實も殆んど見落とされてしまつてゐる。⁽⁵⁾自然主義的行為論と目的的行為論とを綜合した社会的行為論の提唱も又、シュミットに始まるのである。

又、戦争中にその業績を発表し始めた人達に対する研究は殆んど

無視に近い。勿論、ここではナチス刑法学樹立に一と役かつた仕事をいつているのではない。戦後、我が国では余りにも多くの問題と目的的行為論との対決にさきすぎたように思われる。従つて、これと關係のない戦中派の発言、加えて戦後の諸学者の研究業績の多くも殆んど問題としてとりあげられなかつたのである。

ブルンス、ハイニッツ、ペーターリス、ジーバーツ等の多方面の活躍、地味ではあるが非常に力量のあるラングーヒンリクセン、シュレーダー、ザックス、くせはあるけれども伝統的な考え方に深く根を下しているヘルムート・マイヤー等について一体どれ程の注意が払われたことであつたらうか。

目的的行為論の批判的検討においても、ウェルツェル、ガラス、アルミン・カウフマン、マウラツハ、故ニーゼ、V・ウエーバーに向けた注意と比べて、エンギツシュの精緻な、好意的でもある批評を一体どれほど消化し、原典に當つて研究がなされたであらうか。

三 日本刑法学には依然としてオリジナリティー・コンプレックスがつきまとつてはいないであらうか。外国の学説を見つめる場合に、これ程危険な態度はない筈である。余りにも外国の学説と密着しすぎると思われのではないかと、一を聞いて十を知る勸の良さと相俟つて、必ずしも実体に即さない認識を拡大鏡にかけるといつた操作をくりかえしてきたのではないか。

私には右のような疑問が常に心の中に渦をまいてゐた。なるほど、場合によつては、私のような考え方、つまり、外国の学説をまづ正しく位置づけてから、次に分析をし、そして日本の社会、國民

性にあつた議論を展開するべきであるという行き方に対して、自分達の方は、刑法学説史を検討するのではなくて、刑法学を研究するのであるとの反論が予想される。勿論、それも結構である。しかし、およそ外国の学説を使用する場合、全体的評価から切り離して、一部を拡大したり、自説を権威づけるためにそれを利用したりすることは厳につしむべきであると私は考へる。

勿論、自説を展開するに当つて下敷として利用した外国文献をこゝさらに引用しないというのは沙汰の限りである。

私が現在の西ドイツ刑法学を再評価したいと思つた理由は、これまでの日本刑法学におけるドイツ刑法学の評価のあり方に、どうしてもついでゆけないものを感じていたからに他ならない。このもやもやした異和感をまず払拭してかからなければ、どうにも前進する氣持になれなかつたからである。

去る一九六四年五月、三たび西ドイツの地を訪れることが決まつたとき、私は年来の、自分自身に対する宿題をやりとげる機会が到来したと思つた。半年という短期間の滞在ではあつたが、ザール大学の、あの近代的に運営されている能率的なゼミナールの図書室をフルに利用することが出来て、予定の通り仕事は終つた。殆んど毎日のように、雑誌のすべて、論文集の一つ一つを手にとつて、現在、西ドイツの刑法学を荷う人々の業績を書きとめたメモはかなりの厚さになつていつた。

四　ここで、何故、現在のスタッフに限つたかという疑問に答えておきたい。以下の業績群の中には、最近イギリスで物故したグリ

ニンフートやニーゼ、ザウアー、メッガト、コールラウシエ、シンケ等の研究成果はあげられていない。たしかに、現在のスタッフに限定することは巨視的にみると大きな欠陥である。しかし、この種の仕事には、まず始めに問題の限定が必要である。さもないと、結局、終ることのない資料の山に呆然としてしまふのがおちである。

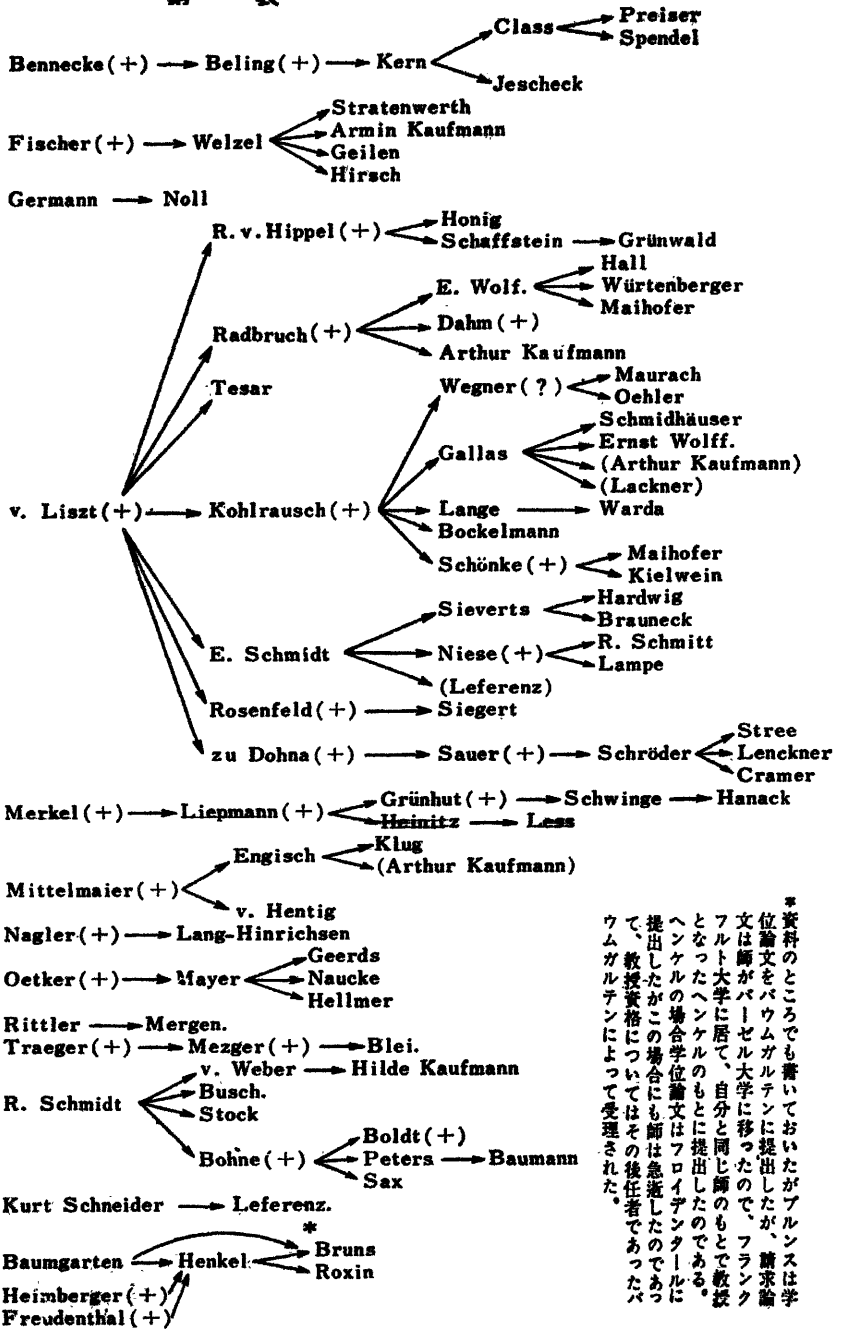
私は何よりもまず、今日現在の西ドイツの刑法学者をびしやつと押えておきたかつたのである。そして、今後の彼等の展開を客観視するための準備をしたかつたのである。死んだ人の思想がその著者の死後に展開するためには他者の力を必要とする。しかし、現に活躍している人は自己と他者の過去をかてとして動的に発展してゆくのである。発展し、形成する可能性のあるものは、とにかく一つの時点でこれをつかまえておかなければならないと考へたのである。過去とのつながりについては、各学者に関する簡単な解説の中で、その学説の系譜を論じておいた。

ここで簡単に、西ドイツの刑法学者の系譜を图示してみよう(第一表)。勿論、これはさらに過去に遡るわけであるが、現在までの私の調査はこの限度にとどまつている。

v・リストという偉大な刑法学者は学説の上でも巨大な足跡を残したが、その門下からこれ程までに大きな影響を及ぼすに至つた俊英群を生んだとは考へてもみなかつたことである。

第一表

西ドイツ刑法学の現状



*資料のところでも書いておいたがブルンスは学位論文をバウムガルテンに提出したが、請求論文は師がパーゼル大学に移ったので、フランクフルト大学に居て、自分と同じ師のもとで教授となったヘンケルのもとに提出したのである。ヘンケルの場合学位論文はフロイデンタールに提出したがこの場合にも師は急逝したのであって、教授資格についてはその後任者であったバウムガルテンによって受理された。

五 客観的にみて、現代の西ドイツ刑法学者とその業績を一九三〇年に公開されたラインハルト・フランクの七十歳祝賀論文集に寄せられた諸学者とその人々の作品群と比べてみてよりすぐれているなどという気持はさらさない。競争というもの、殊にユダヤ系の学者を遠放した偏狭なナチズムの政策が、今日の刑法学にも端的に反映していると私は考える。三〇代の正教授が続々と生れているといふ事実がよくこれを示している。しかし、だからこそ私はこの事実を認めたいのである。学問の進展は過去に束縛される人によつて促されることはない。殊に、私共の後にくる者達に語りかける刑法学は、過去を語り、過去の仕事で現在を食いつなぐ人々によつて語られることはないし、第一その発言はもはや正調のしらべではありえない。とにかく、現に活躍している人達の業績を押えたのは、これらによつて、今後の西ドイツの刑法学の展開を荷う人々が如何に育てられ、直接の榮養を吸収したかを見つめたからに他ならない。

教授資格請求論文(Habilitation)を書き、それを提出し受理されることを要する西ドイツの現在の機構からみて、師弟関係、その思想的なつながりを重視し、師の業績を通してその思想の位置づけをすることが、若い学者達の進む方向を予測し、その展開を跡づけるのに非常に意味があるのである。

又、西ドイツに特徴的な招聘制度というものも見逃せない。この制度について、比較的詳しく書いたからくりかえさない。正教授の地位があくと、その学部招聘委員会が開かれ、去つてゆく教授の

希望にそつた人選が下相談の形で行われ、三人の候補者に順位を附して文部省に送られ、原則として第一順位が選ばれるという仕組みがこれである。学識が高いことも事実であるが、定年で退職する教授(その教授としての待遇は終身である)とか、他の大学への招聘を内々で受諾し、自分の後任について個人的に折衝する教授の意志にかなり左右されることも事実である。

私講師という不安定な地位に居る人に、どこかの大学での移動の可能性が知れると内心的に動揺しがちなものである。請求論文の程度にもよるし、そのときの運にもよるが、なかなか正教授の地位につけない人も居る。正教授であるか否かということとは、西ドイツでは非常に大きな格差があるのである。

例えば、研究上のスタッフとして員外教授には自分の研究所は持てないし、秘書もない。助手の数も一人つのがせいぜいである。しかも、この助手に教授資格請求論文を書かせても、自分だけでこれを受理することは出来ないのである。

従つて、私達が現在の西ドイツの教授陣の構成を見つめる場合に、どうしても師弟関係をより具体的に知る必要があるのである。

六 次の表は大体に於て一九三〇年以後に焦点をあてたドイツの各大学における刑法学者の移動を示すものである。別表の系譜と併せて検討すると、教授陣の移動の多くが、指導教授の系統によつて系列化されていることが分るのである。

第二表

→ 印は変動を意味し、その年代の後の()内は転任先の大学名である。ao 又は apl は員外教授、oP は正教授である。HP は名誉教授であり、PD は私講師、Hab は論文の提出を終った者、Lb は講師である。* 印は1930年のフランク祝賀論文集に寄稿した者である。

Berlin (戦後東独の大学となる)
 v. Linz→1919 (死亡)
 E. Schmidt (1920 PD)→1921 (Breslau)
 *Kahl
 *Klee
 *Goldschmidt→1933 (ナチスにより追放)
 *Mannheim
 Gleispach
 Kohlranch (1919)→1948 (死亡)
 Gallas (1933 PD)→1934 (Giessen)
 Schönke (1935 PD)→1938 (Freiburg PD)
 Stock (1938 oP)→1941 (Marburg oP)
 Lange (1938 PD)→1940 (Jena ao)
 Bockelmann(1939 PD)→1940 (Königsberg ao)
 Lang-Hinrichsen (1949)→1949 (東独政府の政策に反抗して西独に逃亡)
 Freie Universität Berlin
 Lange (1949 oP)→1951 (Köln)
 Oehler (1951 ao)→1954 (oP)→1960 (Köln)
 Heinitz (1952)
 Blei (1962)
 Sarstedt (1963 HP)
 Bochum
 Warda (1965)
 Geilen (1965)
 Bann
 *Grünhut (1924 oP)→1933 (追放)→1952 (HP)→1964 (死亡)
 Zu Dohna→1944 (死亡)
 Schwinge (1930 PD)→1932 (Halle)
 v. Hentig (1934)→1936 (追放)→1951 (復讐)
 v. Weber (1937)→1963 (引退)
 Busch (1947 apl)
 Welzel (1952)
 Stratenwerth (1956 PD)→1960 (Erlangen ao)
 Armin Kaufmann (1957 PD)→1961 (Tübingen ao)
 Hilde Kaufmann (1962 PD)
 Armin Kaufmann (1963 oP)
 Geilen (1963 PD)→1965 (Bochum oP)
 Grünwald (1963 oP)
 Breslau (戦後東独の大学となる)
 Beiling (1893 PD)→1896 (oP)→1900 (Giessen)
 E. Schmidt (1921)→1926 (Kiel)
 *Nagler→1951 (死亡)

*Wegner (1926)→Münster
 Henkel (1935)→1945 (敗戦によりポーランド領となる)
 Maurach (1936 Hab)→1940 (PD)→1941→(Königsberg ao)
 Bruns (1938 PD)→1939 (Greifswald ao)
 Erlangen
 *Allfeld
 *Köhler→1933 (追放、行方不明)
 Würtemberger (1940 ao)→1942 (oP)→1946 (Mainz)
 Heinitz (1948 oP)→1952 (Freie Univ. Berlin)
 Less (1950 PD)→1957 (ao)
 Bruns (1952 oP)
 Boldt (1955 oP)→1957 (死亡)
 Stratenwerth (1960 ao)→1961 (Basel)
 Warda (1962 oP)→1965 (Bochum)
 Frankfurt a. M.
 *Baumgarten→1933 (Basel)
 *Heimberger
 M. E. Mayer→1923 (死亡)
 Freudenthal→1929 (死亡)
 Henkel (1930 PD)→1933 (ao)→1934 (Marburg)
 Class (1936)
 Premier (1946 PD)→1949 (ao)→1954 (oP)
 Spandel (1953 PD)→1958 (ao)→1962 (Würzburg)
 Gerda (1964 oP)
 Freiburg
 R. Schmidt (1891 oP)→1913 (Leipzig)
 *Kern (1920 oP)→1936 (Tübingen)
 Engisch (1929 ao)→1932 (München ao)
 Class (1933 PD)→1934 (Giessen)
 Wolf (1931 oP)
 Hall (1933 PD)→1936 (Giessen)
 Schönke (1938 PD)→1940 (oP)→1953 (死亡)
 Würtemberger (1939 PD)→1940 (Erlangen)
 Maihofer (1953 PD)→1955 (Saarbrücken)
 Kleiwein (1953 PD)→1956 (Saarbrücken)
 Jescheck (1954 oP)
 Würtemberger (1955 oP)
 Schwalm (1961 HP)
 R. Schmitt (1963 ao)
 Giessen

Beling (1900 oP)→1902 (Tübingen)
 *Mittermaier (1903 oP)→1938 (Heidelberg)
 Engisch (1929 PD)→1929 (Freiburg)
 v. Hentig (1929 PD)→1931 (Kiel)
 Class (1934 oP)→1936 (Frankfurt)
 Gallas (1934 ao)→1935 (Königsberg)
 Hall (1936 ao)→戦後マールブルク大学法
 学部と合併

Göttingen
 v. Hippel (1899 oP)
 *Honig (1920 PD)→1925 (ao)→1931 (oP)
 →1933 (追放)
 Schaffstein (1930 PD)→1933 (Leipzig)
 Siegert (1933 oP)
 Welzel (1937 ao)→1940 (oP)→1952 (Bonn)
 E. Schmidt (1945)→1948 (Heidelberg)
 Niese (1949 PD)→1951 (Mainz)
 Bockelmann (1949 oP)→1959 (Heidelberg)
 Schaffstein (1954 oP)
 Schmidhäuser (1959 oP)→1962 (Hamburg)
 Roxin (1962 oP)
 Grünwald (1963 PD)→1963 (Bonn)

Greifswald (戦後東独の大学となる)
 *Merkel
 v. Gemmingen (1933 PD)→(?)
 Bruns (1939 oP)→1941 (Posen)→(戦後ポ
 ランド領となる)
 Peters (1942 oP)→1946 (Münster)

Halle (戦後東独の大学となる)
 *Finger→1934年 Gerichtssaal に発表したナ
 チス刑法批判の論文未完のまま行方不明
 となった
 Schwinge (1932)→1936 (Marburg)
 Gemmingen (1940 oP)→1943 年より不明

Hamburg→
 Liepmann 1928 (死去)
 Wegner (1924 PD)→1926 (Breslau)
 *E. Schmidt (1929 oP)→1935 (Leipzig)
 Sieverts (1932 PD)→1933 (Marburg)
 Sieverts (1934 oP)
 Tesar (1935 oP)→1949 (引退)
 Henkel (1951 oP)
 Hardwig (1953 PD)→1959 (ao)
 Brauneck (1958 PD)
 Roxin (1962 PD)→1962 (Göttingen)
 Schmidhäuser (1963 oP)

Heidelberg
 Mittermaier (1899 ao)→1900 (Bern)
 Kohlrausch (1903 oP)→1904 (Königsberg)

*Rüdbruch→1949 (死亡)
 *Engelhard
 E. Wolf (1928 PD)→1929 (Rostock)
 Dahm (1932 PD)→1934 (Kiel)
 Engisch (1934 oP)→1953 (München)
 Mittermaier (1938 oP)→1956 (死亡)
 E. Schmidt (1948)→1959 (引退)
 Klug (1950 PD)→1956 (Mainz)
 Gallas (1954 oP)
 Lefrenz (1956 PD)→1959 (ao)→1963 (oP)
 Bockelman (1959 oP)→1962 (München)
 Arthur Kaufmann (1960 PD)→1961 (Saar-
 brücken)
 Hanack (1963 oP)
 Wolff (1963 PD)
 Lackner (1964 oP)

Jena (戦後東独の大学となる)
 Grünhut (1923 ao)→1924 (Bonn)
 *Gerland→1944 (死亡)
 *v. Weber (1928 OP)→1936 (Bonn)
 Lange (1940 ao)→1943 (oP)→1949 (Freie
 Uni. Berlin)

Kiel
 v. Hippel (1891 PD)→1892 (Strassburg)
 E. Schmidt (1926 oP)→1929 (Hamburg)
 *Wolf (1930)→1931 (Freiburg)
 v. Hentig (1931 oP)→1934 (Bonn)
 Dahm (1934)→1939 (Leipzig)
 Schaffstein (1935)→1941 (Strassburg)
 H. Mayer (1944 oP)→1963 (引退)
 Schröder (1948 oP)→1955 (Tübingen)
 Geerds (1959 PD)→1964 (Frankfurt)
 Hellmer (1961 PD)
 Naucke (1964 PD)→1964 (oP)

Köln
 Aschaffenburg→1934 (追放)→1944 (死亡)
 Baumgarten (1920 oP)→1923 (Basel)
 *Bohne (1923 oP)→1957 (死亡)
 Coenders→1963 (死亡)
 Peters (1931 PD)→1942 (Greifswald oP)
 Boldt (1935 PD)→1936 (Königsberg)
 Welzel (1935 PD)→1937 (Göttingen)
 Lange (1951 oP)
 Sax (1952 PD)→1957 (Würzburg)
 Lang-Hinrichsen (1954 HP)→1962 (Mainz)
 Klug (1961 oP)
 Oehler (1961 oP)
 Warda (1961 PD)→1962 (Erlangen)

Königsberg (戦後はソ聯領となった)
 Kohlrausch (1904 ao)→1906 (oP)→1914

(Strassburg)

*Sauer (1916 PD)→1921 (oP)→1935 (Münster)

*Teaar (1920 oP)→1935 (Hamburg)

Gallas (1935 oP)→1940 (Tübingen)

Boldt (1936 PD)→1938 (oP)→従軍

Bockelmann (1940 ao)→1942 (oP)→1949
(Göttingen)

Maurach (1941 ao)→1944 (oP)→1947

(München)

Leipzig (戦後は東独の大学となる)

R. Schmidt (1888 PD)→1890 (ao)→1891

(Freiburg)→(再任・1913 oP)

*Ebermayer

*Lowe

*Exner→1932 (München)

v. Weber (1924 PD)→1926 (Prag)

Stock (1931 PD)→1938 (Berlin)

Busch (1933 PD)→(ao)→1947 (Bonn HP)

Schaffstein (1933)→1935 (Kiel)

E. Schmidt (1935)→1945 (Göttingen)

Dahm (1939)→

Gallas (1942)→1944 (Tübingen)

Mainz (1946年に法経学部新設)

Württemberg (1946)→1955 (Freiburg)

Mergen (1948 ao)

Niess (1951)→1963 (死亡)

Klug (1956)→1960 (Köln)

Noll (1962)

Lang-Hinrichsen (1963 oP)

Marburg

*Mezger (1925 oP)→1932 (München)

Sieverts (1933 ao)→1934 (Hamburg)

Zimmerl (1934)→(Wien?)

Henkel (1934 ao)→1935 (Breslau)

Schwinge (1936)→1940 (Wien)

Stock (1941)→1947 (Saarbrücken)

Schwinge (1946)

Hall (1950 Lb)→1958 (ao)→1960 (oP)

Hanack (1961 PD)→1963 (Heidelberg)

München

*Calker

*Doerr

*Beling (1913)→1933 (死亡)

Frank→1934 (死亡)

Kern (1919 PD)→1920 (Freiburg)

Exner (1933 oP)→1947 (死亡)

Mezger (1932 oP)→1962 (死亡)

Engisch (1932 ao)→1934 (Heidelberg)

Maurach (1947 ao)→1948 (oP)

Engisch (1953 oP)

Blei (1958 PD)→1960 (Lausanne)

Bockelmann (1963 oP)

Münster

Wegner→1954 (東独亡命)

Drost→1956 (死亡)

Sauer (1935 oP)→1962 (死亡)

*Rosenfeld

Siegert (1931 PD)→1933 (Göttingen)

Schröder (1939 PD)→1942 (Graz)

Peters (1946 oP)→1963 (Tübingen)

Oehler (1949 PD)→1951 (Freie Univ.

Berlin)

Baumann (1955 PD)→1960 (Tübingen)

Stree (1962 oP)

Lenckner (1964 oP)

Rostock (戦後東独の大学となる)

v. Hippel (1895 oP)→1899 (Göttingen)

E. Wolf (1929)→1930 (Kiel)

H. Mayer (1930 ao)→1936 (oP)→1944 (Kiel)

Saarbrücken (1947年フランスの手で建設。

1957年西独の大学として新発足)

Stock (1948 oP)→1951 (Würzburg)

Seelig→1955 (死亡)

Mailhofer (1955 ao)→1956 (oP)

Kielwein (1956 ao)→1957 (oP)

Arthur Kaufmann (1961 oP)

Tübingen

Beling (1902 oP)→1913 (München)

*Schoetensack

*Hagler

Mezger (1922 ao)→1925 (Marburg)

Kern (1936 oP)→1957 (引退)

Gallas (1940 oP)→1942 (Leipzig)

Gallas (1948 oP)→1954 (Heidelberg)

Jescheck (1949 PD)→1954 (Freiburg)

Schröder (1955 oP)

Schmidhäuser (1955 PD)→1959 (Göttingen)

Stree (1959 PD)→1962 (Münster)

Baumann (1960 oP)

Armin Kaufmann (1961 ao)→1963 (Bonn)

Göppinger (1962 oP)

Peters (1963 oP)

Lenckner (1963 PD)→1964 (Münster)

Würzburg

*Oetker

Mayer (1928 PD)→1930 (Rostock)

Stock (1951 oP)

Sax (1957 oP)

Spendel (1962 oP)

七 勿論、私は西ドイツの刑法学研究をもつてすべてが終つたと
いうつもりはない。すでに別稿で指摘した通り、現在の西ドイツ刑
法学の現状の姿は、国際性の喪失という冷厳な事実を示している。

にも拘らず、ここにこのような資料を作成した理由は、自分がこ
れまでもにかくにも一〇年に近い年月を費して調べてきた西ドイ
ツ刑法学についての資料を一応まとめておきたいと思つたからであ
る。今後の仕事としては、なるべく早く、一九世紀以来のドイツの
文献を事項別に分類してみたい。或はこれと併行して、ベルギー、
フランス、スイス、オーストリア、イタリーの刑法関係の雜誌論文
を完全な形で整理して、公刊してゆくようになるであらう。

これらの仕事は、実はすでに存在しているべきであつた。だが、
現実にはそれがなかつたのである。完全な資料のカタログがなかつ
たばかりに、我が国にはモノグラフィが生れにくかつたのであ
る。

考えてみれば、この種の文献目録は、個人又は個々の研究室のメ
モとして本来は秘蔵しておくべき性質のものであるかも知れない。
だが、このようなことでは、我が刑法学はいつまでたつても、そ
の場しのぎの、自分が見つけたものだけをつなげる即興詩のごとき
作品の累積を出ないで終る。それでは余りにも情ないではないか。

私の同世代の人々、そして少しあとから刑法学を研究しはじめた
人々が、少なくとも西ドイツの刑法学の文献に関する限り、この資
料によつて各個でそれを調べる時間だけでもはぶけて、実質的検討
にその分だけの時間を余分にかけようよう御利用になるなら幸であ

る。

この資料を作るに当つて、私の勝手な希望をこころよく承諾して
下さり、ザール大学派道を推進して下さつた恩師宮崎澄夫教授に心
からの感謝の意を表したい。又、我が法学部の英修道教授、手塚豊
教授にもここで感謝の意を表明することをお許し願いたい。一つの
資料をもおろそかにせず、問題の核心をつくに当つて、厳密に資料
を蒐集し、検討し、論証するという学問的態度のきびしさを、私は
この御二人からひそかに学んだのである。

又、ザール大学の三人の教授、マイホーフアー、カウフマン(ア
ルトウール)、キールワインの三先生に、ザール大学滞在中の御援助
に対し厚く御礼申上げたい。殊に、キールワイン教授は学長として
私に客員教授の地位を与えて下さつた。又、プラーガ法経学部長、
ヤール法学部研究室主任教授(現法経学部長)、カウフマンの助手の
ハッセマー、バックマンの両君、法経学部研究室の図書係フライデ
インガー氏に対して、多くの御援助をかたじけなうしたことを、感
謝とともに書き記しておきたい。

最後に、若い世代の刑法学者について、その経歴等を調べるすべ
がないので私信によつて調査したが、殆んどの人々がこころよく応
じて下さり、この点でも比較的正確な記述をすることが出来た。誠
にその誠実な態度に頭の下がる思いを禁じえなかつた。それらの人
々とは、ゲールズ、グリーンワルト、ハナク、レンクナー、ナウ
ケ、ロクシン、ワルダの諸教授である。

要するに、本資料はこれらの多くの方々の御厚意と御協力によつ

て成立したものである。

資 料 簿

(1) 佐伯千奴・刑事法講座第二巻三〇九頁。

(2) マクヤホの著者「ハルレ大学のフインガーは一九三三年にナチス刑法の綱領たる「ロシマ司法省の刑法改正論」に対し、雑誌「法廷」誌上で四回にわたって詳細な批判、検討を加えている途中、忽然と消息不明となった。

(3) しかし、その鑑定人論「Der psychiatrische Sachverständige im Prozess, AcP. 1918」は殆んど研究をなしていないらしい。

(4) 後に列記する彼の博士論文と教授資格論文「Der Arzt im Strafrecht, 1939. Ärztliches Strafrecht, in: Personol: Lehrbuch der Gerichtlichen Medizin, 1950, usw. Aktienstrafrecht, in: Grenzkommentar zum Aktiengesetz, bearb. v. Gadaw, Heinichen un, 1940.

(5) この問題について「裁判例一・社会的行政論」『綜合法学』一九六三年一二号三三頁以下。

(6) ノイナリストとしてのシヤンスタインについての研究がなされている。

(7) ドイツ刑法学の現状と評論「シヨリヌト三二三号」をけるその巻首・特に四四頁、四九頁参照。

(8) ラートンレン著・菊池栄一・宮沢浩一共訳・「法律家の生涯」オースカが第一五頁以下。

(9) 宮沢浩一・一九六四年度西ドイツ刑法学会の情況・法律のひろき一七頁九号三二頁。

(10) Gearda, Grünwald, Hanack, Lanckner, Neucle, Roxin, Wanda

以下に示して使用する諸書は次の通りである。

- AcP.....Archiv für civilistische Praxis. Ann. Uni. Sar.....Annales Universitatis Saraviensis. ARSP.....Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie. BB.....Betriebsberater. DAR.....Deutsches Außenrecht. Deutsche Beiträge.....Deutsche Beiträge zum VII. Internationalen Strafrechtkongress in Athen 1957. DJZ.....Deutsche Juristenzeitung. DR.....Deutsches Recht. DRiZ.....Deutsche Richterzeitung. DRW.....Deutsche Rechtswissenschaft. DRZehr.....Deutsche Rechts-Zeitschrift. DS.....Deutsches Strafrecht. DVBl.....Deutsches Verwaltungsblatt. Euf.....Ehe und Familie im privaten und öffentlichen Recht (ab 1962 Zeitschrift für das gesamte Familienrecht) / Frag. d. Todesstr.....Fragen der Todesstrafe, 1962. GA.....Goldsammer's Archiv für Strafrecht. GS.....Gerichtssaal. Jb. f. OR.....Jahrbuch für Österreich.....Juristische Blätter. JfB.....Juristenjahrbuch. JR.....Juristische Rundschau. Jus.....Juristische Schulung. JW.....Juristische Wochenschrift. JW1.....Jugendwohl. JZ.....Juristenzeitung. K.Biol.G.....Gegenwartfragen der kriminalbiologischen Gesellschaft. MDR.....Monatsschrift für Deutsches Recht. MKKri.....Monatsschrift für Kriminologie und Strafrechtsreform. NJW.....Neue Juristische Wochenschrift. N. Pol.....Neue Polizei. Öf. Verw.....Öffentliche Verwaltung. Pol. Pra.....Polizeiliche Praxis. Rev. int. öff. soc.....Revue Internationale de Defense Sociale. Rev. int. dr. pén.Revue Internationale de droit pénal comparé. StZ.....Städtische Juristenzeitung.

Schw, ZSStr..... Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht. St. Gen.....
 Studium Generale. Summa Iururia usw. 1963..... Summum ius summa
 Iuris. Individualgerechtigkeit und der Schutz allgemeiner Werte im
 Rechtsleben. 1963. Sus..... Schuld und Sühne. 1960. Univ..... Univer-
 sitas. Univ. Tag..... Universitätstag. ZF..... Zeitschrift für das ge-
 samte Familienrecht. ZAK..... Zeitschrift der Akademie für deutsches
 Recht. ZZP..... Zeitschrift für Zivilprozess. ZStrw..... Zeitschrift
 für die gesamte Strafrechtswissenschaft. ZStaw..... Zeitschrift für
 die gesamte Staatsrechtswissenschaft. ZStvVoll..... Zeitschrift für Stra-
 fverfolgung.

バウマン (Jürgen Baumann)

一九三二年六月二日、ヒュッセンに生れた。父親は商人である。
 一九五〇年、ミュンスター大学のヘーターースに *Die Normanalyse*
 を提出して学位を得た。この論文はタイプ印刷で、公刊されていな
 い。一九五五年にミュンスター大学私講師となった。請求論文は、
Der strafrechtliche Schutz bei dem Sicherungsgebrechen des modernen
Wirtschaftsverkehres. Zugleich ein Beitrag zur Lehre von der
Abhängigkeit des Strafrechts vom Zivilrecht. 1956. 248p.
 一九六〇年にチュービンゲン大学教授に転身した。今日に同じい
 50。

以下にあげる著作群に見られる通り、その研究分野の広がりと、
 発表された論文数の多量とは驚くべきものがある。法律問題でも

積極的に発言するし、いわゆる勘のいい作品が多いが、掘り下げの
 不足が欠点である。現在までの三版を重ねている教科書は学生を対
 象としているためか、説明が少しくさいように思われる。

がしりした体積、批判をものともしない面構えで、随筆持校を
 思わせる。一九六三年に刑法草案の総則私案を発表して、学会をお
 つとめ言わず、シットリット、ラッタナーから強い批判を受けたが、そ
 れぞれに反論を書いた。

著書

Strafrecht. Allgemeiner Teil. 1. Aufl. 1960, 2. Aufl. 1961, 3.
 Aufl. 1964. / Zur Problematik der Bestehungsstatbestände,
 1961. / Grundbegriffe und Systeme des Strafrechts. Eine Ein-
 führung an Hand von Fällen, 1962. / Entwurf eines Straf-
 gesetzbuches. Allgemeiner Teil, 1963.

論文

私講師時代に弁護士を兼ねていたためか、民事法との関連領域を
 手がけたものが多く。

Penalisierung von Kaufverträge durch Eigentumsvorbehalt. Z
 Strw. Bd. 68, 1956. S. 522 ff. / Schuldtheorie und Verbotswir-
 tun im Zivilrecht? AcP. 1956, S. 495 ff. / Pfandenrickung
 beim Verkauf gefündeter Gegenstände, NJW. 1956, S. 1866 ff. /
 Änderung des Prozessgegenstandes im Zivil- und Strafprozess. ZZ
 P. Bd. 69, 1956. S. 356 ff. / Beitrag durch vom Geschäftspartner
 nicht verstandene Vertragsformulierung, JZ. 1957, S. 367. ff. /

Strafverechnung, EuF. 1957, S. 234 ff. / Wahrheit der Urteilgründe, NJW. 1957, S. 1017 ff. / Der Erfolg als Causa des Erfolges, JR. 1957, S. 415 ff. / Die Rechtswidrigkeit der fahrlässigen Handlung, MDR. 1957, S. 646 ff. / Poena extraordinaria (Zugleich eine Entgegnung zu GA 1955, S. 40 ff.), GA 1957, S. 405 ff. / Kritische Gedanken zur Beseitigung der er-folgsqualifizierten Delikte, ZStrw., Bd. 70, 1958, S. 227 ff. / Die Anklagenkatalogen im Strafrecht (Weitere kritische Bemerkungen zur Beseitigung der Erfolgsrelevanz), GA 1958, S. 193 ff. / Die natürliche Wortbedeutung als Auslegungsgrenze im Strafrecht, MDR. 1958, S. 394 ff. / Mittelbare Täterschaft oder Anstiftung bei Fehlverstellung über den Tatmittler? JZ. 1958, S. 230 ff. / Die Beweislast bei § 199 StGB, NJW. 1958, S. 452 ff. / Körperverletzung oder 'Freiheitsdelikte'? NJW. 1958, S. 2092 ff. / Straftatene Nachtat und Gesetzeskonkurrenz, MDR. 1959, S. 10 ff. / Sperrkraft der mit unzulässigen Mitteln herbeigeführten Aussage, GA. 1959, S. 33 ff. / Der Briefverkehr des Untersuchungs-gefangenen, DRiZ. 1959, S. 379 ff. / Schuldvermutung im Ver-kehrsstrafrecht? NJW. 1959, S. 2293 ff.

ホトコトハシメテ欺誘出獄 Implizierte Rechtswidrigkeit bei Tatbestandsfassung, JZ. 1960, S. 8 ff. / Zur Diskussion um die Todesstrafe, ARSP. 1960, S. 73 ff. / Prima facie Beweis in Strafproben, MDR. 1960, S. 355 ff. / Probleme der Fahrlässig-

keit bei Strassenverkehrsunfälle, K. Biol. G. 1960, S. 100 ff. / Justiz und Politik, JZ. 1961, S. 18 ff. / Zur Teilbarkeit des Unrechtsbewusstseins, JZ. 1961, S. 564 ff. / Amtsunternehmung und Betrug, NJW. 1961, S. 1141 ff. / Notwehr im Strassenverkehr? NJW. 1961, S. 1745 ff. / Zur Problematik der Bestechungstatbestände, BB. 1961, S. 1057 ff. / Die Bedeutung des Artikels 2 GG für die Freiheitsbeschränkung im Strafprozess, F. E. Schmidt. 1961, S. 525 ff. (梁六・宋繼英著 吳新濤譯 卅一第 1 冊) / Verkehrsgefährdung als Ordnungswidrigkeit, Dogma und Praxis, in: Folgenlose Verkehrsgefährdung als Massenerrechnung, 1961, S. 162 ff. / Annahme von Belohnungen und Geschenken durch Bundesbedienstete, BB. 1962, S. 503 ff. / Halbt den Dieb! (Trunkenheit am Steuer) DAR. 1962, S. 93 ff. / Zur Verfassungsmässigkeit des § 2 Abs. 4 VZwG, Eine Erwiderung, DVBl. 1962, S. 806 ff. / Schuld und Verantwortung, JZ. 1962, S. 41 ff. / Neue Haftgründe, JZ. 1962, S. 649 ff. u. 689 ff. / Rechtsmissbrauch bei Notwehr, MDR. 1962, S. 349 ff. / Das Umkehrverhältnis zwischen Versuch und Irrtum im Strafrecht, NJW. 1962, 16 ff. / Die Täterschaft in der Rechtsprechung des BGH, NJW. 1962, S. 374 ff. / Das Verhalten des Täters nach der Tat, NJW. 1962, S. 1793 ff. / Schuld und Verantwortung, Ein Beitrag zur juristischen Würdigung des Falles Eisemann, Frei-burger Rundbrief. 1962, S. 29 ff. / Täterschaft und Teilnahme,

Just. 1963. S. 51 ff., 85 ff. u. 125 ff. / Gedanken zum Eichmann-Urteil. JZ. 1963. S. 110 ff. / Von den Möglichkeiten einer Landzeitgestrafe. JZ. 1963. S. 733 ff. / Strafbare Demokratie? MDR. 1963. S. 87 ff. / Zum Entwurf eines StGB. MDR. 1963. S. 802 ff. / Beihilfe bei eigenhändiger voller Tatbestands Erfüllung. NJW. 1963. S. 561 ff. / Grenzen der individuellen Gerechtigkeit im Strafrecht, in: Summa Iuris etc. 1963. S. 117 ff. / Nicht einmal zur ethischen (kriminalologischen) Indikation. ZF. 1963. S. 225 ff. / Eine Auseinandersetzung zum Allgemeinen Teil eines künftigen StGB. GA. 1964. S. 193 ff. / Kritische Gedanken zur Disziplinarrate. JZ. 1964. S. 612 ff. / Unabhängige und abschließende politische Reinigung der deutschen Justiz. JZ. 1964. S. 737 ff. / Die Dienst- und Vollzugsordnung vom 1. 12. 1961. MKrim. 1964. S. 57 ff. / Mißbrauch polizeilicher Auftragsbescheide. NJW. 1964. S. 705 ff. / Rechtsämlichkeit von Mordgeboten. NJW. 1964. S. 1398 ff. / Der Schutzgedanke im heutigen deutschen Strafrecht und vom Sinn staatlichen Strafers. JBL. 1965. S. 113 ff. Beeinträchtigung der Verbrechenverfolgung durch die Strafverweigerer? Jus. 1965. S. 172 ff. / § 53 StGB als Mittel der Selbstjustiz gegen Erpressung? MDR. 1965. S. 346 ff.

トノノ (Hermann Blei)

トノノについては余りきくごんが知られていない。年齢は四〇代の半ばを要知しているであろう。東京の「キーンケン」大学のメンターの下の助手をして語り、その刑法教授の巻第九版から改訂の手紙をして見た。

学位論文も、論文論文も公刊されていらないようである。一九六〇年「ロース」のローキーン大学教授、一九六二年「ヘルリン」自由大学に就任。今ロロロロロ。

梅原
Menzger-Blei: Strafrecht. Studienbuch. Allgemeiner Teil. 10. Aufl. 1963. Besonderer Teil. 8. Aufl. 1964.

「トノノ」の刑法知識は、制限された。Beschränktes Auftragsrecht des Meletern. NJW. 1953. S. 211 ff.

「トノノ」の刑法知識は、制限された。Beschränktes Auftragsrecht des Meletern. NJW. 1953. S. 211 ff. Wahlfeststellung zwischen Vorwitz und Fahrlässigkeit. NJW. 1954. S. 500 ff. / Zum strafrechtlichen Gewaltbegriff. NJW. 1954. S. 583 ff. / Nochmals: Sind auch die vor dem 1. 10. 1953 in ein Arbeitshaus Eingewiesenen stets schon nach 4 Jahren zu entlassen? NJW. 1954. S. 1756 ff. / Sind Eltern und Kinder des Getöteten Verletzte im Sinne des § 172 StPO? NJW. 1955. S. 332 ff. / Probleme des polizeilichen Waffengebrauchs. JZ. 1955. S. 625 ff. / Die Beeinträchtigung der Straßenverkehrssicherheit als Tatbestandsmerkmal des § 315 a StGB. NJW. 1957. S. 620. / Falschverständigung durch Beweis-

mittelaktion. GA. 1957. S. 139 ff. / Das bayerische Landesstraf- und Verordnungsgezet. JZ. 1957. S. 602 ff.

ローレンス大学教授兼任 出版家 Der Strafrechtsschutz von Familienordnung und Familienpflicht. EuF. 1961. S. 137 ff. / Die Staatsgerichtungsverfuehen des § 94 StGB. GA. 1961. S. 225 ff.

ヘルリン自由大学教授 Edmund Mezger Jr. 1962. S. 175 f. / Abtreibung und Schwangerschaftsunterbrechung. ZF. 1962. S. 403 ff. / Einzelfragen der Strafrechtsnorm: Idee und Wirklichkeit. Univ. Tag. 1964. S. 90 ff.

ボッケルマン (Paul Bockelmann)

一九〇八年二月七日、ハノーバーに生れた。ヘルリン大学のホルラウシュエのもとで学位をとり(Hogels Notarandichte, 1935)、『一九三九年にヘルリン大学私講師となった(Stücheln zum Täterstrafrecht, Bd. 1 n. 2, 1939, 1940)——下は藤正・ホッケルマンの行方著刑法定論とドイツ刑法改正・刑事法学の基本問題(九三頁以下)』一九四〇年ケーニヒスヘルク員外教授、一九四二年正教授となり、一九四五年ゲッティンゲン大学(一九四九年より正教授)、『一九五九年ハイデルベルク大学に転じ、一九六三年にミュンヘン大学から招聘を受け、現び同大学教授である。』

はげ上つた頭、鋭く光る眼、押し出しの立派な容姿であり、弁舌が上手であつて説得力のある議論をする。若手の教授達の話もよく聞けるが、学界のまらめ役としても貴重な存在である。

著書

ミュンヘン大学教授兼任 Über das Verhältnis von Täterhaft und Teilnahme. 1949. / Die Unverföglbarkeit der Abgeordneten nach deutschem Immunitätsrecht. 1951. / Gesetzrecht und autonomes Recht. 1953. / Strafrechtliche Untersuchungen. 1957.

ハイデルベルク大学教授兼任 Aufgaben und Ausichten der Hochschulreform. Zur Hochschulkritik und hochschulpolitischen Lage. 1962.

『ミュンヘン大学教授兼任 Einführung in das Recht. 1963. 発行年因不明の『Einheit und Selbstbestimmung der „Dritten Gewalt“』』

論文

ケーニヒスヘルク大学教授兼任 Der Tätergedanke im Strafrecht. Bemerkungen zu dem Buch von Georg Dahm „Der Täkertyp im Strafrecht“. ZAK. 1940. S. 311 ff. / Zur Lehre von der Idealkonkurrenz. ZAK. 1941. S. 293 ff. / Die Verordnung zum Schutz gegen jugendliche Schwerverbrecher. ZStrw. Bd. 60. 1941. S. 351 ff. / Tatstrafe und Täterstrafe. ZStrw. Bd. 60. 1941. S. 417 ff. / Der Unrechtsgehalt des Betruges. F. t. Kohrausch. 1944. S. 226 ff.

ゲッティンゲン大学教授兼任 Cesare Lombroso. Pol. Pra. 1949. S. 56 ff. / Franz Exner. Pol. Pra. 1949. S. 214 ff. / Strafe und Erziehung. F. t. Gierke. 1950. S. 27 ff. / Kasper Hansen. Pol.

Pr. 1950. S. 186 ff. / Über das Verhältnis der Hehlerei zur Vortat. NJW. 1950. S. 850 ff. / Über den Begriff der betrüglichen Abocht im Sinne des § 265 KGB. StJZ. 1950. S. 682 ff. / Franz von Liszt. JZ. 1950. S. 154 ff. / Der Diebstahl aus Fahrzeugen. Zugleich ein Beitrag zu den Begriffen „ungeschlossenere Raum“ und „Behältnis“. JZ. 1951. S. 296 ff. / Zur Reform des Strafsystems. JZ. 1951. S. 494 ff. / Die Entwicklung der Kriminalität seit der Währungsreform. Kriminal. 1951. S. 105 ff. / Über das Verhältnis der Begünstigung zur Vortat. NJW. 1951. S. 620 ff. / Zur Schuldlehre des Obersten Gerichtshofes. ZStw. Bd. 63, 1951. S. 13 ff. (梁小・平野龍一) 既決罪刑|梁|平|平|既決| / Zum Begriff des Vermögensschaden beim Betrug. JZ. 1952. S. 461 ff. / Geschäftverteilung und gesetzlicher Richter. JZ. 1952. S. 641 ff. / Zur Strafbarkeit der Scheinauspielung. N. JW. 1952. S. 855 ff. / Richter und Gesetz. F. 1. Smend. 1952. S. 23 ff. / Zur Strafbarkeit der Scheinauspielung. Kriminal. 1953. S. 35 ff. / Ist eine berechtigte Auslegung des § 246 StGB statthaft? MDR. 1953. S. 3 ff. / Zur Problematik der gerichtlichen Selbstverwaltung. öf. Verw. 1953. S. 525 ff. / Vom rechten politischen Handeln. Bemerkungen zu Stifters „Witiko“. F. 1. Niedermeyer. 1953. S. 7 ff. / Nochmals über das Verhältnis von Täterschaft und Teilnahme. GA. 1954. S. 193 ff. / Ist die Weitergabe ehrverletzender Tatsachen strafbar, die der Beleidigte

selbst mitgeteilt hat. JR. 1954. S. 327 ff. / Zur Strafbarkeit der Kuppelrei. JR. 1954. S. 361 ff. / Zur Abgrenzung der Vorbereitung vom Versuch. JZ. 1954. S. 468 ff. / Wie würde sich ein konsequentes Täterstrafrecht auf ein neues Strafgesetzbuch auswirken? Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 29 ff. (梁小・井田田郎) 主犯と共犯の区別|既決罪刑| / Zum Problem der Meidhilfe durch Unterlassen. NJW. 1954. S. 697 ff. / Der Nachweis des Helturvortatzes. NJW. 1954. S. 1745 ff. / Die Behandlung unvollkommener Verbindlichkeiten im Vermögensstrafrecht. F. 1. Mejer. 1954. S. 363 ff. / Die jüngste Rechtsprechung des Bundesgerichtshofes zur Abgrenzung der Vorbereitung vom Versuch. JZ. 1955. S. 193 ff. / Strafrichter und psychologische Sachverständiger. GA. 1955. S. 321 ff. / Wann ist der Rücktritt vom Versuch freiwillig? NJW. 1955. S. 1417 ff. / L'orientation moderne des notions d'auteur de l'infraction et de participation à l'infraction. Rev. int. dr. pén. 1956. p. 167 ff. / Strafprozessuale Zuständigkeitsordnung und gesetzlicher Richter. GA. 1957. S. 357 ff. / Die moderne Entwicklung der Begriffe Täterschaft und Teilnahme im Strafrecht. ZStw. 1957 (Deutsche Beiträge) S. 46 ff. (梁小・橋本邦雄) 既決罪刑|梁|平|平|既決| / Entspricht die Zuständigkeitsordnung im Strafprozess dem Grundgesetz? NJW. 1958. S. 889 ff.

主犯と共犯の区別|既決罪刑| Zur Problematik des Diebstahls

1964. S. 211 ff.

フリンネマン (Anna-Eva Brauneck)

フリンネマン大学のシーバース教授のもとで主として少年法、少年犯罪を手がけている人である。一九三六年に *Postleitzers Stellung zu den Strafrechtsproblemen. Strafrechtliche Abhandlungen Nr. 367.* で学位をとり、一九五八年に私講師となった。講義論文は *Die Entwicklung jugendlicher Straftäter, 1961.* である。

若い人を対象としていたが、五〇歳近い老練なのに驚いた。小松が、やせた体躯にフリンネマンをひめづける。師のシーバース職りの近代的な思索を示す作品を発表している。刑事学は刑法は何を残すか、と題する論文でボン大学のヒルデ・カウフマン女史と論争したことが有る。

備註

Gepräch mit der deutschen Jugend, 1954. / Zum Schulstrafrecht des neuesten Entwurf eines Strafgesetzbuches. MKrim. 1958 S. 129 ff.

矢野龍渓博士 Der strafrechtliche Schuldgegriff. GA. 1959. S. 261 ff. / Zu Lombrosos Methode. MKim. 1961. S. 230 ff. / Die kriminell schwer gefährdeten Minderjährigen. MKrim. 1963. S. 12 ff. / Was lässt die Kriminologie vom Strafrecht übrig? MKrim. 1963. S. 193 ff.

aus Fahrzeugen. JZ. 1959. S. 653. / Zur Auslegung des § 164 Abs. 5 StGB. NJW. 1959. S. 1849 ff. / Zur Konkurrenz der Vermögensdelikte. JZ. 1960. S. 621 ff. / Der Strafgesetzentwurf 1960 und seine Kritiker. Jfb. 1960. S. 90 ff. / Öffentlichkeit und Strafrechtspflege. NJW. 1960. S. 217 ff. / Das strafrechtliche Risiko des Verkehrsteilnehmers. NJW. 1960. S. 1277 ff. / Zur Reform des Verkehrsstrafrecht. DAR. 1961. S. 181 ff. / Betrug trotz ausreichender Glaubigersicherung. NJW. 1961. S. 145 ff. / Rechtliche Grundlagen und rechtliche Grenzen der ärztlichen Aufklärungs Pflicht. NJW. 1961. S. 945 ff. / Stand der Strafrechtsreform. Vortr. Hess. Hochschulw. 1961. S. 138 ff. / Betrug verübt durch Schweigen. F. f. E. Schmidt. 1961. S. 437 ff. (塚本大祐博士、米村龍雄博士、米村大祐博士、田中良一博士) / Operativer Eingriff und Einwilligung des Verletzten. JZ. 1962. S. 525 ff. / Gedanken zur Vereinfachung des Verkehrsstraf- und Verkehrsrechts für folgenlose Gefährdungsdelikte, in: Folgenlose Verkehrsgefährdung als Massenerscheinung. 1961. S. 181 ff. / Die rationale Gründe gegen die Todesstrafe. Frag. d. Todesstr. 1962. S. 137 ff.

フリンネマン博士の著書 Das rechtliche Gehör im Verkehrsstrafprozess. DAR. 1963. S. 231 ff. / Krabstherapie als Rechtsfrage. NJW. 1963. S. 380 ff. / Willensfreiheit und Zurechnungsfähigkeit. ZStw. Bd. 75. 1963. S. 372 ff. / Das Problem der Zulässigkeit von Schwangerschaftsunterbrechungen. Univ. Tag.

ホルンズ (Hans Jürgen Bruns)

一九〇八年三月二八日、テューレンに生れた。一九三一年、フランクフルト大学教授バウムガルテンのもとに提出した論文 *Können die Organe juristischer Personen, die im Interesse ihrer Körperschaften Rechtsgüter Dritter verletzt, bestraft werden?* (Zugleich ein Beitrag zur Methode der Rechtsanwendung im Strafrecht und zur strafrechtlichen Beurteilung der Einmangelschaft) *Strafrecht, Abhandl.* Nr. 285, 1931. で学位を取得した。ハヤムガルテンはその後一九三三年にスイスのバーゼル大学に転じたので、ホルンズはフランクフルト大学のホンケルのもとに学び、断々としてフランクフルト大学に転じてから一九三八年に請求論文 *Die Befreiung des Strafrechts vom strafrechtlichen Denken. Beiträge zu einer selbständigen, spezifisch strafrechtlichen Auslegung und Begriffsbildungslehre*, 1938. を公刊し、同年グライムスフルト大学私法講座、一九三九年員外教授に任じられた。一九四一年ポーツランドのハーゼン大学 (当時ドイン領であった。現在はボンナン Pönan と改称) の教授に転じた。戦後は一九五二年にホルランタン大学教授に就任して今日に至っている。

著書

ホルランタン大学に在任中の作品 *Der untaugliche Täter im Strafrecht*, 1955. / *Teilrechtskraft und Interprozessuale Bindungswirkung des Strafurteils*, 1961.

論文

フランクフルト大学助手時代 *Die Organeigenschaften des Täters als Strafänderungsgrund beim Handeln zugunsten der Körperschaften*, DJ, 1934, S. 1583 ff. / *Die „Beurteilung aus dem mildesten Gesetz“ bei wahlbedeutiger Tatfeststellung* (§ 2 b StGB), DS, 3. Jg., 1936, S. 277 ff.

フランクフルト大学時代に *Zur Frage der Strafbarkeit des „Versuchs“ eines untauglichen Subjekts. Änderung der bisherigen Rechtsprechung des Reichsgerichts? DS, 5. Jg., 1938, S. 161 ff.* / *Die Bedeutung des krankhaften oder rauschbedingten Irrtums für die Feststellung einer mit Strafe bedrohten Handlung im Sinne der §§ 42 b und 330 a StGB*, DJ, 1939, S. 225 ff. / *Zur Frage der Autonomie der strafrechtlichen Begriffsbildung*, DRW, 1940, S. 300 ff.

フランクフルト大学教授時代に *Beweiserhebung und gerichtliche Aufklärungspflicht*, ZAK, 1941, S. 112 ff. / *Erweiterung des selbständigen Strafzumessungsbedingnisses des Revisionsgerichts*, ZAK, 1941, S. 143 ff. / *Untreue durch Bildung „schwarzer Kassen“*, ZAK, 1941, S. 268 ff. / *Zur Lehre vom Täkertyp der Volksschädlingens-VO*, ZAK, 1941, S. 398 ff. / *Über Häufung und Auswahl konkurrierender Sicherungsmaßnahmen (§ 42 n StGB)*, ZStw., Bd. 60, 1941, S. 474 ff. / *Zur Verhängung der Todesstrafe nach § 1 der Strafgesetzbuchnovellen v. 4. 9. 1941*, ZAK, 1943, S. 53 ff.

フランクフルト大学教授時代に *Das Verbotnis des Heiratschwind-*

bers im Zivil-, Straf- und Prozessrecht. MDR. 1953. S. 458 ff. /
 über die Organ- und Vertreterhaftung im Strafrecht. JZ. 1954.
 S. 12 ff. / Sicherungsregeln und Verschlechterungsverbot.
 Ein Beitrag zur Reform des Strafverfahrensrechts. JZ. 1954, S.
 730 ff. / Die Entziehung der Fahrerlaubnis (§ 42 m StGB, § 111
 a StGB). Ein Rückblick auf Rechtsprechung und Lehre aus dem
 ersten Jahr seit dem Inkrafttreten des Gesetzes zur Sicherung des
 Straßenverkehrs vom 19.12.1952. GA. 1954. 161 ff. / Urkun-
 denfälschung an Stimm- und Wahlzetteln? NJW. 1954. S. 456 ff. /
 Untreue im Rahmen rechts- oder sittenwidriger Geschäfte? NJW.
 1954. S. 857 ff. / Nochmals: Urkundenfälschung an Stimm-
 und Wahlzetteln? Ein notwendiges Wort der Erwiderung zur
 Methode der Rechtsfindung im Strafrecht. NJW. 1954. S. 948
 ff. / Zur neuesten BGH-Rechtsprechung über die Hehlerei des
 „Gewerbegehilfen“. NJW. 1954. S. 1597 ff. / Gilt die Strafrechts-
 ordnung auch für und gegen Verbrechen untereinander? F. f.
 Mezger. 1954. S. 335 ff. / Zur Frage der passiven Beleidigungs-
 fähigkeit handelsrechtlicher Kapitalgesellschaften im Strafrecht.
 NJW. 1955. S. 689 ff. / Venire contra factum proprium im
 Strafrecht? JZ. 1956. S. 147 ff. / Zum gegenwärtigen Stand der
 Strafrechtslehre. NJW. 1956. S. 241 ff. / Die Strafau-
 setzung zur Bewährung (Ein Rückblick auf Rechtsprechung und
 Lehre seit dem Inkrafttreten der §§ 23 ff. StGB n. F.) GA. 1956.

S. 193 ff. / Zur strafrechtlichen Diskussion über das Züchtigungs-
 recht des Lehrers. JZ. 1957. S. 410 ff. / Bindet die Rechtskraft
 deklaratorischer Urteile der Zivil- und Verwaltungsgerichte auch
 den Strafrichter? Ein Beitrag zur Präzisierung der Problemstellung
 an Hand der Entscheidung BGH St. 5. 106. F. v. Lent. 1957 S.
 107 ff. / Zur neuesten Rechtsprechung über die Strafbarkeit der
 Volltrunkenheit. JZ. 1958. S. 105 ff. / Praktische Betrachtungs-
 weise und Organhaftung. JZ. 1958. S. 461 ff. / Richterliche
 Überzeugung bei „Prognose-Entscheidung“ über Sicherungsmaß-
 regeln. Zugleich ein Beitrag zum Geltungsbereich des Grundgesetzes
 in dubio pro reo. JZ. 1958. S. 647 ff. / Wann beginnt die Ver-
 folgungsverjährung beim bewusst fahrlässigen Erfolgsdelikt? NJW.
 1958. S. 1257 ff. / Die Massregeln der Besserung und Sicherung
 im StGB-Entwurf 1956. ZStw. Bd. 71. 1959. S. 210 ff. /
 Rechtsgrundlage und Zulässigkeitsgrenzen strafrechtlicher Aufsa-
 gen und Weisungen. GA. 1959. S. 193 ff. / Zur rechtsdogma-
 tischen Problematik strafrechtlicher Aufgaben. NJW. 1959. S.
 1393 ff. / Unterhaltspflichtverletzung und Gleichberechtigung.
 (Pflichterfüllung der Mütter als „Strafauusschließungsgrund“ für
 den pflichtvergesenen Vater?) Euf. 1959. S. 129 ff. / Die
 Grenzen der eideslichen Wahrheitspflicht des Zeugen, insbesondere
 bei Tonbandaufnahmen über unwichtige Aussagen im Strafprozess.
 GA. 1960. S. 161 ff. (原六・刑集一・433頁以下) /

Rechtliche der Rechtskraft des Straferlasses die subjektive Vertiefung hinsichtlich eingetretener strafrechtlicher Tatfolgen? JZ. 1960, S. 585 ff. / Der Verwecker im heutigen Strafrecht. StS. 1960, S. 14 ff. / Recht und Gnade. StS. 1960, S. 107 ff. / Zur Rechtskraftwirkung des rechtskräftigen Strafurteils. F. t. R. Schmidt, 1961, S. 602 ff. (紹介・松本重直訳、法學雑誌七〇巻四七七頁以下) / Die „Generalprävention“ als Zweck und Zusammenhangsgrund der Strafe? Eine Analyse der Rechtsprechung. F. t. v. Weiser, 1963, S. 75 ff. / Zur Problematik rauber, Frankheits- oder Jugendbedingter Willensmängel des schuldunfähigen Täters im Straf-, Sicherungs- und Schadensersatzrecht. JZ. 1964, S. 473 ff.

リヒャルト (Richard Buech)

一八九三年一月十七日、ドレスデンに生れた。ライプツヒヒ大学のライプホルト・リヒャルトの息子として誕生した。論文、*Dringung und Betrag. Ein Versuch der Abgrenzung beider Delikte gegenstandslos*. 1922. 学位を取得し、一九三三年に法曹となつた (*Grenzfragen der strafrechtlichen Verantwortlichkeit der Verbände*, 1933)。その後、同大学員外教授のかたわら、各地の裁判官を歴任し、戦後は連邦裁判所裁判官として活躍する一方、ボン大学の員外教授として論陣をはつていた。その論説の寄与が著るることながら、一九五二年三月一八日の雑誌に関する有名な判決を執筆したことも見のがせ

ない。この判決を契機として目的的行为論が強力な論陣をはつたことからはえて、リヒャルトの功績大なるものがある (いひながら、今だからリヒャルトの論文 *Das Bekantnis des BGH zur Schuldtheorie*, DRiZ. 1952, S. 111 ff. が、発表された雑誌の性格といひ、その内容といひ非常に大きな影響を突務に与えたことを指摘しておきたい)。案外、こうした事実を日本の学界では見逃して居る。目的的行为論はこの二人の突務家兼字者として活躍がためをられたのである。

著書

リヒャルト著、*Betrag durch Verschweigen*. 1934. / *Strafrecht und Strafprozessrecht*. 1940.

ボン大学時代 *Moderne Wandlungen des Verbrechenslehre*. 1949 (紹介・福田平、*刑法雑誌*二巻一号一八七頁以下、翻訳・香川達夫、*刑法學園*巻一号一頁以下)

論文

ライプツヒヒ大学教師時代 *Kritische Bemerkungen zum politischen Strafgesetzbuch*. ZStw. Bd. 55. 1936, S. 621 ff. / *Betrag durch Verschweigen*. F. t. R. Schmidt. 1936, S. 119 ff. / *Die systematische Behandlung der sog. Vermögensdelikte im Kommentaren Strafrecht*. ZStw. Bd. 56. 1937, S. 676 ff. / *Zur Neuordnung des Strafverfahrensrechts*. MKrI. 1938, S. 88 ff. / *Wesenszüge des kommenden Strafverfahrens*. MKrI. 1940, S. 193 ff. u. 235 ff.

ボン大学時代 *Das Verbrechen gegen die Menschlichkeit als*

Grundlage des Organisationsverbrechens. ZentJurbI. f. krit. Zone. 1949. / Die Rechtspflicht zur Hilfeleistung ergibt sich aus dem Gebot der guten Sitten. SJZ. 1949. S. 650 ff. / Die ersten zwei Bände der strafrechtlichen Entscheidungen des Bundesgerichtshofs. DRIZ. 1953. S. 44 ff. / Der Verbotstrittum. Deut. L. Ref. z. f. Int. Kong. f. Regl. Paris. 1954. / Über die Abgrenzung von Tatbestands- und Verbotstrittum. F. f. Mezerger, 1954. S. 165 ff. / L'erreur de droit. Rev. int. dr. pén. T. 26. 1955. p. 309 et suiv. / Zum Verhältnis von unethischer Falschaussage und Meineid. G. A. 1956. S. 257 ff. / Zum Verbrauch der Strafklage bei späterer Erkenntnis anderweitiger Tatgestaltung. ZStr.w. Bd. 68. 1956. S. 3 ff. / Die Bände 3-7 der strafrechtlichen Entscheidungen des Bundesgerichtshofes. DRIZ. 1956. S. 124 ff. / Le contrôle du pouvoir d'appréciation du juge dans la détermination des peines et des mesures de sûreté. Rev. int. dr. pén. 1956. P. 246 ff. / Die Kontrolle der Ermessensfreiheit des Richters bei der Festsetzung von Strafen und sichernden Massnahmen. ZStr.w. 1957 (Deutsche Beiträge) S. 101 ff. (原々・藤木義典・若林修・佐藤三郎・中川ハルヒ) / Über die vorläufige Tötung. F. f. Rittler. 1957. S. 257 ff. / Entscheidungen des Bundesgerichtshofs zum Allgemeinen Teil des Strafgesetzbuches (Bände 8 bis 13). DRIZ. 1960. S. 208 ff. / Die Rechtsprechung des grossen Senats für Strafsachen des Bundesgerichtshofs. DRIZ. 1960. S. 347 ff. / Zum Zeugnis- und Unter-

suchungsverweigerungsrecht der Angehörigen des Beschuldigten. F. f. E. Schmidt. 1961. S. 569 ff. (原々・米澤英敏・若林修典・中川ハルヒ) / Entscheidungen des Bundesgerichtshofs zum Besonderen Teil des Strafgesetzbuchs. DRIZ. 1962. S. 343 ff. / Begründung, Anfechtung und Revidibilität des Verwertungsurteils der §§ 329 I und 412 I StPO. JZ. 1963. S. 457 ff. / Zur gesetzlichen Begründung der Strafbarkeit unethischen Unterlassens. F. f. v. Weber. 1963. S. 192 ff. (原々・中川ハルヒ・若林修典・中川ハルヒ) / Entscheidungen des Bundesgerichtshofs zum Allgemeinen Teil des Strafgesetzbuchs. (Bände 14-18) DRIZ. 1964. S. 188 ff. / Die Zuständigkeit zur Berichtigung des Hauptverhandlungsprotokolls. JZ. 1964. S. 746 ff.

ウィルヘルム (Wilhelm Class)

一九〇一年五月二六日、タルミンネキヤットに生れた。一九三五年、マンハイムに大キム・コンネルに提出した論文 *Der Begriff des Ministeriums von Savigny auf das preussische Strafgesetzbuch von 1851*. 1925. に学位を授けられた。その後、フライブルック大学のケマン・教授の助手となり、一九三三年に教授となった。著書論文は *Grenzen des Tatbestandes. Versuch eines Abrisses der Tatbestandslehre, erster Teil: Die Lehre vom Tatbestand*. Str. Abh. Nr. 323. 1933. である。これは未完で終った。一九三四年、キーン大学教授、キーン大学一九三六年以来、マンハイム大学教授である。

オーストリアについては殆んど何も言ふことはない、大へん勉強家であるといふが、何しろ論文が余りにも少なすぎる。わずかに次の二編の著目についてはすぎない。もつとも、これまでに二人の弟子を教授にしているところをみると、有能な人であるらしい。

論文

Zum Verhältnis des § 211 zu § 50 StGB. NJW. 1949. S. 83 ff.

Generalklausur im Strafrecht. F. J. E. Schmidt, 1961. S. 122 ff.

(紹介、宮内務、法学論叢七二巻四号一三三頁以下)

エンギツシュ (Karl Engisch)

一八九九年三月一七日、ギーセンに生れた。母方の祖父は有名な森林官であつた。一九二七年から故郷ギーセン大学のW・ミッテルマイヤー教授の助手を勤め、一九二九年に私講師となつた。請求論文は現在でも故意過失を論ずる際に必見の文献といわれている有名な *Untersuchungen über Vorwitz und Fahrlässigkeit*, 1930, 2. u. 3. Aufl. 1964. である。その後、一九二九年フライブルク大学、一九三二年ミュンヘン大学の員外教授を歴任し、一九三四年ライプツェル大学に転じて今日に至つてゐる。

現在西独刑法学会会長である。大柄で気品のある堂々とした体軀で、明晰な議論を展開すること、人の異説にもよく耳を傾けるところから、特に若い世代の信頼は厚い。上向き気味で、目をつぶつて嘆る姿には哲人の風格がある。刑法理論学はもとより、法哲学にも

多くのすぐれた業績があるけれども、全刑法雑誌の書評欄に出る彼の書評は法哲学界に対する重要な寄与と評価されている。

エンギツシュの業績に対する評価は我が国では少数の例外を除いて余り高くないようである。その一つの理由は彼にいわゆる体系書がないところにある。何しろ体系書で評価し、体系書以外のものを追及しない学风のところでは、彼のような緻密な議論を論説の形で展開するタイプの学者を研究することは苦手であろうから。ウェルツェルの学説を紹介したのも彼であるし(コルラウシュ祝賀論集の論文)、ウェルツェルの体系が常に動揺しているのは、彼の批判に断えずさらされているからでもある。若し、この事実をたしかめたいなら、左にあげるその論稿をつぶさに読まれるとよいと思う。

エンギツシュに体系書がないということは、たしかに学界にとって大きな損失である。彼は多くの著書もあるから、決して構成力の不足を云々することは当らないであろう。むしろ、その相對主義的な考え方、その鋭い分析力の優位に帰因することと思われる。この点でラートブルフに似ている。もつとも、エンギツシュの理論刑法学はラートブルフの刑事政策的な思考とは違ふこと勿論である。

著書

Die Kausalität als Merkmal der strafrechtlichen Tatbestände, 1931. この書はギーセン大学で一九三〇・三一年の冬学期に師のミッテルマイヤーとマ・ヘンティツヒとの三人で議論し合つたことから生れた作品であつて、二人に捧げられている。

ハイデルベルク大学時代 *Die Einheit der Rechtsordnung*, 1935.

Logische Studien zur Gesetzesanwendung. 1943. 2. Aufl. 1960
/ Rechtsnorme und Vernichtung lebensunwerten Lebens in strafrecht-
licher Beleuchtung. 1948. (原令・片断製) 民法雑誌11卷1号121
頁以下) / Vom Weltbild des Juristen, 1950. / Die Idee der
Konkretisierung in Recht und Rechtswissenschaft unserer Zeit.
1953. / Strafbarkeit der juristischen Person. Verh. z. 40. Deut.
Jur. Tag., 1953. E. S. 7 ff.

「ドイツの大衆法」 Einführung in das juristische Denken.
1956. 2. Aufl. 1959. (原令・片断製) 法学杂志111卷
1号1-12) / Die rechtliche Bedeutung der ärztlichen Operation, 1958.
本稿に Fehler und Gefahren bei chirurgischen Operationen, Bd II
begr. Stich u. Malkan, hergg. Stich u. Bauer, 4. neu bearb. Aufl.
1958. (原令) 48号 / Wahrheit und Richtigkeit im juristischen
Denken. 1963. / Die Lehre von der Willensfreiheit in der straf-
rechtsphilosophischen Doktrin der Gegenwart, 1963. (原令・片断製
1) 法学雑誌雑誌10巻1号161頁以下)

備考

「ドイツの大衆法」 Die Verletzung der Erkundungspflicht.
Ein Beitrag zur Eidesreform. ZStw. Bd. 52. 1932. S. 661 ff.
「ドイツの大衆法」 Interessenjurisprudenz im Straf-
recht. MKri. 1934. S. 65 ff. / Weisungen und konkretes Ord-
nungsgedanke im Strafrecht. MKri. 1938. S. 133 ff. / Ärztlicher
Eingriff und Einwilligung. ZStw. Bd. 58. 1939. S. 58 ff. / Zur

Strafbarkeit unrichtiger Handlungen mit Abkömmlingen. ZAK.
1939. S. 568 ff. / Der Arzt im Strafrecht. MKri. 1940. S. 414 ff.
/ Zur Frage des fahrlässigen Unterlassungsdelikts. ZAK. 1941
S. 129 ff. / Zur Idee der Täterschuld. Kritische Betrachtungen
zu: Paul Boeckmann, Studien zum Täterstrafrecht II. ZStw.
Bd. 61. 1942. S. 168 ff. / Der finale Handlungsbegriff. F. t.
Kohlrausch, 1944. S. 141 ff. / Die neuere Rechtsprechung zur
Trikotomie der Straftaten. SIS. 1948. S. 660 ff. / Prozessfähig-
keit und Verhandlungsfähigkeit. F. t. Rosenberg, 1949. S. 101 ff.
/ Der Begriff der Rechtstafel. Eine analytische Studie zu Wil-
helm Sauers Methodenlehre. F. t. Sauer, 1949. S. 85 ff. / Todes-
strafe. Christen und Nichtchristen in der Rechtsordnung, 1950. /
Gustav Radbruch zum Gedächtnis. ZStw. Bd. 63. 1951. S. 147 ff.
/ Die Frage, ob eine Körperverletzung den Tod des Verletzten
verursacht hat, ist nach der Bedingungslehre zu entscheiden.
JZ. 1951. S. 787 ff. / Der rechtsfreie Raum. ZStaatsw. Bd. 108.
1952. S. 385 ff.

「ドイツの大衆法」 Bietet die Entwicklung der dogmatischen
Strafrechtswissenschaft seit 1930 Veranlassung, in der Reform des
Allgemeinen Teils des Strafrechts neue Wege zu gehen? ZStw.
Bd. 66. 1954. S. 339 ff. / Die normativen Tatbestandsmerkmale im
Strafrecht. F. t. Mezger, 1954. S. 127 ff. / Zum Begriff des
Mordes. (Bemerkung zu dem Urteil des BGH vom 14. 10. 1954.

Kausalität beim Betrug. F. t. v. Weber, 1963, S. 247 ff.

ガラス (Wilhelm Gallas)

一九〇三年七月二三日、ロシアのセント・ペーターズブルク(現在のレニングラード)に生れた。マウラツァンと並んで、西ドイツ刑法学会のレニネト刑法学を通じての学者である。

一九三三年、ムルリン大学ロールラウシュ教授に提出した論文 *Kriminalpolitik und Strafrechtsgesamtheit unter besonderer Berücksichtigung des Sonststrafrechtlichen Rechts*, 1931. により私講師となった。一九三四年にゲーゲン大学教授、一九三五年ケーニヒスヘルク大学、一九四〇年チュービンゲン大学、一九四二年ライプツヒヒ大学教授を歴任し、職後は一九四七年再びチュービンゲン大学教授に転じ(但し、一九四七年はハンブルク大学に出講していた)、さうして一九五四年、エンギッシーのあとをうけてハイデルベルク大学教授に招聘されて、今日に至っている。

ガラスの特徴は実に細かい議論をすることと細心なまでに言葉を吟味し、論理的にすまぬ論文を書くところにある。刑法改正委員としての仕事の中にはこの彼の特色は随所に見られるが、彼が苦勞した条文こそ、その余りにも多くのことを盛り込もうとする態度の所産であるが故に、完全主義という非難的となるのである。不真正不作為犯の規定、錯誤の錯綜した規定などはすべてガラスの細心な苦心の所産である。

ガラスは又、フイナリストの一人としても有名である。余り沢山

1954 ZStW. 62(754) GA. 1955, S. 161 ff. / Sinn und Tragweite juristischer Systematik. St. Gen. 1957, S. 173 ff. / Beleidigende Äußerung über dritte Personen im ersten Kreise. GA. 1957, S. 326 ff. / Bemerkungen zu Theodor Rittlers Kritik der Lehre von dem subjektiven Tatbestands- und Urrechtsmomenten. F. t. Rittler, 1957, S. 165 ff. / Tatbestandsirrtum und Verbotirrtum bei Rechtsbegründungsgründen. ZStW. Bd. 70, 1958, S. 566 ff. (澤本 重徳譯、國政大学法學集九卷一七八頁以下) / Die Relativität der Rechtsbegriffe. Lfdr. 5, Int. Kong. Rygl. 1956, S. 59 ff. / Aufgaben einer Logik und Methodik des juristischen Denkens. St. Gen. 1959, S. 76 ff. / Die kritische Schwangerschaftsunterbrechung im geltenden Strafrecht. Med. Wschr. 1960, S. 130 ff. / Das Verbrechen in der heutigen Gesellschaft. SuS, 1960, S. 1 ff. / Die rechtliche Beurteilung des ärztlichen Eingriffs unter besonderer Berücksichtigung des Suizidpatienten. Heidelberg. Jb. 1960, S. 47 ff. / Der Unrechtsstatbestand im Strafrecht. Eine kritische Betrachtung zum heutigen Stand der Lehre von der Rechtswidrigkeit im Strafrecht. 100 Jahr. jur. Tag. 1960, S. 401 ff. / Zur "Natur der Sache" im Strafrecht. F. t. E. Schmidt, 1961, S. 90 ff. / Vom Sinn des hypothetischen juristischen Urteils. F. t. Wolf, 1962, S. 398 ff. / Zur Kritik des § 270 Entwurf eines Strafgesetzbuchs (E. 1962). Ein Beitrag zur Strafrechtsreform. ZStW. Bd. 76, 1964, S. 177 ff. / Das Problem der psychischen

法的所産はなから、その構成では故實行と損失行をとも兼取するといふた徹底なりを一九五五年頃から行なつた由。但し、オーストリアが大へた下手であり、むづかしい問題を生やせりと断る。断る（断絶を含む）

Strafgesetzbuch (Ugolovnyi Kodeks) der Russischen Sozialistischen Föderativen Sowjet-Republik (R. S. F. S. R.) vom 22. XI. 1926 mit den Änderungen bis zum 1. VIII. 1930, 1931.

トーロマン大教授の Strafgesetzbuch des Russischen Sozialistischen Föderativen Sowjet-Republik vom 22. November 1926 in der am 1. Januar 1952 gültigen Fassung mit Nebengesetzen und Materialien, 1953.

ベンネン大教授の Die strafrechtliche Verantwortlichkeit der am Bau Beteiligten, 1963. / P. J. A. Feuerbachs „Kritik des natürlichen Rechts“, 1964.

論文

ベンネン大教授の Die Krise des Strafrechts und ihre

Überwindung im Staatsgedanken, ZStw. Bd. 53, 1934, S. 11 ff.

キーパ大教授の Grenzen zulässiger Verteidigung im Strafprozess, ZStw. Bd. 53, 1934, S. 256 ff.

トーロマン大教授の Zur Kritik der Lehre vom Verbrechen als Rechtspflichtverletzung, F. f. Gleichsch. 1936, S. 50 ff. / Zur Struktur des kommenden Strafverfahrens. Bemerkungen zu dem Bericht der amtlichen Strafprozesskommission.

ZStw. Bd. 58, 1938, S. 624 ff.

トーロマン大教授の Zur Frage nach dem Verletzen beim Betrugsdelikt, ZAK. 1940, S. 246 ff. / Beleidigung und Stillekeitsdelikt, ZAK. 1941, S. 15 ff. / Tatstrafe und Täterstrafe, ZStw. Bd. 60, 1941 S. 374 ff. / Neues französisches Jugendstrafrecht, DRZschr. 1947, S. 280 ff. / Edward Kohrensch zum Gedächtnis, ZStw. Bd. 63, 1951, S. 1 ff. / Zur Revision des § 330 c StGB, JZ. 1952, S. 396 ff.

ベンネン大教授の Täterschaft und Teilnahme, Mat. Str. Ref. Bd. 1, 1954, S. 121 ff. (原稿・本教授の「ベンネン大教授の責任問題」) / Pflanzkollision als Schuldverschleierungsgrund, F. f. Mezger, 1954, S. 311 ff. / Zum gegenwärtigen Stand der Lehre vom Verbrechen, ZStw. Bd. 67, 1955, S. 1 ff.

(本稿の註・原稿田村三三三博士「責任問題」原稿・原稿田村三三三博士「責任問題」) / Zum Begriff der „Falschheit“ der eidlichen und uneidlichen Aussage, GA. 1957 S. 315 ff.

/ Die moderne Entwicklung der Begriffe Täterschaft und Teilnahme im Strafrecht, ZStw. 1957 (Deutsche Beiträge), S. 3 ff. (原稿・原稿田村三三三博士「責任問題」) / Strafbares Unterlassen im Fall einer Selbsttötung, JZ. 1960, S. 649 ff. u. 696 ff. / Der Betrug als Vermögensdelikt, E. f. E. Schmidt, 1961, S. 401 ff. (原稿・原稿田村三三三博士「責任問題」) / Sullo stato attuale della dottrina del reato, So. pos. 1963, p. 3

4. / Der Schutz der Persönlichkeit im Entwurf eines Strafgesetzbuchs. ZStw. Bd. 75, 1963, S. 16 ff. auch in: Prob. d. StR. Ref. 1963, S. 159 ff.

ゲールズ (Friedrich Geerds)

一九二五年八月二十九日、ハンザ同盟都市のルーネンブックに生れた。一九四七年から五一年まで、キール大学で法律学を修め、特にH・マイヤー教授の指導を受けた。一九五三年に学位を取得した。論文は *Einwilligung und Einverständnis* (非公刊・タイプ印刷) である。一九五三年から五六年まで、フラインブルク大学の外国国際刑法研究所の助手として刑法改正の準備作業に従事した。キールに帰ったのは、一九五七年に新設された刑事学研究所(所長マイヤー教授)の助手に招かれたからである。

一九五九年にキール大学私講師となった。講義論文はあの浩論の書 *Zur Lehre von der Konkurrenz im Strafrecht 1961*。一九六四年、フランクフルト大学より刑事学、刑法、刑事訴訟法の講座に就任するよう招聘を受け、受諾した。又、新設された同大学刑事学研究所の所長の任である。

著書

Gnade, Recht und Kriminalpolitik. 1960. (公刊) 西独法廷雑誌に収録した *Gründe* / Über den Unrechtsgehalt der Bestechungsdelikte und seine Konsequenzen für Rechtsprechung und Gesetzgebung. Eine strafrechtliche und kriminologische Studie. 1961.

論文

フラインブルク大学研究所報告 Die Bekämpfung der Berufs- und Gewohnheitsverbrecher und Behandlung des Rückfalls. Mat. StR. Ref. Bd. 2. I. 1954, S. 175 ff. / Unrechts- und Schuldassessungsgründe. Mat. StR. Ref. Bd. 2. I. 1954, S. 367 ff. / Einwilligung und Einverständnis des Verletzten im Strafrecht. GA. 1954, S. 262 ff. / Die Körperverletzungsdelikte. Mat. StR. Ref. Bd. 2. II. 1955, S. 285 ff. / Straftaten gegen die Volksgesundheit. Mat. StR. Ref. Bd. 2. II. 1955, S. 263 ff.

キール大学報告 Zum Tatbestand der Hehlerei aus der Sicht des Kriminologen. GA. 1958, S. 129 ff. / Über Diebstahl und unbefugten Gebrauch von Kraftfahrzeugen. Kriminal. 1960, S. 106 ff. 171 ff. u. 212 ff. / Probleme zur Angleichung der europäischen Strafrechtssysteme. in: Internationale Verrechtensbekämpfung. BKA. 1960, S. 273 ff. / Einwilligung und Einverständnis des Verletzten im Strafrechtzentwurf. ZStw. Bd. 72, 1960, S. 42 ff. (署名・加次) 本誌三十五巻四号(一〇頁以下) / Zur kriminellen Prognose. MKri. 1960, S. 92 ff. / Über das strafrechtliche Gutachten. Jus. 1962, S. 360 ff. u. 394 ff., 1962, S. 24 ff., 70 ff., 106 ff. u. 142 ff. / Zur Kriminologie von Raub und Erpressung. N. Pol. 1962, S. 178 ff. / Warenfälschung—Sammelbezeichnung oder einheitliche Wirtschaftsstrafat? (Ein Beitrag zur Problematik des Wirtschaftsstrafrechts). ZStw. Bd. 74, 1962, S. 245 ff. /

„Maximen des Strafprozesses“. Gedanken zur Funktion des Prozessgrundrisses im deutschen Strafverfahrensrecht. Schl. Holst. Anz. 1962. S. 181 ff. / Die Brandstiftungsdelikte im ausländischen Strafrecht. In: Brandermittlung und Brandverhütung. BK A. 1962. S. 15 ff. / Die Konkurrenzfragen im strafrechtlichen Gutachten. DRiZ. 1963. S. 429 ff.

ノルマンンナ大学博士論文 *Das Wirtschaftsstrafrecht als Aufgabe für Wissenschaft und Gesetzgebung. Erläutert am Beispiel der Warenfälschung*. in: Grundfragen der Wirtschaftskriminalität, BKA. 1963. S. 211 ff. / Strafrechtspflege und prozessuale Gerechtigkeit. Schl. Holst. Anz. 1964. S. 57 ff.

エルドマン博士論文 *Über strafprozessuale Massnahmen, insbes. Entnahme von Blutproben bei Verdacht der Trunkenheit am Steuer*. GA. 1965. / Beiträge über ① Erpressung. ② Rechtsfriedensdelikte und ③ Rechtspflegedelikte in: Handwörterbuch der Kriminologie. 2. Aufl. hrsg. von Sieverts (1965?).

ゲルン (Gerd Geilen)

ボン大学のウエリッヘル教授の弟子になった教授論文 *Einwilligung und ärztliche Aufklärungspflicht*. 1963. *ドイツの法律語彙* による。一九六五年夏季期に承認されたボン大学の博士論文に該当した。論文

Wegnahmebegriff und Diebstahlsvollendung. JR. 1963. S. 446

ff. / Skilischweigen des Angehörigen beim Mordkomplott. ZF. 1964. S. 385 ff. / Strafrechtliches Verschulden im Zivilrecht? JZ. 1964. S. 6 ff.

ゲッピンガー (Hans Göppinger)

一九一九年生れである。一九四六年に法律学の学位取得の後、精神医学をチュービンゲン大学のクレッチャマーのもとで学び、学位取得後、一時私講師としてボン大学に籍を置いたが一九六二年チュービンゲン大学の刑事学講義開設に当り教授として迎えられた。学位論文「*論犯罪文とその形態*」。

著書

Die gegenwärtige Situation der Kriminologie, 1964. 教授論文に類し拙訳版出したものがある。

論文

Zur Kriminologie der Verkehrsdelikte, NJW. 1959, S. 2281 ff. / Der Verkehrsünder als krimineller Typus. K. Biol. G. 1960, S. 76 ff. / Psychopathologische und tiefenpsychologische Untersuchungsverfahren und ihr Aussagenwert für die Beurteilung der Täterschönlichkeit und der Schuldfähigkeit. NJW. 1961. S. 241 ff. / Methodologische Probleme und ihre Auswirkungen bei der Begutachtung. K. Biol. G. 1962. S. 110 ff.

マンロー (Gerald Grünwald)

一九二九年九月五日、フラーヘに生れた。一九五一年から五五年までゲッチンゲン大学に法学を学び、一九五七年学位を取得した。論文は *Das schwache Unterlassungsdelikt—seine Abweichungen vom Hauptdelikt*, 1957. (ライプ印刷) 未公刊) であつて、シャフヌタイン教授に提出した。同教授は一九五五年から六三年まで助手として仕えた。一九六三年五月二十九日に教授資格を取得したが、請求論文は *Die Teilrechtskraft im Strafverfahren*, 1964. である。一九六三年一〇月一日にボン大学の正教授となつた。

大柄な大人の風格をもつた立派な学者であり、若いけれども広範な研究分野でそれぞれ立派な業績を残してゐる。

論文

ゲッチンゲン大学助手時代 Zur gesetzlichen Regelung der unechten Unterlassungsdelikte. ZStw. Bd. 70, 1958, S. 412 ff. (知沢浩一・不真正不作爲犯と西独刑法改正草案(一)本誌三三三卷三三二頁以下に紹介批評した) / Die Beteiligung durch Unterlassen. GA. 1959, S. 110 ff. / Der Versuch des unechten Unterlassungsdelikts. JZ. 1959, S. 46 ff. / Tatrichterliches Ermessen bei der Strafzumessung. MDR, 1959, S. 713 ff. u. 808 ff. / Zur Anknüpfung von Strafmilderung für den Fall eines Geständnisses. NJW. 1960, S. 1941 ff. / Die Aufklärungspflicht des Arztes. ZStw. Bd. 73, 1961, S. 5 ff. (紹介・知沢浩一本誌三六卷一〇一頁) ホン大学教授時代 Bedeutung und Begründung des Satzes „Nulla poena sine lege“ ZStw. Bd. 76, 1964, S. 1 ff. / Die Frage der

Nichtigkeit von Strafurteilen. ZStw. Bd. 76, 1964, S. 250 ff. / Sicherungsverwahrung, Arbeitshaus, vorbeugende Verwahrung und Sicherungsaufsicht im Entwurf 1962. ZStw. Bd. 76, 1964, S. 633 ff.

ハル (Karl Alfred Hall)

一九〇六年三月一〇日、メクレンブルク州のシェーンベルクに生れた。一九三三年にフライブルク大学ヘーリク・ヴォルフ教授に提出した請求論文 *Die Lehre vom Corpus Delicti. Eine dogmatische Quellenrezepte zur Theorie des gemeinen deutschen Inquisitionsprozesses*, 1933. により私講師となり、一九三六年ギーゼン大学員外教授となつた。第二次大戦後、同大学法学部は閉鎖となり、マールブルク大学に合併されたのでそこに移り、五〇年に講師、五八年に員外教授となつた。すぐれた人であるが、不遇な生活を送つてゐる。

著書

Fähigkeit im Vorsatz, 1959.

論文

Die Abgrenzung von Versuch und Vorbereitung im Willensstrafrecht. GS. Bd. 110, 1938, S. 95 ff. / Gestaltwandel der Tat im Strafverfahren. DRW. 1941, 6. Jg. S. 305 ff. / Vom Geist des Prozesses. Richterliches Denken und Staatsräson. ZStaatsw. Bd. 108, 1952, S. 336 ff. / Die Freiheitsstrafe als kriminalpolitisches

Problem. ZStw. Bd. 66, 1954, S. 77 ff. / Über die Leichtfertigkeit. — Ein Vorschlag de lege ferenda. F. t. Merger, 1954, S. 229 ff. / Sicherungsverwahrung und Sicherungsstrafe. ZStw. Bd. 70, 1958, S. 4 ff. / Über die Teilnahme an Mord und Totschlag. F. t. E. Schmidt, 1961, S. 343 ff. (原典・井田田中 刑事集巻七(一) 第111頁以下) / Richter und Ankläger. Auslegung einer Thomas-Stelle. F. H. t. Herrhardt, 1961, S. 93 ff. / Die Wiederholung des Klagerzwingungsverfahrens. JZ. 1961, S. 360 ff. / Über das Hinlegen. Eine anthropologisch-strafrechtliche Studie über Versuch und Fahrlässigkeit. F. t. Wolf, 1962, S. 454 ff.

ハナタ (Ernst-Walter Hanack)

一九二九年八月三〇日生。カッセルに生れた。一九五〇年から五三年までマールブルク大学に学び、一九五七年にマールブルク大学で「*ノイメンク*」教授に提出した論文「*Die strafrechtliche Zulässigkeit künstlicher Urfruchtmittel*」を以て、一九六一年に法學博士となつた。ナールに於て「*Der Ausgleich divergierender Entscheidungen in der oberen Gerichtsbarkeit: Eine prozessrechtliche Studie, insbesondere zur Vorlegungspflicht und der Rechtsmittelzulässigkeit wegen Abweichung*」, 1962, p. 48, 9°

一九六三年、ボツケルマン教授のあとをついで、ハイデルベルク大学教授となつた。

著書

マールブルク大学講師時代 Zur strafrechtlichen Haftung des

Arztes. Gedanken zu einer Entscheidung des Bundesgerichtshofs. Ärztliche Mitteilungen. 1958, S. 1192 ff. / Die Arbeitsteilung zwischen Arzt und Schwester im Strafrecht. Ärztliche Mitteilungen. 1959, S. 497 ff. / Die Einschaltung von Gutachterausschüssen bei Sterilisationen. Ärztliche Mitteilungen. 1961, S. 595 ff. / Zur Reform der Revision. Gedanken zu den Verhandlungen des 44. Deutschen Juristentages. NJW. 1961, S. 1991 ff. / Zum Problem der persönlichen Gutachterpflicht, insbesondere in Kliniken. NJW. 1961, S. 2041 ff. / Die politische Betätigung des Richters. F. t. Herrhardt, 1961, S. 127 ff.

ハルトマン (Werner Hardwig)

一九〇七年三月八日生。東プロシヤのマンツェン (Lützen—現在ポーランド領) に生れた。

一九四九年ハンブルク大学のジーバート教授に提出、公刊した論文「*Der materielle Gehalt des Verbrechen*」, 1949, により学位を取得し、一九五三年に法學博士となつた。論文「*Die Zurückweisung. Ein Zentralproblem des Strafrechts*」, 1957, p. 48, 9° の後、一九

五九年に同大学の員外教授となり、今日に至っている。

いわゆる理論刑法学に属する論稿を数多く発表し、ボン大学のヘンミン・カウマンと論争をするが、両者ともた相手のめがねをよじたり、言わなざらことを論拠としたりするのび議論がかみ合わなざらぶらぶらである。

論文

- § 50 StGB und die Bereinigung des Strafgesetzbuches. GA. 1954, S. 65 ff. / Zur Systematik der Tötungsdelikte. GA. 1954, S. 257 ff. / Zur Abgrenzung von Mittäterschaft und Beihilfe. GA. 1954, S. 353 ff. / Die Persönlichkeit des Beschuldigten im Strafprozess. ZStw. Bd. 66, 1954, S. 236 ff. / Öffentlichkeit und Strafrechtspflege. ZStvVollz. 1955, S. 1 ff. / Der systematische Ort der § 141, 144 StGB. Ein Beitrag zur Strafrechtsreform. GA. 1955, S. 140 ff. / Beiträge zur Lehre vom Betrug. GA. 1956, S. 6 ff. / Sachverhaltsirrtum und Peitschstrittum. GA. 1956, S. 369 ff. (紹介・中義訳、関西大学法学雑誌七巻二号一〇八頁以下) / Die Gesinnungsmerkmale im Strafrecht. ZStw. Bd. 68, 1956, S. 14 ff. / Der Versuch bei untauglichem Objekt. GA. 1957, S. 170 ff. / Tat- und Täterstrafrecht im Licht der Strafrechtsreform, MKri. 1959, S. 1 ff. / Die Wiederholung von Klageerzwingungsverfahren. GA. 1959, S. 229 ff. / Das Verhältnis von Schuld und Strafe. ZStvVollz. 1961, S. 59 ff. / Berücksichtigung der Änderung eines Strafgesetzes in der Revisionsinstanz bei Vorliegen

eines rechtskräftigen Schuldspruchs. JZ. 1961, S. 364 ff. / Personales Unrecht und Schuld. MKri. 1961, S. 194 ff. / Studien zum Vollrauschtatbestand. F. t. E. Schmidt, 1961, S. 459 ff. (紹介・原中義訳、法学雑誌ヤ○雑誌号一五八頁以下) / Die Behandlung der Vergehen, die sich auf die Religion beziehen, in einem künftigen deutschen Strafgesetzbuch. GA. 1962, S. 257 ff. / Vorschlag bei Unterlassungsdelikten. ZStw. Bd. 74, 1962, S. 27 ff. / Der Vollrauschtatbestand. Zugleich eine Auseinandersetzung mit der Monographie von Peter Cramer: Der Vollrauschtatbestand als abstraktes Gefährdungsdelikt, Tübingen, 1962, GA. 1964, S. 140 ff. / Sterilisation und Sittlichkeit. GA. 1964, S. 289 ff. / Betrachtungen zum erfolgsqualifizierten Delikt. GA. 1965, S. 97 ff. / Betrachtungen zur Frage des Heilangriffs. GA. 1965, S. 161 ff.

ハイニミン (Ernst Heintz)

一九〇二年一月一日、ベルリンで生れた。ボンブルク大学のリーマン教授に提出した論文 *Das Problem der materiellen Rechtswidrigkeit*, Str. Abh. Nr. 211, 1926, 学位を取得したが、一九二八年師の急死により実務に入った。ナチスの政権手得の後ナチスの法律に従うことをせざるをいとしないので一九三八年に、かつて学生生活を営じたことのせらフローレンスに逃れて、その地で弁護士を開業してつじた。

戦後は、一九四八年にヘルランゲン大学教授に招聘され、一九五

二年ではハンリン自由大学で、併せて雑誌に「プロパグランド」
「一九五八年には部長理事 (Senatspräsident) となった。『マッ
ト刑務学に就く』、『イタリア語を学ばない』著者である。』

著者

Kommentar zum Arbeitsgerichtsgesetz, 1932. / I limiti ogget-
tivi della causa giuridicata, 1937.

ハンリン自由大学教授 国家保護と Grundrechte, 1953. /
Empfehlte es sich, die Strafbarkeit der juristischen Person gesetz-
lich vorzusehen? Gutacht. z. 40. Deut. Jur. Tag. 1953. / Richter,
Staatsanwalt und Rechtsanwalt im geteilten Deutschland, 1959. /
Die Individualisierung der Strafe und Massnahmen in der Reform
des Strafrechts und Strafprozesses. 1960. / Probleme der Rechts-
beugung. 1963.

譯者

ハンリン自由大学教授 James Goldschmidt zum Gedächtnis. NJ
W. 1950, 536 ff. / Strafzumessung und Persönlichkeit. ZStrw.
Bd. 63, 1951, S. 57 ff. (譯者・片岡健一) 刑法雑誌 1 卷 1 号 1 頁 113 頁
以下) / Ärztliche Experimente am lebenden Menschen. JR. 1951,
S. 333 ff.

ハンリン自由大学教授 Die Grenzen der zulässigen Wahlfest-
stellung im Strafprozess. JZ. 1952, S. 100 ff. / Der Ausbau des
Strafensystems? ZStrw. Bd. 65, 1953, S. 26 ff. / Teilnahme und
unterlassene Hilfeleistung beim Selbstmord. JR. 1954, S. 403 ff. /

ハンリン自由大学教授

Empfehlte sich die Dreiteilung der Straftaten auch für ein neues
Strafgesetzbuch? Mat. Str. Ref. Bd. 1, 1954, S. 55 ff. (譯者・
片岡健一) ユーニベルシテットの王権国八頁以下) / Gedanken über
Täter- und Teilnehmer Schuld im Deutschen und Italienischen Straf-
recht. F. d. Jur. Fak. Frei. Univ. 1955, S. 93 ff. / Nötigung,
Aufbruch und Landfriedensbruch bei Streikausbreitung. JR. 1956,
S. 3 ff. / Streitfragen der Versuchlehre. JR. 1956, S. 219 ff. /
L'omicidio doloso nel diritto tedesco. Sc. Poa. 1956, p. 205 ff. /
Zum Verhältnis der Wahlfeststellung zum Satz in dubio pro reo.
JR. 1957, S. 126 ff. / Die gesetzlichen, verwaltungsrechtlichen
und sozialen Folgen der strafgerichtlichen Verurteilung. ZStrw.
(Deut. Beiträge.) 1957, S. 151 ff. / Zweifelsfragen des Opportunitäts-
prinzips. F. t. Rittler. 1957, S. 327 ff. / Der Entwurf des All-
gemeinen Teils des Strafgesetzbuchs vom kriminalpolitischen Stand-
punkt aus. ZStrw. Bd. 70, 1958, S. 1 ff. / Der Begriff der Ver-
mögensverfügung im deutschen Strafrecht, in: La teoria dell'in-
disponibilita giuridica attraverso le critiche e le anticipazioni della
dottrina, 1958, p. 177 e segg. / Der Irrtum des Täters über die
Rechtspflicht zum Handeln bei den echten Unterlassungsdelikten.
JR. 1959, S. 285 ff. / Gedanken zur Strafprozessreform. JR. 1961,
S. 241 ff. / Zur Entwicklung der Lehre von der materielle
Rechtswidrigkeit. F. t. E. Schmidt, 1961, S. 266 ff. (譯者・片岡
健一) 刑法雑誌 1 卷 1 号 1 頁 113 頁以下) / Le misure di sicurezza

六三三 (一〇六三三)

prevista dal progetto del Codice Penale tedesco sotto il profilo costituzionale; stato di diritto e misure di sicurezza, 1962, p. 19 e seg. / Die Verwertung von Tagebüchern als Beweismittel im Strafprozess, JR, 1964, S. 441 ff.

ヘンラー (Joachim Hellmer)

長久間ハインリッヒ大卒の著者。近頃「ヘンラー」一九六〇年フランクフルトのヘンラー教授の主宰する刑事学者会所の所長職となり。著書として *Der Genesiskriterienverfahren und Sicherungsverwahrung* 1934-1945, 1961, 217頁。は著書となつた。著書として「ヘンリッヒの刑事学」として題して「新しきヘンリッヒの著書である。ただ『本書はヘンラーは著書を書く』満足を示してはならない。ヘンラー・ヘンリッヒの著書は『ヘンリッヒの著書』と今後どのような著書出版を期してゐるかを監視せよ。』

著書

Erziehung und Strafe, 1957. / Systematik des bürgerlichen Rechts und angrenzender Gebiete, 1958. (塚本・佐賀園同著) 本邦刊行本は中川三郎訳)。

キーン大卒の著者。Kriminalpädagogik. Eine Einführung in ihre Probleme, 1959. / Die Strafaussetzung im Jugendstrafrecht. Versuch einer Grundlegung des Strafaussetzungsgedankens für die gerichtliche und fürsorgliche Praxis, 1959. / Schuld und Gefährlichkeit im Jugendstrafrecht, 1962. (訳書は中川三郎訳)。

編者

Zur neuen Prüfungsordnung für Juristen, JR, 1952, S. 436 ff. / Die Verwertung von Rechtsmitteln im Jugendstrafverfahren durch Beschluss, JR, 1955, S. 92 ff. / Wiedergutmachung und Strafe, AcP, Bd. 155, 1956, S. 527 ff. / Das Zusammenreffen von natürlicher Handlungs- und rechtlicher Tateinheit bei Verletzung höchstpersönlicher Interessen, GA, 1956, S. 65 ff. / Die Strafaussetzung zur Bewährung und das Verbot der Schlechterteilung, JZ, 1956, S. 714 ff. / Ist die Wiedergutmachung des Schadens Voraussetzung der Strafaussetzung? NJW, 1956, S. 979 ff. / Kriminalpolitik und Sittenstrafrecht, dargestellt am Beispiel der Familiendelikte, ZStw, Bd. 70, 1958, S. 360 ff.

キーン大卒の著者。Wesen und Widersprüche der Strafaussetzung nach §§ 20 ff JGG (Aussetzungseignetheit der Strafe), RdJ, 1959, S. 209 ff. / Die objektiven Voraussetzungen der Aussetzung der Strafvollzugsstreckung nach §§ 20 ff JGG (Aussetzungsfähigkeit der Strafe), RdJ, 1959, S. 229 ff. / Die subjektiven Voraussetzungen der Aussetzung der Strafvollzugsstreckung nach §§ 20 ff JGG (Aussetzungsfähigkeit der Strafe), RdJ, 1959, S. 244 ff. / Allgemeines zum Bewährungsverfahren, RdJ, 1959, S. 321 ff. / Gewohnheitsverbrechertypen. Einige Bemerkungen über die Sicherheitsverwahren vom 1934 bis 1945, MKri, 1960, S. 136 ff. / Kriminalpädagogik als Kriminologie, RdJ, 1960, S. 123 ff. /

- Kriminalpädagogik als Verbrechenursachenforschung. RdJ. 1960. S. 167 ff. / Rückfallsverbrechertum und Frühkriminalität. ZStw Bd. 72, 1960. S. 397 ff. (紹介・紹介者) / 本誌三五卷四号一三三頁) / Hangtäterschaft und Berufsverbrechertum. ZStw. Bd. 72 1961. S. 441 ff. (紹介・紹介者) / 本誌三三卷八号一〇四頁以下) / Verurteilung als gefährlicherer Gewohnheitsverbrecher. NJW. 1962. S. 2040 ff. / Beleidigung und Intimsphäre. GA. 1963. S. 129 ff. / Kriminalität und Kultur. Zur Diskrepanz zwischen dem Menschenbild von heute und dem Strafrecht. MKri. 1963. S. 97 ff. / Zum gegenwärtigen Stand der Lehre vom Verbrechen. JZ. 1963. S. 193 ff. / Zur Rechtskraftwirkung des Straffehls. Jus. 1963. S. 311 ff. / Bewährung und Nichtbewährung des Jugendstrafrechts. NJW. 1964. S. 177 ff.

ヘンケル (Heinrich Henkel)

一九〇三年九月二二日、ライン河畔のフョウンフェルムに生れた。一九二六年頃フランクフルト大学のハイムヘルガー教授、フロイデントタール教授に受雇せられた論文 *Die Rechtsnatur des Notstandes*, 1927. により学位を得た。その後間もなく急死したフロイデントタールの後任として就任したハウムガルテン教授について研究を厲ね、一九三〇年で私講師となった。講求論文は *Der Notstand nach geltendem und künftigen Recht*, 1932. である。一九三三年に同大学の員外教授に任命されたが、翌三四年フランクフルト大学に転じ、

さらに一九三五年にフレスラウ大学教授に招聘された。第二次大戦後は一九五一年にフランクフルト大学教授となり、今日に至っている。白髪で温容、ささし眼鏡のよく似合う紳士である。数多くない刑事訴訟法の研究者として貴重な存在であるばかりでなく、理論刑法学にも、法哲学でもすぐれた論著を公刊して居られる。一九六四年に公刊された法哲学入門も、なるほど前向きな姿勢は示されていながらけれども、従来の論争の帰趨をまとめた堅実な作品である。

著書

フールントク大学教授時代 *Stratrichter und Gesetz. im neuen Staat*, 1934.

フンストラウ大学教授時代 *Das deutsche Strafverfahren*, 1943.

フンストラウ大学教授時代 *Strafverfahrensrecht*, 1963. / *Der Begriff der Wissenschaft in Forschung und Lehre*, 1953. / *Der Strafschutz des Privatlebens gegen Indikretion*. Gutacht. z. 42 Deut. Jur. Tag 1957. / *Recht und Individualität*, 1958. / *Einführung in die Rechtsphilosophie*, 1964.

論文

フランクフルト大学時代 *Strafrecht und Religionschutz*, ZStw Bd. 51, 1931. S. 916 ff.

フンストラウ大学教授時代 *Der Staatsanwalt*. DR. Jg. 5, 1935. S. 277 ff. / *Der Parteigedanke im Strafverfahren*. DS. Bd. 2, 1935 S. 129 ff. / *Die Hauptverhandlung im kommenden Strafverfahren*. DS. Bd. 2, 1935. S. 401 ff. / *Die Gestalt des künftigen*

Strafverfahren. DZ. Bd. 40, 1935, S. 530 ff. u. S. 727 ff. /
 Richter, Staatsanwalt und Beschuldigter im Strafprozess des neuen
 Staates. ZStw. Bd. 54, 1935, S. 35 ff. / Die Beteiligung des
 Verletzten am künftigen Strafverfahren. ZStw. Bd. 56, 1937, S.
 227 ff. / Bemerkungen zum Bericht der amtlichen Strafprozess-
 kommission. ZAk. 1938, S. 757 ff. / Das Sicherungsverfahren
 gegen Gemeingefährliche. ZStw. Bd. 57, 1938, S. 702 ff. u. Bd. 58
 1939, S. 167 ff. / Das neue schweizerische Strafgesetzbuch im
 Vergleich zu deutscher Strafrechtsreform. DRW. 1939, S. 40 ff.
 ハンノン大学法學部教授の論文と著書
 als regulatives Rechtsprinzip. F. t. Mezger. 1954, S. 249 ff. /
 Kollektivschuld. F. t. B. Kraft. 1954, S. 106 ff. / Die Zulässig-
 keit und Verwertbarkeit von Tonbandaufnahmen bei der Wahr-
 heitsforschung im Strafverfahren. JZ. 1957, S. 148 ff. / Zur
 Frage der Verbindung von Erwachsenen- und Jugendstrafsachen.
 JZ. 1957, S. 565 ff. / Zur Auslegung des § 357 StPO. JZ. 1959, S.
 690 ff. / Kollektivschuld, in: Internationale Recht und Diplomatie
 1960, S. 37 ff. / Der Mensch im Recht. St. Gen. 1960, S. 229 ff.
 / Die Beschliclichkeit von Ernennungsbeamten. JZ. 1960, S. 507 ff.
 / Das Methodenproblem bei den unechten Unterlassungsdelikten.
 MKrt. 1961, S. 178 ff. / Die „praesumptio docti“ im Strafrecht. F.
 t. E. Schmidt. 1961, S. 578 ff. (紹介・鈴木茂樹) 法学論叢七〇(第一
 号一四一頁以下)

ハ・ノンティック (Hans v. Hentig)
 一八八七年六月九日、ベルリンに生れた。彼は豊かな家庭に育ち、
 才能に恵まれていたので、その昔のドイツの学者によくあるように、
 思う存分の勉強を何ものにもとらわれないことのない立場で行ない、
 勉強の合間に金持の子弟に個人的な指導を行なっていた。学位は
 Der strafrechtliche Schutz des tierischen Eigentums nach deutschem
 und österreichischem Recht in rechtsvergleichender Darstellung, 1912.
 によつて取得した。その後、歴史上の人物の精神病理学的・心理学的
 的研究などを発表しつつつづけていたが、エンギッシュのすすめで、キ
 ーセン大学のミッテルマイヤー教授のもとで教授資格を取得して、
 マカビッカーの生活に入った。講求論文は *Wiedernahmerecht*。
 Die Wiedernahmefähigkeit des Strafverfahrens, dogmatisch und rechts-
 vergleichend dargestellt, 1930. である。一九二九年にギーセン大
 学の私講師となり、三一年にキール大学教授、一九三四年ボン大学に
 迎えられる。刑法、刑事科学を講じ、一九二五年から三三年迄マシマン
 エンブルクとともに月刊犯罪心理学と刑法改正の編集を担当してい
 た。一九三六年ナチス政権の文教政策に反対してアメリカに渡り、各
 地の大学の講師などを歴任し、その間著書、論文を数多く発表した。
 一九五二年に再びボン大学に復帰したが、間もなくハイエールの
 保養地テルツに引退した。しかしながら、一九五四年頃からハ・ノ
 ンティックは毎年平均一冊の大きな著書を書き、発表し驚くべき著
 績を示している。その資料の多くは在米中に集められたものである
 から、興味のある事実の記述によつて肉づけられている。もつと

も、ドイツ的な体系とは違つて、読者は豊富な事実の中を埋没する危険もある。月刊刑事學と刑法改正は一九五七年に彼の七〇歳誕生日を祝つて特別号を編集した。その日は著作田録にならう。それは Studien zur Kriminalgeschichte, herg. v. Ch. Helfer, 1962, S. 189 だ。また、一九三六年以後のメーヌ刑法雜誌を整理された論文のものが本書に再録したものは田録から採られたものと同じだ。

著書

- Strafrecht und Analsee. 1914. / Fouché. Ein Beitrag zur Technik der politischen Polizei in nachrevolutionären Perioden. 1918. / Über den Zusammenhang von kosmischen, biologischen und sozialen Krise. 1920. / Robespierre. Studien zur Psychopathologie des Machttriebes, 1924. / Über den Cäsarenwahnsinn. Die Krankheit des Kaisers Thiberius 1924. / Machiavelli. Studien zur Psychologie des Staatsreiches und der Staatsgründung 1924. / Untersuchungen über den Inzest. (mit Th. Viernestein) 1925. / Psychologische Strategie des griechischen Krieger. 1927. キーワード著書 Die Strafe. Ursprung, Zweck, Psychologie. 1932. / Eugenik und Kriminalwissenschaft. 1933. トムソン著書 Crime, causes and conditions, 1947. The criminal and his victim. 1948.

- キーン著書 Der Friedensschluss, Geist und Technik einer verlorenen Kunst. 1952. / Zur Psychologie der Einzeldelikte. Bd. I. Diebstahl, Einbruch, Raub. 1954. (原・知太郎) 433頁

- キーン著書 1頁以下) / Die Strafe. I. Frühformen und kulturgeschichtliche Zusammenhänge. 1955. (原・知太郎) 433頁以下以下以下) / Zur Psychologie der Einzeldelikte. Bd. 2. Der Mord. 1956. (原・知太郎) 433頁以下以下以下) 知太郎) 433頁以下以下以下) / Der Desperado. Ein Beitrag zur Psychologie des regressiven Menschen. 1956. (原・知太郎) 433頁以下以下以下) / Zur Psychologie der Einzeldelikte. Bd. 3 Der Betrug. 1957. (原・知太郎) 433頁以下以下以下) 知太郎) 433頁以下以下以下) / Die Strafe. II. Die modernen Erscheinungsformen. 1957. (原・知太郎) 433頁以下以下以下) / Probleme des Freipruchs beim Mord. 1957. (原・知太郎) 433頁以下以下以下) / Vom Ursprung der Henkersmahlzeit. 1958. / Zur Psychologie der Einzeldelikte. Bd. 4. Die Erpressung. 1959. / Die Kriminalität der lesbischen Frau. 1959. / Der Gangster. Eine kriminalpsychologische Studie. 1959. (原・知太郎) 433頁以下以下以下) Die Kriminalität des homophilen Mannes. 1960. / Das Verbrechen. Bd. 1. Der kriminelle Mensch im Kräftespiel von Zeit und Raum. 1961. / Das Verbrechen. Bd. 2. Der Delinquent im Griff der Umweltkräfte. 1962. / Studien zur Kriminalgeschichte 1962. / Soziologie der zoophilen Neigung. 1962. / Das Verbrechen. Bd. 3. Anlage-Komponenten im Gebirge des Delikts. 1963. / Der nekrotrophe Mensch. Vom Totenglauben zum mor-

Bismen Totenkamhe, 1964.

論文

トシ子博士著『一九六二年の米子〇年』と『一九六二年の米子〇年』の比較研究について
『トシ子博士の著作』第1巻、第1号、1962年、1-15頁。

1912—S. 355 ff., 1913—S. 403 ff., 1920—S. 80 ff., 1923—S. 29 ff.,
1927—S. 32 ff., 1929—S. 23 ff. u. S. 262 ff., 1930—S. 452 ff., 1934
—S. 368 ff., 1935—S. 203 ff., 1936—S. 403 ff., 1937—S. 125 f. u.
S. 201 ff., 1938—S. 34 ff., 1939—S. 137 ff., 1940—S. 168 ff., 1945—
S. 145 ff., 1946—S. 324 ff. u. S. 444 ff., 1947—S. 337 ff., 1948—S.
121 ff., 1951—S. 181 ff., 1952—S. 443 ff., 1954—S. 11 ff. u. S. 48
ff., 1956—S. 32 ff., 1957—S. 276 ff., 1959—S. 16 ff., 1960—S. 281
ff., 1962—S. 281 ff.

前掲の「ルンペン」論・刑法学研究所による田中博士の論文と左の論文
の比較 (トシ子博士著の「右の一書」を補完した)。

Zum Problem der "gefährlichen Sittlichkeitsverbreher." DJZ.
1934. Bd. 39. S. 529 ff. / The doctrine of mistake. Univ. of
Kansas Law Rev. 1948. / Return to the science of the crime,
In: Essays in criminal science, 1961. p. 53 ff.

一九六二年の米子〇年と『トシ子博士の著作』

Der „Räuber“-Vorwand. Grundzüge einer kriminellen Technik.
N. Pol. 1962. S. 12 ff. / Blutschandefälle Mutter-Sohn. MKri.
1962. S. 15 ff. / Die aggressive Frau. MKri. 1962. S. 193 ff. /
Fagebücher als Berichtsurkunde. Schw.ZStr. Bd. 78. 1962. S. 281

ff. (続々・東京第一本誌三八巻三号一一一頁以下) / Der Rück-
fallmörder. ZStrw. Bd. 74. 1962. S. 562 ff. / Das Problem des
Grunus merdae. MKri. 1963. S. 222 ff. / Das Fehlurteil im Bild
der Sagen und der Märchen. GA. 1963. S. 115 ff. / Porno-Photo-
graphien. Kriminal. 1963. S. 69 ff. / Putzische Zopf Schneider.
Kriminal. 1963. S. 593 ff. / Am Takort unversehens hinterlassene
Objekte. Ein Beitrag zur Indizienlehre. F. f. v. Weber. 1963. S.
388 ff. / Der Hund, der Mensch und das Verbrechen. N. Pol. 1964.
S. 78 ff. / Zur Genealogie des Scharfrichters. Schw.ZStr. Bd. 80. 1964.
S. 198 ff. / Der Psychopath. ZStrw. Bd. 76. 1964. S. 238 ff. /
Häftlinge und Vertrauensleute im Beweisverfahren. MKri. 1965.
S. 105 ff.

ホーニング (Richard Honig)

一八九〇年一月三日、グネーゼン (現在はホーランド領タリモン
Gehzen) で生れたミッテヤ系の人である。一九一四年にグネッテンヤン
大学でド・P・コンニルを提出した論文『Der ungleichartige Rück-
fall des allgemeiner Strafschärfungsgrund, 1914.』により学位を
取得し、一九二〇年に請求論文『Die Einwilligung des Verletzten,
Teil I. Die Geschichte des Einwilligungproblems und die Methoden-
fragen, 1919.』を以て私講師となった。一九二五年、ゲッティンゲン
大学員外教授、一九三一年正教授となったが、一九三三年の政変で
よりトルコに流れ、イスタンブール大学教授として一九三九年まで

同地で活躍した。この間トルコ語で法学入門（一九三四年—三版発行）、法哲学（一九三五年—二版）、ロー法（一九三八年—三版）を公刊した。その後、アメリカに渡り終戦となったが、戦後にはよくて居をかまき、時として講義、講演を行つたため渡欧し、又アメリカ刑法学の研究を著述して居る。

著書

Studien zur juristischen und natürlichen Handlungseinheit. Zugleich ein Beitrag zur Strafrechtsreform. 1925. / Strafbare Vor- und Nachtat. 1927. / Beiträge zur Entwicklung des Kirchenrechts. 1954. / Humanitas und Rhetorik in spätrömischen Kaisergesetzen. Studien zur Gesinnungsgrundlage des Dominats. 1960.

訳書

M. Searle Bates: Glaubensfreiheit. 1947. / H. R. Niebuhr: Der Gedanke des Gottesreichs im amerikanischen Christentum. 1948. / John C. Bennett: Christentum und Gemeinschaft. 1949. / Entwurf eines amerikanischen Musterstrafgesetzbuches. 1965.

論文

Zusammentreffen mehrerer Gesetzesverletzungen. GS. Bd. 92. 1926. S. 115 ff. / Kausalität und objektive Zurechnung. F. f. R. Frank. Bd. 2. 1930. S. 174 ff. / Die Entwicklungslinie des Unverlasungsdelikts vom römischen bis zum gemeinen Recht. F. f. R. Schmidt. 1932. S. 1 ff. / Deutsche Strafrechtsreform im Lichte amerikanischen Strafrechtsgrundsätze. ZStw. Bd. 70. 1958. S.

616 ff. / Jerome Hall. Strafrechtslehre. ZStw. Bd. 74. 1962. S. 379 ff. / Entwurf eines Strafgesetzbuches für die Vereinigten Staaten von Amerika (Model Penal Code). ZStw. Bd. 75. 1963. S. 63 ff. / Die Regelung des Irrtums im Model Penal Code. M. Krt. 1964. S. 137 ff. / Entwurf eines amerikanischen Musterstrafgesetzbuches (Model Penal Code) Teil II. ZStw. Bd. 77. 1965. S. 37 ff.

イヒンヒミン (Hans-Heinrich Jeschek)

一九一五年一月一〇日、シントリンゴリーニヒミン (現ポーランド) に生れた。父親は司法参事担任であった。一九三九年に *Die juristische Ausbildung in Preussen und im Reich, 1939*、という論文で学位を得た。戦争末期にフランス軍の捕虜となり、戦後一九四七年にフランス占領地区であるフライブルクの地方裁判所に勤務して戦犯裁判に関与したためあつてフランス語とフランス刑法に通じるようになった。一九四九年チュービンゲン大学私講師となつた。請求論文は同大学のケルン教授に提出した *Die Verantwortunglichkeit der Staatsorgane nach Völkerrecht. Eine Studie zu den Nürnberger Proessen, 1952*、である。一九五二年にはカールスルーエの高等裁判所判事を兼任したが、一九五二年ボン政府が刑法改正の準備をするに当つて司法省参事官として招聘された。一九五四年免死したフライブルク大学のシェーンケ教授の後任として招聘され、外国・国際刑法研究所長を兼ねてゐる。

イエニェックは非常に流暢なフランス語を喋る。マ・リストの死後、ドイツの学者はとかく国際会議に出席することが少なく、その刑法学も国際性を失いがちであるが、この中であつてイエニェックはドイツ刑法学会を代表して小まめに çık けては議論をし、又外国の学者の祝賀論文集にも積極的寄稿している。但し、残念なことに刑法理論家としては一流ではない。

大柄でその類には若き日の決闘のあとを残しているといつた風貌の人である。フライブルクの教授として就任したときの講演で、刑法改正と現代の人間像を論じた頃には、改正について慎重であつたが、長いこと委員として改正にたずなむつて後、最近発表した刑法改正草案の世界観の基礎という論文では、すうかり権威的となり、改正を強力に押しすすめるという論調に変つてしまつた。人間が権力を強むという一面を示すものといふやうか。

著書

Entwicklung, Aufgaben und Methoden der Strafrechtsvergleichung, 1955. (著藤金作邦・比較刑法について・早稲田大学比較法研究所紀要第一九号) など 紹介・岡本 刑法雑誌五巻四号六一頁以下) / Das Menschenbild unserer Zeit und die Strafrechtsreform, 1957. (紹介・岡本邦一 本誌三一巻二号八一頁以下) / Strafrecht und Strafrechtswandlung in der sowjetisch besetzten Zone Deutschland, 1962. / Das Institut für ausländisches und internationales Strafrecht in Freiburg i. Br. 1938-1963, 1963. (岡本邦一・兼金邦孝 一九六三年二月号八一頁以下(巻底)) / Pressefreiheit und militäri-

sches Staatsgeheimnis, 1964.

論文

Das Verfahren in Zivilsachen vor den Gerichten der französischen Militärregierung. DRZschr. 1948. S. 274 ff. / Kriegsverbrecherprozess gegen deutsche Kriegesgefangene in Frankreich. SJZ. 1949. S. 107 ff. / § 74 Abs. 2 S. 1 GKG. ist in der Berufungsinstanz nicht entsprechend anwendbar. DRZ. 1952. S. 25 ff. / Die Entwicklung der Zivilprozesspraxis seit 1945. ZZP. 1952. S. 364 ff. / Zur Frage der Strafbarkeit von Personenverbände. öffentl. Verw. 1953. S. 539 ff. / La protection pénale des conventions internationales humanitaires. Rev. int. dr. pén. comp. 1953. p. 13 ff. / Die strafrechtliche Verantwortlichkeit der Personenverbände. ZStrw. Bd. 65. 1953. S. 210 ff. / Die Strafgewalt internationaler Gemeinschaften. ZStrw. Bd. 65. 1953. S. 496 ff. / フレイブルク大学教授 外国・国際刑法学研究会 47

Die Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs in Strafsachen (Bd. 1-5, Entscheidungen zum Allgemeinen Teil des Strafrechts). GA. 1954. S. 322 ff. / Die europäische Konvention zum Schutz der Menschenrechte und Grundfreiheiten. NJW. 1954. S. 783 ff. / Zur Frage der Kuppelung gegenüber Verboten. MDR. 1954. S. 645 ff. / Die internationale Genocidium-Konvention vom 9. Dezember 1948 und die Lehre vom Völkerverbrechensrecht. ZStrw. Bd. 66. 1954. S. 193 ff. / Die internationale Rechtshilfe in Strafsachen in Europa.

ZStw. Bd. 66, 1954, S. 518 ff. / Die Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs in Strafsachen (Bd. 1-5, Entscheidungen zum Besonderen Teil des StGB). GA. 1955, S. 97 ff. / Crimes du droit des gens. Rev. int. dr. pén. comp. 1955, p. 503 ff. / Die Konkurrenz. ZStw. Bd. 67, 1955, S. 529 ff. / Le system pénitentiaire de la République Fédéral d'Allemagne. Les Grand. Syst. Pén. II, 1955, p. 283 ff. / La fonction sociale de la peine. Rev. int. déf. soc. 1955, p. 172 ff. / Die Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs in Strafsachen (Bd. 6 und 7). GA. 1956, S. 97 ff. / Les infractions commises à bord des aéronefs et leurs conséquences. Rev. int. dr. pén. comp. 1956, p. 371 ff. / Anstiftung, Gehilfenschaft und Mittäterchaft im deutschen Strafrecht. Schw. ZStw. Bd. 72, 1956, S. 225 ff. / Verbrechen gegen das Völkerrecht. Deut. LRRef. z. 4. Int. Kong. RVgl. 1956. / Die Behandlung des Zweikampfs in der Strafrechtsreform. JZ, 1957, S. 108 ff. / Ehreenschutz durch das strafrechtliche Feststellungsverfahren. GA. 1957, S. 365 ff. / Die an Bord von Luftfahrzeugen begangenen Straftaten und ihre Folgen. ZStw. 1957. (Deut. Beitr.) S. 195 ff. / Die Entwicklung des Völkerstrafrechts nach Nürnberg. Schw. ZStw. Bd. 73, 1957, S. 217 ff. / Vom Stil der gegenwärtigen deutschen Strafrechtspflege. F. f. Germann. (Schw. ZStw. Bd. 75), 1957, S. 56 ff. / Straftaten gegen Ausland. F. f. Rittler, 1957, S. 275 ff. / Die Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs in Strafsachen (Bd. 8 und 9). GA.

1958, S. 1 ff. / Die Entschädigung des Verletzten nach deutschem Strafrecht. JZ, 1958, S. 591 ff. / Der Einfluss des schweizerischen Strafrechts auf das deutsche. F. f. Logos. (Schw. ZStw. Bd. 76), 1958, S. 184 ff. / Die Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs in Strafsachen (Bd. 10 und 11). GA. 1959, S. 65 ff. / Methode der Strafrechtswissenschaft. St. Gen. 1959, S. 107 ff. / Vom Stil der gegenwärtigen deutschen Strafrechtspflege. DRiZ, 1959, S. 356 ff. / Das deutsche Wirtschaftsstrafrecht. JZ, 1959, S. 457 ff. / Les principes de la réforme actuelle du droit pénal allemand. Rev. scien. crim. e. dr. pén. 1959, p. 67 ff. / Die Behandlung der Stittlichkeitsverbrechen im Entwurf des Strafgesetzbuchs von 1959. Bek. d. Stittl. Del. BKA. 1959, S. 267 ff. / Die Bedeutung der Öffentlichkeit für die moderne Kriminalpolitik. ZStw. Bd. 71, 1959, S. 1 ff. / German criminal law reform; Its development and cultural-historical background. Essays in criminal science, 1961, p. 395 ff. / Die Entwicklung des Verbrechensbegriffs in Deutschland seit Baling im Vergleich mit der österreichischen Lehre. ZStw. Bd. 73, 1961, S. 176 ff. (梁・柳松雄 | 大陸法學) / La conscience humaine et la responsabilité pénale de l'individu, in: La responsabilité pénale, 1961, p. 415 ff. / Der strafrechtliche Handlungsbegriff in dogmengeschichtlicher Entwicklung. F. f. E. Schmidt, 1961, S. 139 ff. (梁・柳松雄 | 大陸法學) / Recht und Praxis der Untersuchungs-

hart in der Bundesrepublik Deutschland. GA. 1962. S. 65 ff. / Grundlagen der Strafrechtsreform. Zum Entwurf des neuen Strafgesetzbuchs. Evang. Welt. 1962. S. 721 ff. / Il progetto del nuovo codice penale tedesco. Rev. ital. dir. pén. 1962. p. 641 ff. / Der strafrechtliche Staatsschutz im Ausland. ZStw. Bd. 74. 1962. S. 339 ff. / Schweizerisches Strafrecht und deutsche Strafrechtsreform. Schw. ZStw. Bd. 78. 1962. S. 172 ff. (紹介・松本浩一・本間三三・八巻三十一〇八頁以下) / Die Bedeutung nicht-krankhafter Bewusstseinsstörungen und seelischer Ausnahmeerscheinungen für die Zurechnungsfähigkeit aus der Sicht des Juristen. Gerichtl. Psychol., herg. Blau ua. 1962. S. 208 ff. / Die Todesstrafe im ausländischen Recht. Fr. d. Tod. Str. 1962. S. 49 ff. / Aufbau und Stellung des bedingten Vorsatzes im Verbrechenbegriff. Fr. f. Wolf. 1962. S. 473 ff. / Gegen eine Erziehungsfunktion der Universalität. Convent. 1963. S. 52 ff. / Rapport général provisoire sur la question des effets internationaux de la sentence pénale. Rev. int. dr. pén. comp. 1963. p. 205 ff. / Die weltanschaulichen und politischen Grundlagen des Entwurfs eines Strafgesetzbuchs (E 1962). ZStw. Bd. 75. 1963. S. 1 ff. do. in: Prob. d. Str. Ref. 1963. S. 30 ff. / Die Vollstreckung ausländischer Straferekenntnisse in der Bundesrepublik Deutschland. F. f. v. Weber. 1963. S. 325 ff. / Etat actuel et perspective d'avenir des projets dans le domaine du droit international pénal. Rev. int. dr. pén. comp.

1964. p. 83 ff. / Le basi ideologiche e politiche del progetto per un nuovo codice penale germanico. Sc. Pos. 1964. p. 11 ff. / Die Behandlung der unechten Unterlassungsdelikten im deutschen und ausländischen Strafrecht. ZStw. Bd. 77. 1965. S. 109 ff.

アルミン・カウフマン (Armin Kaufmann)

一九二二年七月六日、バンテンに生れた。ゲッチンゲン大学のとときからヴェルツェルについて研究を重ね、一九五一年に学位を得た。論文は *Lebendiges und Totes in Bindungs Normentheorie. Normlogik und moderne Strafrechtsdogmatik*, 1954. 以下略。一九五七年ボン大学の私講師となった。講求論文は有名な *Die Dogmatik der Unterlassungsdelikte*, 1959 である。一九六一年にチュービンゲン大学員外教授となり赴任したが、一九六三年ボン大学の正教授として帰ってきた。ヴェルツェルと、退任したマ・ウェーバーと三人が目的々行為論の一大勢力としてボン大学派を形成している。

カウフマンは見るからに聡明そうな顔をしている。大へん小柄であるが、フアイトにあられたといった感じの学者である。師のヴェルツェル以上に徹底したフイナリストであるといわれるが、弁説も師よりはるかにうまい。たしかに、一面的ではあるけれども、いぐいと議論を押しまくる強さをもち、討論のマナーに比べると、論文ではかなりはげしい調子で、しかも相手の上げ足をとつたり、言わなうことを描定して議論したりするとこるものないわけではな

ハルドウィツヒとやり合つたりしているが、どちらもかなり一面的に誇張して議論するので論争がかみ合わない。ギリシアのアンドロラキスの批判に対して、高い調子の反批判をしたり、それを又個人的に会いに行つて反論されると、意外に丁寧な物腰でかわしたりする姿の細かさもあるという。

非常に論理的に明快な調子の論文を書き、目的的行為論の体系化たつとめているので、ヴェルツェルの学説の中の不明確さは払拭されてゆくが、この理論の本来の意味合いから次第にはなれてゆくような傾向が示されている。

論文

Tatbestandsbeschränkung und Rechtfertigung, JZ. 1955, S. 37 ff. / Die Strafsetzung zur Bewährung und das Verbot der reformatio in peius, JZ. 1958, S. 297 ff. / Der dolus eventualis im Deliktserfaun, ZStw. Bd. 70, 1958, S. 64 ff. / Die Urkunden- und Beweismittelfälschung im Entwurf 1959, ZStw. Bd. 71, 1958, S. 409 ff. / Methodische Probleme der Gleichstellung des Unrechtsens mit der Begehung, Jus. 1961, S. 173 ff. / Schuldfähigkeit und Verbotstrittum, F. t. E. Schmidt, 1961, S. 319 ff. (紹介・中義訳) 法学叢書70巻1号131頁(以下) / Unterlassung und Verbot, F. t. v. Weber, 1963, S. 207 ff. (紹介) 法学叢書77巻1号95頁(以下) / Das fahrlässige Delikt, ZSchr. f. Recht, 1964, S. 41 ff.

アルトウール・カウフマン (Arthur Kaufmann)

西ドイツ刑法学の現状

一九二二年、ジゲンに生れた。はじめ、フランクフルト大学の理学部に籍を置いたが、学徒兵として出陣し、ノールウェー空戦で負傷した。終戦後、ハイデルベルク大学に入学手続に行き、当時学部長だったラートブルフの人格に魅せられてそのセミナーに入った。その最後の弟子である。一九四九年に公刊された *Das Unrechtsbewusstsein in der Schullehre des Strafrechts. Zugleich ein Leitfaden durch moderne Schullehre*, 1949. (紹介・福田平、刑法雑誌三巻三号九七頁) により学位を得た。

その翌年、師の急死という不運に遭い、カトリック教徒というためもあり、ハイデルベルク大学での請求論文の受理者を見出せぬままカールスルーエ地方裁判所の裁判官として、実務のかたわら研究生活を続けていた。一九五九年に、エンギッシェの口添えもあって、ガラス教授が請求論文 *Das Schuldprinzip. Eine rechtsphilosophisch-strafrechtliche Untersuchung*, 1961. (紹介・沢浩一、法哲学年報法の概念(下)一六七頁以下) を受理したので私講師となり、一九六〇年よりザール大学の正教授となつて今日に至つてゐる。

カウフマンには刑法に関する論文とともに多くのすぐれた法哲学の著作がある。西独の法哲学者の中で、聖トーマスについての知識の深さ、ヤスマース、ハイデッガーに至る新しい哲学の受容といった幅の広い学識は高く評価されている。法哲学においては法の存在論的基礎づけを企て、刑法においても存在論的行為論の完成を志向してゐる。

著書・編書

ヒルデ・カウフマン (Hilde Kaufmann)

フルミン・カウフマン夫人である。ボン大学のH・V・ウェーバー教授の助手を長い間つとめて居て、刑事学、刑事政策研究に従事していた。一九六二年ボン大学の私講師となつた。責任主義にもとづく責任刑法の立場から、近代学派の主張をとり入れようとする社会防衛論とか保安処分一元論などに反対する旗印を鮮明にしている。学位、教授資格の論文は不明である。

大へんふくよかな、笑顔のやさしい感じのいい人である。御主人よりも大きく、かつ年齢も少しばかり上であるとか。これまでに発表された論文は三つであるが、今後、予測とか保安監置とか少年の処遇等についての発言を聞くことが出来るであらう。

論文

Was lässt die Kriminologie vom Strafrecht übrig? JZ. 1962, S. 193 ff. / Grammatices System der Difeese Sociale und das deutsche Schulstrafrecht F. 1. v. Weber. 1963, S. 418 ff. / Beleidigung und falsche Anschuldigung, in: Handwörterbuch der Kriminologie, 2. Aufl. 1965, S. 75 ff.

ケルン (Eduard Kern)

一八八七年一月二三日、シットウットガルトに生れた。父は陸軍大佐、その先祖は一六・七世紀に彫刻家一族としてならした人達であつたといふ。

ケルンは法実証主義の旗頭、ヘーリングの弟子である。一九二二

西ドイツ刑法学の現状

年 *Die systematische Abgrenzung der Verbrechenselemente bei*

der Beleidigung, 1912. で学位を取得。一九一九年に「ケルン」大学私講師となつた。請求論文は有名な *Die Äusserungselikte*, 1919 である。一九二〇年、フライブルク大学より招聘を受け、同大学員外教授に就任し、一九二三年正教授となつた。一九三六年にはチュービンゲン大学教授に転じ、長くその職にあつたが、一九五六年に退任した。その後も、著書の改訂、新著の公刊をつづけ、又学会にも出席して居られる。

その学風は堅実そのものであり、刑法、刑事法にすぐれた研究を發表している。しかし、何といつても、ケルンの業績について特筆すべきことは、裁判所構成法の体系化、その沿革史の研究である。七五歳をすぎたなお、国家の刑法的保護とか犯罪人の精神生活に関する論文集を發表するなど、まことに立派な研究態度であると言わねばならぬ。

なお、ケルンの著作目録はホルトダンマー刑法雑誌一九五七年一・一・二月号三八三頁以下にある。ここでは、その代表的な著書と一九五七年以後に公刊された論文をあげるにとどめておく。

著書

Ausnahngerichte. 1924. / Neue Formen erlaubter und unerlaubter Auspielungen. 1925. / Der gesetzliche Richter 1927 / Zur Strafrechtsreform. 1927. / Der Rechtsstaatsgedanke im Strafrecht und Strafverfahrenrecht von der Reichsgründung bis zur Gegenwart. 1933. / Die Grundgedanken des neuen Gerichts-

verfassungsrechts. 1936. / Der Aufgabenkreis des Richters. 1939. / Rechtsfälle des täglichen Lebens mit Lösungen. 1948. 5. Aufl. 1963. / Gerichtsverfassungsrecht. 1949. 4. Aufl. 1965. / Strafverfahrensrecht. 1949. (塚本・植田博隆・熊谷兼雄) 第1冊 1949. 6. Aufl. 1960. / Grundriss des Strafrechts. Bes. Teil. 1950. / Rechtsfälle aus dem Strafprozess. 1951. 2. Aufl. 1961. / Staat und Kirche in der Gegenwart. 1951. / Rechtsfälle aus dem Zivilprozess. 1953. / Geschichte des Gerichtsverfassungsrechts. 1954. / Strafrechtsfälle. Allg. Teil. 4. Aufl. 1964. / Strafrechtsfälle. Bes. Teil. 3. Aufl. 1963. / Der Strafschutz des Staats und seine Problematik. 1963. / Vom Seelenleben des Verweckers. 1964.

備考

Ist die Zuteilung eines Richters an einen auswärtigen Spruchkörper seines Gerichts wider seinen Willen zulässig? DRiZ. 1958. S. 135 ff. / Über die Mitwirkung von Richtern bei der Berufung von Richtern. DRiZ. 1958. S. 301 ff. / Eine Einzelfrage zum Problem des gesetzlichen Richters. JZ. 1958. S. 237 ff. / Zum Regierungsentwurf 1958 eines Richtergesetzes. JZ. 1958. S. 274 ff. / Die deutsche Finanzgerichtsbarkeit. DRiZ. 1960. S. 374 ff. / Das Ende der Friedensgerichte. JZ. 1960. S. 244 ff. / Das künftige Schicksal der Überretungen. RPr. 1960. S. 266 ff. / Das neue Richtergesetz. JZ. 1961. S. 617 ff. / Lehren des Brüh-

nennprozesse. DRiZ. 1962. S. 353 ff. / Zur Gleichbewertung der verschiedenen Zweige der Gerichtsbarkeit. JZ. 1962. S. 110 ff. / Der Bericht der Kommission zur Vorbereitung einer Reform der Zivilgerichtsbarkeit. ZZP. 1962. S. 145 ff. / Änderung des Grundgesetzes wegen der belasteten Richter? DRiZ. 1963. S. 246 ff. / Die Ausschliessung des Eröffnungsrichters im erkennenden Gericht. F. r. H. v. Weber. 1963. S. 368 ff.

キールフニン (Gerhard Kielwein)

一九二二年一月七日、シネトワットガルトに生れた。フラインブルク大学のシェーント教授の門下生の一人である。第二次大戦の前日、ロンドン大学での研究生生活をうち切つて最後の船でドーバーを渡つて帰国したという話が残つている。

従軍中、負傷して隻腕となる。戦後、再びイギリスに渡つて研究を続けた。

一九五三年にフラインブルク大学私講師となつたが、請求論文は *Die Straftaten gegen das Vermögen im englischen Recht*, 1955. にあつた。その後、ボン大学の司法省参事官として刑法改正の準備作業に従事したりしていたが、一九五六年にザール大学から招聘を受け員外教授に就任。一九五八年に正教授となつて現在に至つている。その研究歴からも分る通り、英法の知識、英語の流暢さには定評がある。又、シェーント教授の急逝後、フラインブルク大学の外国・國際刑法研究所長代理をしていたときその行政的手腕を発揮したと

のことであるがザール大学の今日の隆盛は、法学部長、評議員、学長として八年にわたつて活躍したことに負うところが大であるとされている。しかし、半面、キールワイン個人の研究業績が少なことは学界におけるその存在が貴重であるだけに残念である。

もとより、ザール大学には故ゼーリツヒ教授が設立し、近くはケルン大学のポーネ教授の遺された蔵書を買取り、さらにキールマンの集めた龐大な英・米の刑事学の文献を揃えた刑事学研究所をもつているから、今後の研究成果が待たれるところである。

論文

Reformfragen im internationalen Strafrecht. GA. 1954. S. 211ff. / Nebenstrafen, Ehrenstrafen und Sonderstrafen. Mat. Str. Ref. Bd. 2. I. 1954. S. 117 ff. / Die Straftaten gegen die persönliche Freiheit oder Sicherheit. ebenda. Bd. 2 II. 1955. S. 309 ff. / Der schwere Diebstahl, Raub und Erpressung. ebenda. Bd. 2 II. 1955. S. 321 ff. / Die Wirtschaftsspionage. ebenda. S. 493 ff. / Unterlassung und Teilnahme. GA. 1955. S. 225 ff. / Zum gegenwärtigen Stand der internationalen Kriminalpolitik. F. f. Richter. 1957. S. 95 ff. / Grundgesetz und Strafrechtspflege. An. Uni. Sar. Bd. 8. 1960. S. 127 ff.

クルーク (Ulrich Klug)

一九一三年一月七日「マックス・ノールに生れた」ノイナルンク大学フュンキッシェトビュルグ「学位論文 Die zentrale Be-

西ドイツ刑法学の現状

deutung des Schutzgedankens für den Zweck der Strafe, 1938. によつて取得し、一九五〇年、同大学私講師となつた。請求論文は Juristische Logik, 1951, 2. Aufl. 1958. (紹介、碧海純一、法学協会雑誌七六巻四号四七〇頁以下) である。一九五六年にマインツ大学員外教授に転じ、さらに一九六一年ケルン大学正教授に就任した。刑法律論学の他に、法哲学、殊に法論理学に見るべき業績を残している。だが、学界において特にその成果を高く評価されているのは、有限会社法、株式法、破産のコンメンタールで、刑法とそれら諸法との交錯する領域を手がけていることであろう。

著書 (共著)

Schmidt-Schilling-Goerdeler: Kommentar zum GmbH-Gesetz. 6. Aufl. 1956. / Fischer-Schmidt-Schilling-Weibert-Meyer-Landrut: Kommentar zum Aktiengesetz. 2. Aufl. 1957. / Lent-Weber: Kommentar zur Konkursordnung. 8. Aufl. 1958. / Probleme der Strafzumessung bei Diebstahl, Einbruch und Raub. 1958. / Klug: Aktienstrafrecht. 1962. / Aktuelle Probleme des Konkursstrafrecht in: Konkurs-, Treuhand-, Schiedsgerichtswesen. 23. 1962. S. 65 ff.

論文

Zum Problem der logischen und erkenntnistheoretischen Grundlage der juristischen Kausalitätslehre, in: Martinek: Rechtswissenschaft, Ursachenbegründung und Neurosenfragen. 1941. / Zur Kritik des rechtsphilosophischen Utilitarismus. ARSP. 1949. S. 222 ff. / Zur logischen Analyse der Kausalitätsformel im

Strafrecht, in: Menne-Wilhelmy-Angeli: Kontrolle Denken. 1951.
 / Das Menschenbild im Recht, in: Silber: Menschenbild der
 Gegenwart. 1955. / Zum Begriff der Gesetzeskonkurrenz. ZSStw.
 Bd. 68, 1956. S. 399 ff. / Der Eigentumsvorbehalt bei der Waren-
 und Wertpapierverschleuderung im Konkursstrafrecht. JZ. 1957.
 S. 462 ff. / Der Legalitätsbegriff. L. Ref. f. 5. Int. Kong. Rygl.
 1958. S. 47 ff. / Relatives und absolutes Bankrecht. F. f. Veit.
 1958. / Kritik in strafrechtlicher und rechtsphilosophischer Sicht.
 St. Gen. 1959. S. 579 ff. / Die Neuordnung des Bankstimm-
 rechts. F. f. Walter Schmidt, 1959. S. 39 ff. (この論文の英訳を Dan:
 Bibliographie juristischer Fachschriften und Fachschriftenbeiträge 1945-
 1961—Deutschland-Schweiz-Österreich, 1962, S. 44, 44' Umordnung 2
 400 ff. の中に収めてある) / Psychologische Vereinfachungen
 und strafrechtliche Folgerungen bei der Auslegung der Bestechungs-
 tatbestände. JZ. 1960. S. 724 ff. / Der Handlungsbegriff des
 Finalismus als methodologisches Problem. F. f. Emge. 1960. S.
 33 ff. / Sozialkongruenz und Sozialadäquanz im Strafrechtssystem.
 F. f. E. Schmidt, 1961. S. 249 ff. (紹介・中絶論・法學雜誌七〇巻五号一
 四八頁以下) なお、庭山英雄・期待可能性についての考察——
 社会的相当性との関係を中心として——(二橋義典五二巻四号八七頁以
 下(論評)) / Ordnung und Gesellschaft. Das Problem der Ordnung.
 1962. S. 332 ff. / Rechtsphilosophische und rechtspolitische Pro-
 bleme des Sexualstrafrechtes, in: Sexualität und Verbrechen.

1963. S. 27 ff. / Die Reine Rechtslehre von Hans Kelsen und die
 formallogische Rechtfertigung der Kritik an dem Pseudoschluss
 vom Sein auf das Sollen, in: Essays in Honor of Hans Kelsen,
 1964, S. 154 ff. / Die Verpflichtung des Rechtsstaats zur Ver-
 fahrung. JZ. 1965. S. 149 ff. / Rechtsstücke und Rechtsargu-
 mentation. F. f. H. C. Nipperdey, 1965. S. 71 ff.

クロンツ (Albert Krebs)

一八九七年一月七日、フランクフルトに生れた。父は牧師であ
 った。一九二三年、刑務官の生活に入った。チェーリングゲン、アイ
 ヒナッソンの刑務所に勤務し、矯正の業務に従事する一方、August
 Hermann Francke und Friedrich Wilhelm I. Ein Beitrag zur
 Geschichte des Schul- und Anstaltswesens, 1925. で学位を取得し
 た。一九三四年にその人道的・自由主義的な行刑思想がナチス政権
 の政策と相容れないところから、その職を追われた。戦後、ヘッセ
 ン州の司法省に行刑局長として迎えられ、一九五六年よりマールブ
 ルク大学の名誉教授として行刑学を講じている。

彼の論文の多くは、自分が主宰する行刑雑誌 (Zeitschrift für
 Strafvollzug) に発表されている。行刑学の分野における貴重な研
 究は高く評価されている。

論文

Grundsätze für die Verwaltung der deutschen Gefängnisse und
 Zuchthäuser. SchwZStR. Bd. 63, 1948, S. 369 ff. / Über die

Mitarbeit von Laien im englischen Gefängniswesen. F. t. Radbruch. 1948. S. 174 ff. / Schwedens Gefängniswesen. ZStw. Bd. 64. 1952. S. 406 ff. / Hauptfragen einer Rechtsverordnung über den Vollzug von Jugendstrafen. MKri. 1953. S. 129 ff. / Grundfragen des Strafvollzugs bei Jugendlichen und Heranwachsenden. Bsk. Jug. Krim. BKA. 1955. S. 157 ff. / Probleme der Behandlung Rückfälliger in der Strafanstalt. ZStw. Bd. 68. 1956. S. 198 ff. / Die heutige Situation des deutschen Strafvollzugs. Krim. u. Volls. d. Fr. Str. 1961. S. 27 ff. / Die Vorschläge von Heinrich Baltassar Wagnitz zur Ausbildung der Strafanstaltsbediensteten in ihrer Bedeutung für die Gegenwart, F. t. E. Schmidt. 1961. S. 70 ff. (紹介・加藤健三・袴井彌生○兼四寺八〇頁以下) / Probleme und Erfahrung bei dem Neubau von Strafanstalten. Univ. Tag. 1964. S. 143 ff.

ハンナター (Karl Lackner)

教授資格請求論文を書かぬに正教授になつた。全く例外的な存在である。それだけに有能な人であるといふことが分る。長く、多くの聯邦司法省参事官として活躍し、ロムメンターを書き、新しい法律の解説を書くなどの活躍をしてゐた。

刑法改正委員会でも、政府側委員として司法省を代表して大活躍をした。切れる頭とあつちやかな弁舌を駆使し、議事の進行に大あく寄与したといわれる。刑法改正委員会をしてゐるハイデルンツ大学

のオスミンがほれたら、一九六四年に正教授のポストを提供したといふ。中世のかりがかりした体の上で、見事な加藤キヨの風なをいへる。即ちなひと程ロケケな風なであらう。

兼藤 (共著)

Dallinger-Lackner: Jugendgerichtsgesetz. 1955. 2. Aufl. 1965. / Dreher-Lackner-Schwalin: Wehrstrafrecht. 1958. / Dallinger-Lackner: Rechtsprechung zum Jugendgerichtsgesetz. 1958. / Dallinger-Lackner: Wehrstrafrecht des Jugendgerichtsgesetzes. 1958. 編入

Das Mindestmass der Jugendstrafe. JZ. 1952. S. 359 ff. / Der Strafrechtsteil des Gesetzes zur Sicherung des Strassenverkehrs. MDR. 1953. S. 73 ff. / Das dritte Strafrechtsänderungsgesetz. Die Strafaussetzung zur Bewährung und die bedingte Entlassung. JZ. 1953. S. 428 ff. / Das Jugendgerichtsgesetz. JZ. 1953. S. 527 ff. / Nochmals: Entziehung der Fahrerlaubnis und Beschlagnahme des Führerscheins. NJW. 1953. S. 1172 ff. / Zum Wirtschaftsstrafgesetz 1954. MDR. 1954. S. 578 ff. / Nochmals: Ist die Entziehung der Fahrerlaubnis bei Anwendung des Jugendgerichtsgesetzes möglich? NJW. 1954. S. 629 ff. / Kollisionen zwischen Jugend- und Erwachsenenstrafrecht. GA. 1955. S. 33 ff. / Die Abgabe des Verfahrens nach dem Jugendgerichtsgesetz. GA. 1956. S. 379 ff. / Das vierte Strafrechtsänderungsgesetz. Ma-

- veraltet. *Recht.* JZ. 1957, S. 401 ff. / Verkehrsrecht und Strafrechtsreform. *DAR.* 1958, S. 286 ff. / Gedanken über die Abmündung der jüngeren Verkehrszwischenhandlungen im künftigen Recht. *DAR.* 1960, S. 309 ff. / Das fünfte Strafrechtsänderungsgesetz. JZ. 1960, S. 437 ff. / Zur Strafverfolgungsverjährung von vor dem 8. Mai 1945 begangenen Straftaten. *NJW.* 1960, S. 1046 ff. / Zur Reform des Verkehrsstrafrechts und des Verkehrsstrafverfahrens, in: *Folgenlose Verkehrsführung als Massenscheinung.* 1961, S. 141 ff. / Für und wider die Strafbarkeit des Ehebruchs. *ZFam.* 1962, S. 411 ff. / Der allgemeine Teil des Strafrechtbuchs in der Auseinandersetzung. JZ. 1963, S. 618 ff. / Was soll aus den Verkehrsübertretungen werden? *Jfb.* Nr. 4. 1963, S. 73 ff. / Das siebente Strafrechtsänderungsgesetz. JZ. 1964, S. 674 ff. / *Kriminologie und Strafrecht.* *Krim. Biol. G.* 1964, S. 6 ff. / Das zweite Gesetz zur Sicherung des Strassenverkehrs. JZ. 1965, S. 92 ff. u. 120 ff.

ランゲ (Richard Lange)

一九〇六年四月二九日、ウィットシェトックに生れた。ベルリン大学でコールラウシュの助手となつたのが一九三〇年である。一九三三年に *Der moderne Täterbegriff und der deutsche Strafgesetzentwurf.* 1935. 出版された。一九三八年に私講師となつた。請求権文化社 *Die notwendige Teilnahme.* 1940. 出版。一九四〇年、イ

ーナ大学員外教授、一九四三年同正教授となり、一九四九年五月頃まで留まつていたが、一九四九年西に逃れ、一九四九年冬学期よりベルリン自由大学教授となり、次いで一九五一年にはケルン大学に転じ、今日に至つてゐる。戦後、*全刑法雑誌の復刊* (一九五〇年)以来、編集責任者である。これは、モルラウシュの遺著である刑法註釈書を三九・四〇版 (一九五〇年) から改訂する仕事を引き受けたことと併せて、かつてのベルリン大学のリスト研究室の中心がモルラウシュからランゲに移つたことを意味するものであらう。ランゲの業績には注目すべきものが多いが、中でも一九五〇年の前半に多くのすべれた錯誤論に関する論文があり、又、一九五五年に *ドイツ刑法雑誌* に発表したドイツ刑法改正の根本問題、一九六〇年の *ドイツ法曹会議創立一〇〇年記念論文集* に寄せた「刑法改正の刑事学的基礎における変遷」は非常に重要な文献である。又、ランゲは最後まで東独に居た経験をもつた西独の学者の一人である。社会主義体制のもつ矛盾、その自由のなさ、非法治性というものを骨身にしみて体験したという、それからあらぬか、東独の刑法、裁判制度を批判する論著も多し。

著書

Kohrausch-Lange: 39/40. *Aufl.* 1950 (紹介・吉川経夫、*刑法雑誌* 二卷一寺一六四頁以下)、43. *Aufl.* 1961. / *Zur Strafrechtsentwicklung in der sowjetischen Besatzungszone.* 1951. / *Der Rechtsstaat als Zentralbegriff der neuesten Strafrechtsentwicklung.* 1952. / *Grundfragen der Bereicherung des Strafrechtbuchs*

unter besonderer Berücksichtigung der Strafzwecke, der Strafzwecknormen und der Tatbestandstechnik. Verh. d. Jur. Tag. (1951), 1952. / Die Justiz in der sowjetischen Besatzungszone. 1954. / Schutz der Landesverteidigung. 1957. / Rechtsidee und Rechtsideologie in West und Ost. Verh. z. 42. Jur. Tag. 1957.

書目

ノ一ノ六第廿七世 Der gemeingefährliche Rausch. ZStw. Bd. 59. 1940. S. 574 ff. / Die grundsätzliche Bedeutung der neuen Bestimmungen über den Geltungsbereich des Strafrechts. DS. 1941. S. 6 ff. / Strafbegründung durch Fortsetzungszusammenhang. ZAK. 1941. S. 267 ff. / Täterschuld und Todesstrafe. ZStw. Bd. 62. 1943/44. S. 175 ff. / Zum Denunziantenproblem. SJZ. 1948. S. 302 ff. / Das Kontrollratsgesetz Nr. 10 in Theorie und Praxis. DRZSchr. 1948. S. 148 ff. u. 185 ff. / Eduard Kohlrausch. DRZschr. 1948. S. 135 ff.

ノ二ノ一五第廿七世 Die Rechtsprechung des Obersten Gerichtshofs für die Britische Zone zum Verbrechen gegen die Menschlichkeit. SJZ. 1948. S. 655 ff. / Probleme des § 1 StGB. MDR. 1948. S. 310 ff. / Die Schuld des Teilnehmers, insbesondere bei Tötungs- und Wirtschaftsverbrechen. JR. 1949. S. 165 ff. / Zur Strafrechtsreform. NJW. 1949. S. 695 ff. / Zur strafrechtlichen Judikatur des Obersten Gerichtshofs für die Britische Zone. JR. 1950. S. 615 ff.

ノ二ノ六第廿七世 Unzucht bedeutet in § 175 StGB dasselbe wie unzüchtige Handlung? JZ. 1951. S. 561 ff. / Zur Strafbarkeit von Personenverbänden. JZ. 1952. S. 261 ff. / Forensische Bedeutung der Tiefenpsychologie. Z. Ger. Med. 1952. / Ordnungswidrigkeiten als Vergehen. GA. 1953. S. 3 ff. / Irrtumfragen bei der ärztlichen Schwangerschaftsunterbrechung. Zugleich ein Beitrag zur Tatbestands- und zur Irrtumlehre sowie zum ärztlichen Berufsrecht. JZ. 1953. S. 9 ff. / Ordnungswidrigkeiten bei den Ordnungswidrigkeiten. NJW. 1953. S. 687 ff. / Das dritte Strafrechtsänderungsgesetz (Strafrechtsbereinigungsgesetz). NJW. 1953. S. 1161 ff. / Grundfragen des Auslieferung- und Asylrechts. ZStw. Bd. 65. 1953. S. 351 ff. / Ist die Polizeiverordnung über die Werbung auf dem Gebiet des Heilmittelwesens v. 29. 9. 1941 noch anwendbar? NJW. 1954. S. 98 ff. / Die Systematik der Strafdrohungen. Mat. St. Ref. Bd. 1. 1954. S. 69 ff. (梁谷・米糠英密「ユベニウキトヨ罪状抽出編」(四訂版) / Grundfragen der deutschen Strafrechtsreform. SchwZStR. Bd. 70. 1955. S. 373 ff. / Der Strafgesetzgeber und die Schuldlehre. JZ. 1956. S. 73 ff. / Die Magna Charta der anständigen Leute. JZ. 1956. S. 519 ff. / Die Anwendung des sowjetischen Strafrechts nach Inhalt und Form in der sowjetzonalen Praxis, in: Die Entwicklung des sowjetischen Strafrechts und sein Einfluss auf die Rechtsprechung in der Sowjetzone. 1956. S. 41 ff. / Nur eine Ordnungsg-

würigkeit? JZ. 1957. S. 233 ff. / Die Behandlung der Voll-

trunkenheit in der Strafrechtsreform. JR. 1957. S. 242 ff. / Die

Sanktionen im Wirtschaftsrecht. L. Ref. z. 5. Int. Kong.

RVgl. 1958. S. 217 ff. / Zur Teilnahme an unvorsätzlicher

Haupttat. JZ. 1959. S. 560 ff. / Zur Frage der Anerkennung

von Straftatdelen der sowjetischen Besatzungszone in der Bundes-

republik. Jb. f. OR. 1960. S. 9 ff. / Wandlungen in den krimi-

nologischen Grundlagen der Strafrechtsreform. 100 Jahre Jur.

Tag. Bd. 1. 1960. S. 345 ff. / Betrachtung und Behandlung von

Rechtbrechern nach künftigen deutschen Strafrecht. Internationale

Verbrechensbekämpfung. BKA. 1960. S. 231 ff. / Das Problem der

Objektivität im Recht. Univ. Tag. 1961. S. 104 ff. / Das juristisch-

forensisch-kriminologische Grenzgebiet. Vom Standpunkt des

Juristen. in: Handbuch der Neurosenlehre und Psychotherapie.

Bd. V. 1961. S. 404 ff. / Was bedeutet die Änderung des Geri-

chtsverfassungsgesetzes in der Sowjetzone? F. f. E. Schmidt.

1961. S. 551 ff. (綜合・中江氏) 刑事政策の理論と実践

/ Menschenbild und Strafrechtsreform. Zeitwende. 1962. S. 582 ff.

/ Der Strafanspruch des Staates und die Grenzen der Strafbarkeit.

Prob. d. Str. Ref. 1963. S. 75 ff. / Der juristische Krankheits-

begriff. Beitr. z. Sex. Forsch. H. 28. 1963. S. 1 ff. / Gesetzge-

bungfragen bei den Rechtfertigungsgründen. F. f. v. Weber.

1963. S. 162 ff. / Zur Preisgabe von Staatsgeheimnis. JZ. 1965.

S. 297 ff.

マンテン = ヨハンニタン (Detrich Lang-Hinrichsen)

一九〇二年三月一日、ドレスラウに生れた。父親も法官であ

った。一九二七年司法官候補となったが、一九二九年ドレスラウ大

学のナインラー教授の助手となった。学位論文は *Die Bedeutung*

des Zwitterteils im Strafverfahren. 1926. である。請求論文は不明

である。戦後、一九四九年東ベルリンのフンホルト大学員外教授、

一九五〇年正教授となったが西独に逃れ、フンベルクにある神学・

哲学の単科大学教授となった。一九五三年フライブルク大学講師、

この頃シュエントケのあとをついで外国・国際刑法研究所長となつ

た。一九五四年聯邦判事に転出し、ケルン大学名誉教授を兼ねた。

一九六三年、マインツ大学正教授で就任して今日に至っている。ラ

ング・エンリクセンは英語に堪能であり、外国刑法研究にも見るく

あつのがる反面、ナインラーゆかりの細かい議論にもすぐれたもの

がある。著 (能) 著

Das Brasilianische Strafgesetzbuch. 1953. / Das Strafsystem

im ausländischen Strafrecht. 1955. / Betrachtungen zur Straf-

rechtsreform. in: Peters—Lang—Hinrichsen: Grundfragen der

Strafrechtsreform. 1959. S. 53 ff. / Die kriminalpolitische Auf-

gaben der Strafrechtsreform. Gutacht. z. 43. Jur. Tag. 1960. 編者

ペンヤント著 Zum 75. Geburtstag Prof. Dr. Johannes Nagler. JR. 1951. S. 97 ff. / Die Lehre von der Geduld in der Patristik und bei Thomas von Aquin. Geist und Leben. 1951. S. 209 ff. u. 264 ff. / Zur Frage des Unrechtsbewusstseins. ZStrw. Bd. 63. 1951. S. 332 ff. / Zur Problematik der Lehre von den Tatbestands- und Verbotsirrtum. JR. 1952. S. 184 ff. / Tatbestandslehre und Verbotsirrtum. JR. 1952. S. 302 ff. u. 356 ff. / Johannes Nagler zum Gedächtnis. ZStrw. Bd. 64. 1952. S. 436 ff. / Strafgesetzgebung in Brasilien. ZStrw. Bd. 64. 1952. S. 514 ff.

トントント著 Zum Handlungsbegriff im Strafrecht. JR. 1953. S. 88 ff. / Adolf Schönke t, JR. 1953. S. 217 ff. / Die irrtümliche Annahme eines Rechtfertigungsgrundes in der Rechtsprechung des Bundesgerichtshofes. Zugleich ein Beitrag zur Lehre vom Verbotsirrtum. JZ. 1953. S. 362 ff. / Das Strafsystem. Mat. Str. Ref. Bd. 2. I. 1954. S. 33 ff. / Die Schuld- und Irrtumslehre. Bd. 2. I. 1954. S. 381 ff.

藤沢義経氏著 Zur ewigen Wiederkehr des Rechtspositivisms. F. t. Mezger. 1954. S. 1 ff. / Zum System der Strafen und sichernden Massnahmen im englischen Recht. F. t. B. Kraft. 1955. S. 138 ff. / Zu Reinhart Maurachs Lehrbuch des Allgemeinen Teils des Deutschen Strafrechts. MDR. 1956. S. 589 ff. / Zur Frage der Zurechnung von Folgen der Straftat bei der Strafzumessung. GA. 1957. S. 1 ff. / Zur Frage der Schuld bei

Straftaten und Ordnungswidrigkeiten. GA. 1957. S. 225 ff. / Zur Tragweite der Bestimmung des Artikels 104 Abs. 2 des Grundgesetzes, nach welcher über die Zulässigkeit und Fortdauer einer Freiheitsentziehung nur der Richter zu entscheiden hat. JR. 1959. S. 321 ff. / Die Rechtsprechung des Bundesgerichtshofes zum materiellen Strafrecht. DRiZ. 1960. S. 380 ff. / Zur Frage der Todesstrafe. JR. 1961. S. 321 ff. / Zur Krise des Schuldgedankens im Strafrecht. ZStrw. Bd. 73. 1961. S. 210 ff. (澤々・如原 著) 本誌三六卷八号一〇〇頁以下)

トントント著 Probleme der strafrechtlichen Schuld und der Kriminologie. Civitas. 1963. S. 206 ff. / Betrachtungen zur sog. ethischen Indikation der Schwangerschaftsunterbrechung. JZ. 1963. S. 721 ff. Zum gegenwärtigen Stand der Strafrechtsreform in der Bundesrepublik Deutschland. JR. 1965. S. 201 ff.

ヘルマン (Heinz Lefrenz)

一九一三年七月一五日、ハイデルンクに生れる。精神病学を専攻し、ハイデルンク大学のクルト・シュナイダーの指導を受け、同大学の児童精神科に勤務し、併せて法学の学位も取得した。一九五六年に同大学の私講師となったが、請求論文は *Die Kriminalität der Kinder*. 1957. (澤介・宮沢 著) 本誌三三卷一・三号七八頁以下) である。一九五九年、同大学員外教授、一九六三年正教授となった。

レンヘレンツはドイツ刑事学の中に今や確固とした地位を得たように思われる。全刑法雑誌の刑事学に関する書評欄で、おびおびした批判を行なっている。

医学者の出身らしく重厚な感じの人であるが、話はず手である。論文でも華義でも、自分の実験で手がけた臨床例を豊富にとり入れて説明するが、ケッピンガーとは異なり、アメリカ社会学の成果には殆んど注意を払わない。

論文

The rechtsphilosophischen Grundlagen des § 51 StGB. Nervenarzt.

1948. S. 364 ff. / Die Anwendbarkeit des § 51 StGB. auf die kriminelle Psychopathen. StZ. 1949. S. 251 ff. / Die psychiatrische Indikation der Schwangerschaftsunterbrechung und Unfruchtbar-

machung nach geltendem Recht. Nervenarzt. 1952. S. 252 ff. / Neuere Ergebnisse der gerichtlichen Psychiatrie. Fortschr. d.

Neur. u. Psych. 1954. S. 369 ff. / Psychopathentypen in kriminologischer Sicht. K. Biol. G. 1955. S. 13 ff. / Zur Problematik

der kriminologischen Prognose. ZStw. Bd. 68. 1956. S. 233 ff. / Probleme der kriminologischen Prognose. K. Biol. G. 1958. S. 35 ff.

/ Der Entwurf des Allgemeinen Teils eines Strafgesetzbuchs in kriminologischer Sicht. ZStw. Bd. 70. 1958. S. 25 ff. / Die

Stellung der Kriminologie zwischen Jurisprudenz und Psychiatrie. St. Gen. 1959. S. 119 ff. / Die Persönlichkeitsbeurteilung jugend-

licher Rechtsbrecher. Krim. u. Vollz. d. Freih. Str. 1961. S. 112 ff.

/ Der Beitrag der phänomenologischen Anthropologie zur Kriminologie. F. t. E. Schmidt. 1961. S. 645 ff. (紹介・石原明) 法学雑誌 七十一巻五号九七頁以下) / Richter und Sachverständiger. K. Biol. G. 1962. S. 35 ff. / Verantwortung und Verantwortlichkeit des naturwissenschaftlichen Sachverständigen. Z. f. anal. Chemie. 1962. S. 248 ff.

リンクナー (Theodor Lenckner)

一九二八年七月一日、シトゥエーベツシト・ホルに生れた。一

九四八年から五二年まで、チュービンゲン大学に学び、一九五三年司法官候補となり、併せて同大学のシトレーダー教授の助手とな

る。一九五七年に論文 *Der Prozessbeitrag* (未公開) により学位を取

得し、銀行の法律顧問となる。一九六〇年に再びチュービンゲン大

学助手となり、更に研究生活を送り、一九六三年冬学期には私講師となつた。論文 *Die rechtserregende Notstand. Zur Problematik im Entwurf eines Strafgesetzbuches* (E 1962) がある。

一九六四年四月、ミンクナー大学正教授として招聘され、その地位に就く。

論文

Die Einwilligung Minderjähriger und deren gesetzlicher Vertreter. ZStw. Bd. 72. 1960. S 446 ff. (紹介・加藤一郎) 法学雑誌 四十一(一四四) / Vertragwert und Vermögensschaden beim Betrug

des Verkäufers. MDR. 1961. S. 652 ff. / Notwehr bei provoziertem

und verschuldetem Angriff. GA. 1961. S. 299 ff. / Das Zusammenreffen von strafbarer und strafloser Begünstigung. Jus. 1962. S. 302 ff. / Ausgesperrt, Schweigepflicht und Zeugnisverweigerungsrecht. NJW. 1965. S. 321 ff.

ノス (Günter Less)

一九〇四年一月三日、オックスンに生れた。
一九五〇年ヘルランゲン大学私講師となつた。論文は *Vom Wesen und Wert des Richtertests*, 1954. である。受理したのは当時岡大学教授たつたハイニッツではなからうか。なお、レスは高等裁判所判事でもある。一九五七年岡大学の員外教授となり、今日に至つてゐる。

論文

Zur Anwendung experimentar-psychologischer Methode bei Zeugen. DRZsch. 1950. S. 322 ff. / Revisionsurteil oder Revisionsbeschluss? SJZ. 1950. S. 68 ff. / Die Rechtsstellung der Staatsanwaltschaft. JR. 1951. S. 193 ff. / Über die Vorliebe des deutschen Richters für das Unpersönliche. JZ. 1951. S. 468 ff. / Gibt es strafbare mittelbare Täterschaft, wenn der Tatmittler rechtmässig handelt? Ein Beitrag zur Lehre vom Verbrechen. JZ. 1951. S. 550 ff. / Weniger Dogmatik, mehr Erfahrungswissenschaft. JZ. 1952. S. 173 ff. / Kriminologie und Studienreform. JZ. 1955. S. 700 ff. / Genügt „bedingtes Wollen“ zum strafbaren Verbrechen?

chensversuch? GA. 1956. S. 33 ff. / Der Unrechtscharakter der Anstiftung. ZStw. Bd. 69. 1957. S. 43 ff. / Schuldstrafe und Wissenschaft. DRiZ. 1961. S. 3 ff. / Die Verantwortung des Einzelnen im Rechtsstaat. DRiZ. 1961. S. 133 ff.

マイホーナー (Werner Maihofer)

一九一八年一月二〇日、コンスタンツに生れた。シェーンケ教授に提出した論文 *Der Handlungsbegriff im Verbrechenssystem*, 1953. (紹介・福田平、神戸法学雑誌三巻四号八四五頁) により学位を取得し、師の急死により教授資格論文をヴォルフ教授に提出して一九五三年フライブルク大学私講師となつた。 *Recht und Sein. Prolegomena zu einer Rechtsontologie*, 1954. がそれである。一九五五年、ザール大学員外教授に就任し、一九五六年以来正教授である。

ザール大学では法及び社会哲学研究所長を兼ね、秘書・助手七人のスタッフをもち、精力的な研究活動をしている。刑法理論学と法学に数多くのすぐれた業績を残している。

マイホーナーはアメリカ社会学、殊に文化人類学の文献を豊富に集め、その成果を彼独自の法哲学体系の中にくみ入れようと志向している。今後の展開には期待して待つべきものがある。

マイホーナーの文章はハイデッカーばりのむずかしい言葉が用いられている。しかし、マイホーナー位、言葉を練り、検訂し、無駄な表現をなくそうと苦心する人は少いであらう。

著書 (選集)

Vom Sinn menschlicher Ordnung. 1956. / Naturrecht oder Rechtspositivismus? 1962. / Naturrecht als Existenzrecht. 1963. / Staatsrecht im Rechtsstaat. Veröffentlichung Nr. 53 der Evangelischen Akademie in Hessen und Nassau. 1965.

譯文

Der Unrechtsvorwurf. Gedanken zu einer Unrechtslehre. F. t. Ritter. 1957. S. 141 ff. / Der Versuch der Unterlassung. GA. 1958. S. 289 ff. / Die Natur der Sache. ARSP. Bd. 44. 1958. S. 146 ff. / Zur Systematik der Fahrlässigkeit. ZStw. Bd. 70. 1958. S. 159 ff. / Die Bindung des Richters an Gesetz und Recht. An. Univ. Sar. 1960. S. 5 ff. / Das Problem des Naturrechts. ARSP. Bd. 46. 1960. S. 417 ff. / Ordnung und Gesellschaft, in: Das Problem der Ordnung. 1961. S. 315 ff. / Der soziale Handlungsbegriff. F. t. E. Schmidt. 1961. S. 156 ff. (譯文・本書卷終) 著者講演會(第一回) (東京) / Konkrete Existenz. Versuch über die philosophische Anthropologie Ludwig Feuerbachs. F. t. E. Wolf. 1962. S. 246 ff. / Pressfreiheit und Landesverrat. I. u. II. Bl. f. Deut. Int. Politik. 1963. S. 26 ff. u. 107 ff. / Le droit naturel comme dépeusement du droit positive. Arch. d. phil. d. dr. Nr. 8. 1963. p. 177 ff. / Was ist Recht? Zur Einführung in die Grundfragen der Rechtsphilosophie. Jus. 1963. S. 165 ff. / Recht und Existenz, in: Vom Recht. 1963. S. 161 ff. / Pressfreiheit und Landesverrat. Arch. f. Pressrecht. 1963. S.

385 ff. / Menschenbild und Strafrechtsreform—Das philosophische Problem der Strafe. Univ. Tag. 1964. S. 1 ff. / Staatsrecht im Rechtsstaat. Bl. f. Deut. Int. Politik. 1964. S. 32 ff. u. 123 ff. / Das Problem der Todesstrafe. Blätter für deut. und int. Politik. Heft 1. 1965. S. 3 ff. / NS-Verbrechen und Verjährung. Beilage zur Wochenzeitung das Parlament. 24. März 1965. S. 3 ff.

フアンリマン (Reinhard Maurach)

一九〇二年三月二十五日、黒海をめぐり出づるソ聯邦のクリミア半島にある町「ジモンホロポーン (Simferopol)」に生れた。ペウラフンは西独をめぐり、ソ聯邦であり、刑法のみならず、ソビエト法一般についての研究を発表している。現在「ジモンホロポーン」にある東ヨーロッパ法研究所を主宰しているのも、その過去の経歴がそれを可能にしているのである。

フンスラウ大学卒業後、同大学の東ヨーロッパ研究所員となり、一九二六年から三七年まで所長の任であった。又、一九三〇年から三九年まで裁判官としても活躍し、一九三四年には教授資格を獲得した。講義論文は *Kritik der Notstandstheorie*, 1935. である。当時、同大学教授であったウエーグナーが受理したのである。

だが、私講師になつたのは一九四〇年である。一九四一年にはケーニヒスベルク大学員外教授、一九四四年正教授となつたが終戦となり、東プロイセンから追われてミュンヘン大学講師に就任したのが一九四七年である。翌年正教授に任ぜられ、今日に至っている。

原註”東京法政研究所を著す”年報の責任編輯者である。著述は『法律』紙の編輯を兼ねたヨシキキーはハロワヤシブツノシタワシベツトの題の小説を入手する。

解題

System des russischen Strafrechts. 1928. / Grundlagen des rätumaischen Strafrechts. 1933. / Volksethik und Strafrecht.

1934. / Der russische Rechtsrat. 1939. / Staatsgehörigkeitsrecht der UdSSR. 1942. / Grundriss des deutschen Strafrechts. Allg. Teil. 1948. / Grundriss des deutschen Strafrechts. Bes. Teil. 1948.

(著者) 本館の主任編集者・櫻田半。『原註』紙の編輯者としてハロワヤシブツノシタワシベツトの責任と責任を負った。『原註』紙の編輯者としてハロワヤシブツノシタワシベツトの責任と責任を負った。『原註』紙の編輯者としてハロワヤシブツノシタワシベツトの責任と責任を負った。

Der Kriegsverbrecherprozess gegen deutsche Gefangene in der UdSSR. 1950. / Deutsches Strafrecht. Bes. Teil. 1. Aufl. 1952.

4. Aufl. 1964. / Das Rechtssystem der UdSSR. 1953. / Deutsches Strafrecht. Allg. Teil. 1. Aufl. 1954. 3. Aufl. 1965. / Handbuch der Sowjetverfassung. 1955. / Die kriminalpolitische Aufgaben der Strafrechtsreform. Gutacht. z. 43. Deut. Jur. Tag. 1960.

編者

トシキキーハロワヤシブツノシタワシベツト

MKri. 1933. S. 705 ff. / Die Rechtsprechung des Obersten Gerichtshofes der RSFSR in der Periode des „sozialistischen Wiederaufbaus“. ZSStw. Bd. 53. 1933. S. 333 ff. / Die Sowjetunion

im Kampf gegen die Kinderkriminalität. MKri. 1936. S. 215 ff. / Handlungspflicht und Pflichtverletzung im Strafrecht. DS. Bd. 3. 1936. S. 113 ff. / Die „richterliche Unabhängigkeit“ nach der neuen Sowjetverfassung. ZAK. 1937. S. 685 ff. / Vier Jahre bolschewistischer Strafrechtsgeschichte (1933-1936). ZStw. Bd.

56. 1937. S. 735 ff. / Treupflicht und Schutzgedanke im internationalen Strafrecht. DS. Bd. 5. 1938. S. 1 ff. / Der Bankrott der bolschewistische Strafrechtsdoktrin. DS. Bd. 5. 1938. S. 359 ff.

/ Das neue Gerichtsverfassungsrecht der Sowjetunion. ZÄk. 1939. S. 409 ff. / Die jüdische Sonderbesteuerung im Rußland. Ein Beitrag zur Geschichte der russischen Judenpolitik. ZSStaw. Bd. 99. 1939. S. 676 ff.

トシキキーハロワヤシブツノシタワシベツト Die Bekämpfung der Jugendkriminalität in der Sowjetunion. MKri. 1940. S. 130 ff.

“ハロワヤシブツノシタワシベツト” Zur neueren Judikatur über Meinheitsbeihilfe durch Unterlassen. SJZ. 1949. S. 541 ff. / Das Kriegsrecht vom Blickfeld der Sowjetunion. Jb. int. u. ausl. öf. R. 1949. S. 736 ff. / Praktische Fragen zur Hehlerei. Polizei. 1949. S. 87 ff.

/ Aktuelle Grenzprobleme des Betruges. Polizei. 1949. S. 147 ff. / Notstand, Konfliktslage und Schuld. Spruchgericht. Zent. Bl. f. B. Zone. 1949. Heft 3. S. 45 ff. / Betrachtungen zum Schicksal des deutschen Ost. Archiv. 1950. Nr. 12. / Spitzbergen zwischen Osten und Westen. ZSchr. f. Geopolitik. 1951. S. 349 ff. / Der

Fall Konitz. ZSchr. f. Geopolitik. 1951. S. 502 ff. / Das Gesetz zum Schutz der persönlichen Freiheit. NJW. 1952. S. 163 ff. / Bemerkungen zur neuesten Hehlerechtsprechung des Bundesgerichtshofes. JZ. 1952. S. 714 ff. / Die Systematik des Besonderen Teils eines neuen Strafgesetzbuchs. Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 231 ff. (紹介・國社書院「ドイツの刑法」一〇二頁以下) / Die Behandlung der unselbständigen tatbestandlichen Abweichungen und der eigenständigen Verbrechen de lege ferenda. Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 249 ff. (紹介・中日書「ドイツの刑法」五〇一—五〇八頁以下) / Die politischen und soziologischen Grundlagen des sowjetischen Strafrechts, in: Die Entwicklung des sowjetischen Strafrechts und sein Einfluss auf die Rechtsprechung in der Sowjetzone. 1956. S. 9 ff. / Zum subjektiven Tatbestand des §§ 176. Nr. 1. 177. StGB. GA. 1956. S. 305 ff. / Zur Problematik der Rechtsbeugung durch Anwendung sowjetzonalen Rechts. R. in Ost und West. 1958. S. 177 ff. / Adäquanz der Verurteilung oder der Fahrlässigkeit? (Gedanken zum Urteil des BGH vom 3. 6. 1959—4. StR. 1961/59). GA. 1960. S. 97 ff. (紹介・「法律」三三巻一四—一三三頁) / Versuch einer Periodisierung der sowjetischen Rechtsgeschichte. Jb. f. Ostrecht. 1960. S. 107 ff. / Von Wesen und Zweck der Strafe. SuS. 1960. S. 26 ff. / Das Jugendstrafrecht. SuS. 1960. S. 91 ff. / Die Problematik der Verbrechenverabredung. JZ. 1961. S. 137 ff. / Die strafrechtliche

Beurteilung des unberechtigten Erwerbs von Volkswagenaktien. NJW. 1961. S. 625 ff. / Deliktcharakter und Auslegung der Notzuchtbestimmung des § 177 StGB. NJW. 1961. S. 1050 ff. / Das System der Sanktionen im neuen Strafgesetzbuch der Grossrussischen Sowjetrepublik vom 27. Oktober 1960. R. in Ost. und West. 1961. S. 85 ff. / Fragen der actio libera in causa. Jus. 1961. S. 374 ff. / Das Unrechtsbewusstsein zwischen Kriminalpolitik und Strafrechtsdogmatik. F. f. E. Schmidt. 1961. S. 301 ff. / Schuld und Strafe, in: Fr. d. Todesstr. 1962. S. 7 ff. / Die Beiträge der neueren höchstrichterlichen Rechtsprechung zur Bestimmung des Wahrvorberechens. NJW. 1962. S. 716 ff. u. 767 ff. / Zur Rechtsnatur des erpresserischen Kindesraubes (§ 239 a. StGB). JZ. 1962. S. 559 ff. / Aus der Rechtsprechung der sowjetischen Gerichte zum Allgemeinen Teil des Strafrechts. Jb. f. Ostrecht. 1963. S. 43 ff. / Das neue sowjetische Jugendstrafrecht. R. in Ost und West. 1963. S. 137 ff. / Die Objekte der Einziehung nach § 86. StGB. JZ. 1964. S. 529 ff.

ヘイヤー (Helmuth Mayer)

一八九五年五月一日、ヴェルツブルクに生れた。考え方といい、風格といい、これが典型的なドイツ的な刑法学者とよばれる。故郷のヴェルツブルク大学のヘートカー教授として著書、実務とも長期間にわたって著した。学位論文は *Zucht-*

gewalt und Strafrechtspflege. Ein grundsätzlicher Versuch. 1922.
p. 49. 一九二六年に博士論文 *Die Untreue im Zusammenhang
der Vermögensverbrechen.* 1926. p. 教授職務を辞職したが、その後
しばらく弁護士をして居た。一九二八年にツールムンブルク大学私講
師に就任し、一九三〇年ローストック大学に招聘された(員外教授。
一九三六年に正教授となる)。一九四四年にはキール大学に転じ、そ
の後高等裁判所判事を兼ねて居た。一九六二年に引退して、後進の
指導に努むたり。国憲刑法学会を出版したりして居る。

著書

Das Strafrecht des deutschen Volkes. 1936. / Strafrecht.
Allgemeiner Teil. 1953. / Strafrechtsreform für heute und mor-
gen. 1962.

論文

ホーレンマン博士著に Zum Münchener Hochverratsprozess.
GS. Bd. 91. 1925. S. 93 ff. / Meineid und falsche Aussage nach
dem Entwurf. GS. Bd. 93. 1927. S. 172 ff. / Herbstagung der
Deutschen Strafrechtlichen Gesellschaft. GS. Bd. 94. 1927. S.
30 ff. / Sommeragung der Deutschen Strafrechtlichen Gesell-
schaft. GS. Bd. 95. 1927. S. 81 ff. / Das Strafverfahren.
GS. Bd. 96. 1928. S. 397 ff. / Ordentliche Tötung der Deutschen
Strafrechtlichen Gesellschaft. GS. Bd. 97. 1928. S. 1 ff. / Die
Staatsverbrechen in der Reichstagsvorlage. GS. Bd. 98. 1929. S. 1
ff. / Ordentliche Tötung der Deutschen Strafrechtlichen Gesell-

schaft vom 20. und 21. Mai 1929. GS. Bd. 98. 1929. S. 278 ff.

ホーレンマン博士著に Der amtserichterliche Strafbehf. GS.
Bd. 98. 1929. S. 330 ff. u. Bd. 99. 1930. S. 36 ff. / Die kom-
struktive Grundlagen des Wiedernahmeverfahrens und seine
Reform. GS. Bd. 99. 1930. S. 299 ff. / Die Strafrechtstheorie
bei Luther und Melancthon. F. t. Binder. 1930. S. 229 ff. /
Jahresversammlung der Deutschen Strafrechtlichen Gesellschaft in
Bamberg am 16. und 17. Oktober 1931. GS. Bd. 102. 1931. S. 101
ff. / Eigentum an Geld und strafrechtliche Konsequenzen. GS.
Bd. 104. 1934. S. 100 ff. / Zum Aufbau des Strafprozesses. GS.
Bd. 104. 1934. S. 302 ff. / Der Verbrechensbegriff. Ein Forsch-
ungsbericht. DS. Bd. 5. 1938. S. 73 ff. / Friedrich Oetker zum
Gedächtnis. GS. Bd. 110. 1938. S. 177 ff. / Kriminalpolitik als
Geisteswissenschaft. ZStw. Bd. 57. 1938. S. 1 ff. / Die folgen-
schwere Unmässigkeit (§ 330 a. StGB). ZStw. Bd. 59. 1940. S.
283 ff.

キーニ博士著に „Das Analogieverbot“ im gegenwärtigen deu-
tschen Strafrecht. StZ. 1947. S. 12 ff. / Zur Abgrenzung des
Versuchs von der Vorbereitungsbehandlung. StZ. 1949. S. 172 ff. /
Die bindende Kraft des Urteils nach deutschem Recht. Zent. Bl.
t. Brit. Zone. 1949. Nr. 3. S. 60 ff. / Der strafrechtliche Schutz
des Staates. StZ. 1950. S. 247 ff. / Völkerrecht und internationales
Strafrecht. JZ. 1952. S. 609 ff. / Die gesetzliche Bestimmtheit

der Tatbestände. JZ. 1953. S. 105 ff. / Die gesetzliche Bestimmung der Tatbestände. Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 259 ff. (紹介・中義書「ドイツにおける刑法の五冊」二〇九頁以下) / Die Untreue. Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 333 ff. (紹介・中義書「ドイツにおける刑法の五冊」二二九頁以下) / Der Sachverständige im Strafprozess. F. t. Meeger. 1954. S. 455 ff. / Klageerziehungsverfahren und Opportunitätsprinzip. JZ. 1955. S. 601 ff. / Das Problem des angehenden dolus generalis. JZ. 1956. S. 109 ff. / Teilnahme und Gefangenenerweiterung. JZ. 1956. S. 434 ff. / Täterschaft. Teilnahme, Urheberschaft. R. t. Ritter. 1957. S. 243 ff. / Zum Beweiswert des persönlichen Eindrucks. DRiZ. 1958. S. 140 ff. / Endet mit der Eheschließung auch das Angehörigenverhältnis im Sinne des § 52 StGB? JZ. 1959. S. 119 ff. / Hilfsweise eingelegte Prozessurteile? F. t. E. Schmidt. 1961. S. 634 ff. / Zum Begriff der Wegnahme. JZ. 1962. S. 617 ff. / Typologie der Gewohnheitsverbrecher oder Reaktivisten. K. Biol. G. 1962. S. 135 ff. / Vorbemerkungen zur Lehre vom Handlungsbegriff. F. t. v. Weber. 1963. S. 137 ff.

メルゲン (Armand Mergen)

一九一九年一月二九日、ルクセンブルクのヘッフィンゲンに生れた。フランク大学とインスブルック大学で法律学と医学を学び、一九四一年から四三年まで、リットラー教授の助手を務めた。学位

論文は *Kriminalität der Geisteskranken*, 1942. である。一九四四年にゲシエタポに捕えられて監禁されたという経歴を持つ。一九四七年以来、ルクセンブルク市で弁護士を開業しているが、一九四八年からマインツ大学の員外教授として活躍している。又、一九四九年ルクセンブルクの社会防衛研究所長に就任した。

刑事学の分野で数多くの著書、編書が多いのに、講座を持つていないことを不満としてか、一九六四年に「ドイツ刑事学の現状を痛烈に批判した小冊子を公刊した。これが不評であるところにもつて、一九六四年に絵入りの性の百科事典を出版して、はげしい批判を受けた。日本の一部では、彼が刑事学協会々長という肩書きをもち、二〇冊近い著書を編集しているのだから、かなり過大に評価しているわけであるが、ドイツ国内では殆んど評価されていなく、殊に、執筆者の同意なしにその名前を近刊予告の中に出すといふことなど、いふまでもなく、酷評はよくない。」

著書 (譯書)

La Narco-Analyse et son emploi en instruction criminelle. 1949. / Die Thirder Karker. 1949. / La societe des associations. 1950. / Methodik kriminalbiologischer Untersuchungen. 1953. / Das kriminologische Gutachten. 1959. / Die Wissenschaft vom Verbrechen. 1961. / Kriminologie heute. 1961. / Dokumentation über die Todesstrafe. 1963. / Die tatsächliche Situation der Kriminologie in Deutschland (Ein Bericht). 1964. (改題・吉村精夫「犯罪学雑誌」三〇巻四号一五五頁以下) / Kriminologie morgen. 1964.

/ Sexualforschung, Stichwort und Bild, I. u. II. (o. J. 1963/64?)

論文

Die Narkeanalyse und ihre Anwendung im Strafrecht. Grenz. d. Med. 1949. S. 254 ff. / L'homme anti social. Rev. int. déf. soc. 1949. p. 27 ff. / Selbstmord infolge konventioneller Vorurteile. ZSchr. f. Sexualforsch. 1950. S. 224 ff. / L'exécution. Rapport général du IIème Congrès International de Défense Sociale. 1951. Rev. int. déf. soc. 1951. p. 163 ff. / Les méthodes d'examen dans le système de défense sociale. Rev. int. déf. soc. 1953. p. 57 ff. / Zum Begriff der verminderten Zurechnungsfähigkeit im Sinne des § 51. Abs 2 StGB. GA. 1959. S. 193 ff. / Die Wertephäre im dogmatischen Strafrecht und in der naturwissenschaftlichen Kriminologie. Int. Kriminalpol. Rev. Nr. 102. 1956. S. 274 ff. / Die soziale Zweckmäßigkeit in der modernen Kriminalpolitik. F. f. Rittler. 1957. S. 21 ff. / Zwang und Freiheit in der Resozialisierung. RdJ. 1959. S. 294 ff. / Photographische und kinematographische Methoden in der Kriminologie. 2. Int. Kong. f. Med. Photog. u. Kinemat. 1962. S. 271 ff. / Die Prostitution. in: Sexualität und Verbrechen. 1963. S. 161 ff.

ナウケ (Wolfgang Naucke)

一九三三年六月八日、ザクセン州のカールスフェルトに生れた。キール、ローザンヌ、グラスゴウの諸大学に一九五二年から五七年

まで学び、キール大学のハイヤー教授のもとで一九五九年に学位を取得した。論文は *Kant und die psychologische Zwangskasorie Fuertachs*. 1962. の後、第二次国家試験を通過し、ハイヤー教授のふたひほだを蒙り、一九六四年一月に教授資格を得た。請求論文は *Zur Lehre vom strafbaren Betrug, ein Beitrag zum Verhältnis von Strafrechtsdogmatik und Kriminologie*. 1964. p. 48 ff. キール直ぐの德國ハイヤー教授のふたひほだを蒙り、一九六四年一月一日附でキール大学正教授となり、刑法、刑事訴訟法、刑事学、法哲学の講義を担当している。本年とついで三十二年とついで西独刑法学者の中で最年少の教授である。

論文

Methodenfragen zum „Typ“ des Gewohnheitsverbrechens. MKri. 1962. S. 84 ff. / „Reform des Strafrechts“. (Tagungsbericht). MKri. 1963. S. 180 ff. / Festnahmeamt aus § 81 a StPO? Schl. Holst. Anz. 1963. S. 183 ff. / Die Reichweite des Vergeltungsstrafrechts bei Kant. Schl. Holst. Anz. 1964. S. 203 ff. / Über das Regressverbot im Strafrecht. ZStw. Bd. 76. 1964. S. 409 ff.

ノル (Peter Noll)

一九二六年五月一八日、スイスのバーゼルに生れた。その地の大学で長く教授生活を送ったゲルマン教授の愛弟子である。一九五五年、私講師となつたが、請求論文 *Übergesetzliche Rechtsfertigungsgründe, im besonderen, die Einwilligung des Verletzten*. 1965.

は立派な仕事である。

一九六二年、マインツ大学に招聘され、正教授の地位に居る。四〇才に満たない若い学者であるが、スイス人の実的なセンスに加え、しつかりとした理論家としての筋も凝りて居る。法哲学、神学と於ける業績も著し。

脚註

Die ethische Begründung der Strafe. 1962. (フーヘンハッホ著、藤田加藤したの訳)

参考文献

Der subjektive Tatbestand der Gefährdung des Lebens nach Art. 129. des Strafgesetzbuches. Schw.ZStr. Bd. 69, 1954. S. 19 ff. / Der Einfluss von Kompensation und Rentention bei den Delikten gegen Eigentum. Schw.ZStr. Bd. 69, 1954. S. 148 ff. / Das Unrechtsbewusstsein im schweizerischen Strafrecht. Schw. Beitr. z. 4. Int. Kong. RVgl. 1954. / Übergesetzliche Milderungsgründe aus vermindertem Unrecht. ZStrw. Bd. 68, 1956. S. 181 ff. / Die aus veren eidgenössischen Nebenstrafgesetze unter rechtsstaatliche Gesichtspunkten. Schw.ZStr. Bd. 72, 1957. S. 361 ff. / Das ärztliche Berufsgeheimnis. Schw. Beitr. z. 5. Int. Kong. RVgl. 1958. / Nebenstrafrecht und Rechtsgleichheit. Schw. ZStr. Bd. 74, 1959. S. 29 ff. / Gewaltenteilung und Abhängigkeit des Richters im Strafrecht. F. 1. Ger mann (Schw.ZStr. Bd. 75) 1959. S. 294 ff. / Geheimnisschutz und Zeugnispflicht. F. 1. Gerwig. 1960. S. 135 ff.

フーヘンハッホ Zum gegenwärtigen Stand der deutschen Strafrechtswissenschaft. Schw.ZStr. Bd. 78, 1962. S. 377 ff. (譯介・宮沢浩一、本誌三八卷三十一—三十二頁以下) / Zur Gesetztechnik des Entwurfs eines Strafgesetzbuchs. JZ. 1963. S. 297 ff. / Die Rechtfertigungsgründe im Gesetz und in der Rechtsprechung. Schw.ZStr. Bd. 80, 1964. S. 160 ff. / Diskussionsvotum an der Strafrechtslehrtagung vom 21. bis 23. Mai 1964 in Hamburg. ZStrw. Bd. 76, 1964. S. 707 ff. / Vorschläge für eine realisierbare Reform des juristischen Studiums an der Universität Mainz. JZ. 1965. S. 17 ff. / Tatbestand und Rechtswichtigkeit: Die Wertabwägung als Prinzip der Rechtfertigung. ZStrw. Bd. 77, 1965. S. 1 ff.

フーヘン (Dietrich Oehler)

一九一五年一〇月四日、ホーランプトの國境の町ゲルリッツに生れた。ニーテホと血縁関係がある。即ち、フーラーの祖父の甥がニーテホなのである。一九五四年頃、精神異常となり、共產主義とカンリック教とプロメアの王制の三位一体説をひいて、東洋と中華のその後行方不明のおおどろいびいなるマホーグナーの弟子とせり。学位論文は Die Grundlage des Vertrages im deutschen und schweizerischen Recht in rechtsvergleichender Darstellung. 1939. 248頁。一九四九年にフランクフルター大学私法博士となった。論文博士は Wurzel, Wandel und Wert der strafrechtlichen Legitimation. 1950. (譯介・吉川雅夫、刑法雑誌三三卷三十一—三六頁) 248頁。一九五

一年ハソリン自由大学より招聘を受け員外教授となり、一九五四年に正教授となった。一九五八年に來日した。一九六一年にケルン大学教授を兼ね、今日に至つてゐる。一九六〇年頃までは非常勤が多く、作時を兼つて居る。

著書

Das objektive Zweckmoment in der rechtswidrigen Handlung. 1959.

論文

「ソノモンキ一六書並七 Die Identität der Handlung. F. f. Rosenfeld. 1949. S. 139 ff. / Der materielle Gehalt der strafrechtlichen Rechts- und Pflichtenormen. F. f. Sauer. 1949. S. 262 ff. / Gedanken zum Staatschutz de lege ferenda. JR. 1950. S. 513 ff. / Der rechtswidrige Vorsatz. JR. 1951. S. 65 ff. / Die Acht vor dem Leben und der Notstandshandlung. JR. 1951. S. 489 ff. / Der gesetzliche Richter und die Zuständigkeit in Strafsachen. ZStw Bd. 64. 1952. S. 292 ff. / Evangelisches Kirchenrecht als beken- nende Ordnung. F. f. Gliese. 1953.

「ソノモンキ四六書並七 Bericht über den 6. Internationalen Strafrechtkongress vom 27. 9.-3. 10. 1953 in Rom. JR. 1954. S. 20 ff. / Das erfolgsqualifizierte Delikt und die Teilnahme an ihm GA. 1954. S. 33 ff. / Die Grenzen des aktiven Personalitätsprinzips im internationalen Strafrecht. F. f. Mezger. 1954. S. 83 ff. / Postgeheimnis. In: Neumann-Nipperdey-Scheuner: Die

「ソノモンキ」第六卷第六号

Grundrechte. II. 1954. S. 605 ff. / Die mit Strafe bedrohte tatvorsätzliche Handlung im Rahmen der Teilnahme. Festschr. d. Frei. Univ. 1955. S. 255 ff. / Zum Eintritt eines hochgradigen Affekts während der Ausführungshandlung. GA. 1956. S. 1 ff. / Liegt beim gutgläubigen Erwerb vom Nichtberechtigten ein Vermögensschaden im Rahmen des Betruges vor? GA. 1956. S. 161 ff. / Die amtliche Verfolgung der leichten vorsätzlichen und fahrlässigen Körperverletzung. JZ. 1956. S. 630 ff. / Das erfolgsqualifizierte Delikt als Gefährdungsdelikt. ZStw. Bd. 69. 1957. S. 503 ff. / Moderne Probleme in der deutschen Schuldflehre. 民法雑誌第廿九卷一・三・四号並七「民法上の責任」(解説・加藤一郎) 同卷一「民法上の責任」(解説・平島龍一) 民法雑誌第卅卷一〇号) / 各国國籍法並七民法上の責任と國籍主義(解説・加藤一郎) 比較法研究一五号一頁以下) / 現代ソニストの責任と民法上の責任の兼存(解説・平島龍一) 民法雑誌第卅四卷四号四〇五頁以下) / Umgrenzung der gesetzlichen Unterhaltspflicht in § 170 b. StGB. ZF. 1959. S. 489 ff.

「ソノモンキ六書並七 Konkurrenz von unechtem und echtem Unterlassungsdelikt—BGH. 14. 282. Jus. 1961. S. 154 ff. / Die erlaubte Gefährdung und die Fahrlässigkeit. F. f. E. Schmidt. 1961. S. 232 ff. (解説・森井龍一) 民法雑誌一〇九頁以下) / Handeln auf Befehl. Jus. 1963. S. 301 ff.

ペーターズ (Karl Peters)

一九〇四年一月二三日、ユブロンツに生れた。ケルン大学のホーネ教授の残したすぐれた弟子の一人であつて、刑法理論学、刑事学、少年法そして刑事訴訟法に卓越した数多くの業績を残し、現在熱心に活躍をして居る。この人の作品群に対する日本刑法学の消化は意外な程なされていない。もつと注目されてよい人であると思ふ。

一九三一年、ケルン大学の私講師となつたが、このときの請求論文は『Die kriminalpolitische Stellung des Strafrichters bei der Bestimmung der Strafrechtspflege, 1932.』である。その後、長期間検察官として実務の経験をいんだ。一九四二年にツラインスワルト大学教授に迎へられ、終戦後は一九四六年からミンネンスター大学教授として長くその職にあつたが、一九六三年にチャールビンゲン大学で退いた。

著書

Zeugenflüge und Prozessausgabe, 1939. / Reichsjugendgerichtsgesetz, 1. Aufl. 1942, 2. Aufl. 1944.

『ミンネンスター大学時代の Verändertes Jugendstrafrecht, Gedanken, Entwurf und Begründung zur Neugestaltung des Jugendgerichts-gesetzes, 1947. / Erscheinungen und Ursachen der Jugendver-wahrlosung und Jugendkriminalität, 1947. / Jugendstrafrecht, 1948. / Strafprozess, 1952. / In welcher Weise empfiehlt es sich, die Grenzen des st. oherlichen Ermessens im künftigen

Strafgesetzbuch zu regeln. (Ermessensfreiheit oder gesetzliche Bindung des Richters bei der Verhängung der Strafe und sonstigen Unrechtsfolgen.) ↑ 1955. / Rehabilitierung Straffälliger. Ref. z. 42. Deut. Jur. Tag. 1957. / Grundfragen der Strafrechtsreform. Peters—Lang-Hinrichsen; Grundfragen der Strafrechtsreform, 1959. S. 13 ff. / Grundprobleme der Kriminalpädagogik, 1960.

チャールビンゲン大学時代の Die strafrechtsgestaltende Kraft des Strafprozesses, 1963. (チャールビンゲン大学教授就任講演である)

論文

Aufgaben der Rechtsanwendung im Strafrecht, DR. 3, Jg. 1933. S. 178 ff. / Die falsche Aussage und ihre Bekämpfung, DS, Bd. 2, 1935, S. 145 ff. / Verwarnung mit Strafvorbehalt, DS, Bd. 2, 1935, S. 310 ff. / Zur Neuordnung des Strafverfahrens. Eine kritische Stellungnahme zu den Vorschlägen der Abhandlungen über das kommende Strafverfahren im „Deutschen Strafrecht“ 1935 Heft 8-11. ZStrw. Bd. 56, 1937, S. 34 ff. / Die Behandlung der Heranwachsenden im kommenden Strafrecht. Ein Beitrag zur Strafrechtsreform. ZStrw. Bd. 56, 1937, S. 495 ff. / Das gesunde Volksempfinden. (Ein Beitrag zur Rechtsquellenlehre des 19. und 20. Jahrhunderts.) DS, Bd. 5, 1938, S. 337 ff. / Tat-, Rechts- und Ermessensfragen in der Revisionsinstanz. ZStrw. Bd. 57, 1938, S. 459 ff. / Die unbestimmte Verurteilung im Jugendstrafrecht. ZStrw. Bd. 58, 1939, S. 567 ff. / Die Jugendarrestverordnung.

ZStrw. Bd. 60. 1941. S. 551 ff. / Erfahrung mit dem Jugend-
arrest. MKri. 1942, S. 173 ff. / Das neue Jugendgerichtsgesetz.
ZAL. 1944. S. 35 ff. / Einheitsstrafe bei Verbrechenmehrheit.
F. f. Kohlrusch. 1944. S. 199 ff.

「少年院」の「更生」の「問題」 / Die Kirche in der Welt
Jg. 1948. Lfg. I. S. 71 ff. / Christentum und Strafrecht. ebenda.
S. 215 ff. / Gerechtigkeit und Rechtssicherheit. ebenda. Lfg. 3.
S. 379 ff. / Liebe und Gerechtigkeit, in: Anruf und Zeugnis der
Liebe. 1948. / Zur Lehre von den persönlichen Strafausschlie-
sungsgründen. JR. 1949. S. 496 ff. / Der Jugendstaatsanwalt.
UJ. 1949. H. 5. S. 7 ff. / Das Begreifen des Eigentumsordnung
als kriminalpolitisches Problem. F. f. Sauer. 1949. S. 9 ff. / Der
Jugendliche und die Autorität des Gesetzes. F. f. Rosenfeld. 1949.
S. 215 ff. / Bewährungsfrist vor dem Urteil. UJ. 1950. S. 89 ff.
/ Marktanalyse? JR. 1950. S. 47 ff. / Der Begriff der Unzucht
in § 184 Abs. 2. StGB. JR. 1950. S. 97 ff. / Die Tötung des
Menschen in Notsituation. JR. 1950. S. 742 ff. / Das Gewissen
des Richters und das Gesetz, in: Konrad und Kipp; Gegenwarts-
problem des Rechts. 1950. / Die soziale Reifung des Jugendlichen
JWL. 1951. S. 66 ff. / Bewährungshilfe bei Halberwachsenen und
Erwachsenen. UJ. 1951. S. 99 ff. / Die Krisis des Strafrechts.
Caritas. Bd. 151. 1951. S. 212 ff. / Zur Erneuerung des Straf-
vollzugs. JR. 1951. S. 752 ff. / Die religiöse Kritik in der

Jugendfürsorge. Schmauck: In memoriam Ernst Lohmeyer. 1951.
/ Die tragende Gedanken des Jugendstrafrechts, in: F. Schneider;
Jugendkriminalität. 1952. S. 77 ff. / Gedanken zur Kriminal-
strafe. St. d. Zt. 1953. S. 12 ff. / Ein hartes Gesetz? Die Frage
nach der Erlaubtheit der Schwangerschaftsunterbrechung. JWL.
1953. S. 218 ff. / Aktaufnahmen von Kindern und Jugendlichen.
Insbesondere ein Beitrag zu dem Begriff des Unzüchtigen bei den
Sittlichkeitsdelikten. JZ. 1953. S. 207 ff. / Jugend und Recht.
Praxis der Kinderpsychologie. 1953. S. 81 ff. / Kuppelrei bei Ver-
loren. Entf. 1954. S. 96 ff. / Ein Beitrag zum Fehlurteil—Erfah-
rungen aus einem Lehrprozess. F. f. Mezger. 1954. S. 477 ff. /
Einige Bemerkungen zum Beistand des Jugendgerichtsgesetzes
JWL. 1956. S. 401 ff. / Zuständigkeitsabgrenzung der Jugend- und
Erwachsenengerichte. NJW. 1956. S. 492 ff. / Die Parallelität
von Prozess- und Sachentscheidung. ZStrw. Bd. 68. 1956. S. 374 ff.
/ Il rispetto della persona umana nella procedura penale. Giust.
Pen. 1956. III. / Mehrere Schlüsse bei einer Tötung. GA.
1958. S. 97 ff. / Wilhelm Sauer als Kriminalist. MKri. 1959. S.
65 ff. / Probleme der deutschen Strafrechtsreform. Schw. ZStr.
Bd. 77. 1961. S. 162 ff. (更生-制度の「問題」の「研究」) /
Grundsatzliches über Erziehung und Strafe. Krim. v. Vollz. d.
Freih. Str. 1961. S. 62 ff. / Die Begrenzung des Strafrechts bei
zivilrechtlichen Verhältnissen als materielle rechtliches und prozessua-

les Problem. F. t. E. Schmidt. 1961. S. 488 ff. / Gedanken eines Juristen zum Eichmann-Prozess. Eckart-Jh. 1962. S. 229 ff. / Wilhelm Sauer † JR. 1962. S. 213 ff. / Schuld und Sühne. Ein Beitrag zur Strafrechtsreform. MSchr. Hochland. 1962. S. 193 ff. / Die kriminologische Ausbildung der Strafrjuristen. Neue Polizei. 1962. S. 10 ff.

ホーユンケン大教授 Le ministère public. Rev. int. dr. pén. 1963. Nr. 3/4. p. 3 ff. / Individualgerechtigkeit und Allgemeininteressen im Strafprozess. in: Sum. iur. usw. 1963. S. 191 ff. / Die verspätete Absetzung des Strafurteils im Strafverfahren. F. f. v. Weber. 1963. S. 374 ff. / Strafvollzug als Resozialisierung. Univ. Tag. 1964. S. 131 ff

フラインジャー (Wolfgang Preisler)

一九〇三年二月二〇日、フランクフルトに生れた。フランクフルト大学でクラン教授の指導を受け、一九四六年に私講師となった。諸家論文は *Herkunft und Grundlagen der strafrechtlichen Irrenlehre des Reichsgerichts*. 1646. 256p. 一九四九年に同大学員外教授、一九五四年正教授となつて今日に至つてゐる。法史学、国際法にも論文を書いているが、同大学の哲学学部(文学部)で美術史の講義をあげてゐるといふ。

論文

La philosophie de la Stoa et sa signification pour le droit inter-

national moderne. 10. Cong. Phil. Amsterdam 1948. / Die philosophie der Stoa in ihrer Bedeutung für das moderne Völkerrecht. ARSP. 1950. S. 364 ff. / Das Machtwort-Bild der Gegenwart. 1952. / Das Recht zu strafen. F. t. Mezger. 1954. S. 71 ff. / Das Verbrechen als Erscheinung des sozialen Lebens. Hessische Hochschulwoch. f. Staatsw. Fortbild. in Bad Salzschlirf. 1955. / Die Epochen der antiken Völkerrechtsgeschichte. JZ. 1956. S. 737 ff. / Das Strafrecht in der freien Gesellschaft. Hessische Hochschulw. f. Staatsw. Fortbild. in Bad Wildungen. 1956. / Grundsätzliche Fragen zu einer Reform des Strafrechts. ebenda. 1959. S. 180 ff. / Die rechtlichen Voraussetzungen für bedingte vorzeitliche und fahrlässige Schuld. Deut. Zt. f. d. Gericht. Med. 1959/60. / Über die Ursprünge des modernen Völkerrechts. F. f. Schätzel. 1960. S. 373 ff. / Vergeltung und Sühne im altisraelitischen Strafrecht. F. f. E. Schmidt. 1961. S. 7 ff. (紹介、真鍮正一、法學叢書40〇卷III号111頁以下) / Völkerrechtsgeschichte. I. Altertum, Mittelalter. Neuzeit bis zum Westfälischen Frieden. 1962. / Die Geschichte der Todesstrafe bis zum Beginn der Aufklärung. Frag. d. Todesstr. 1962. S. 35 ff.

ロクシン (Glaus Roxin)

ドイツの刑法学者の中で最年少グループの一人で、しかも最も注目される人である。ハンブルク大学のヘンケル教授が百年に一人

の秀才といつたとか。とにかく、あと一〇年もすれば刑法学会のスター的存在になるであろうと期待されている。若さがあふれ、ものおじしない堂々たる議論、そして意蘊ではあるが、きりつとしまつた容姿は魅力的である。

一九三一年五月一日にハンブルクに生れた。一九五〇年から五年まで、故郷ハンブルク大学で法律学を学び、ことにハンケル教授の指導を受け、卒業後、まず研究補助員、次いで法哲学研究所(所長ハンケル教授)の助手として一九六二年まで勤務した。その間一九五七年に学位論文 *Offens Tatbestände und Rechtspflichtmerkmal*, 1959. で学位を取得した。この論文の中にすでにその並々ならぬ力量、分析力と綜合力の調和が見られた。一九六二年七月一七日に私講師となつた。請求論文は浩翰なモノグラフ *Täterhaftigkeit und Täterrecht*, 1963. である。私講師になつてわずか二月してグッテンゲン大学から刑法、刑事訴訟法、一般法理論の講座の「正教授」に招聘された。V・ビッセル、ホーニッヒ、ジーゲルト、ウエルツェル、E・シュミット、ボツケルマン、シャフスタイン、シュミットホイザー等、二〇世紀になつてこれだけ有名な、そして有力な刑法学者によつて受け継がれてきた、伝統あるグッテンゲン大学刑法講座の正教授の地位に就いたのが一九六三年四月一日、ロクシンが三二才のときである。

勿論、ロクシンの著作には、若さに基づく過誤もないわけではないが、間違いをおそれて凡百の當りずからわらすの仕事をするよりも、どれ程大きく学界に裨益するか、測り知れない。

論文

ハンブルク大学時代

Die Irrtumsregelung des Entwurfs 1960 und die strenge Schuldtheorie. MKRi. 1961. S. 211 ff. / Pflichtwidrigkeit und Erfolg bei fahrlässigen Delikten. ZStw. Bd. 74. 1962. S. 411 ff.

マッテンガン大学時代

Zur Kritik der Annalen Handlungstheorie. ZStw. Bd. 74. 1962. S. 515 ff. / Straftaten im Rahmen organisatorischer Machtkapareate. GA. 1963. S. 193 ff. / Die provozierte Notwehrlage. ZStw. Bd. 75. 1963. S. 541 ff. / Zur Abgrenzung von bedingtem Vorsetz und bewusster Fahrlässigkeit. Jus. 1964. S. 53 ff. / Verwerfbarkeit und Sittenwidrigkeit als unrechtsbegründende Merkmale im Strafrecht. Jus. 1964. S. 373 ff. / Die Behandlung des Irrtums im Entwurf 1962. ZStw. Bd. 76. 1964. S. 582 ff.

ザルシムレニツト (Werner Sarstedt)

一九六三年よりスルリン自由大学の各差教授で、聯邦裁判所の部長判事がその本務である。主として刑事訴訟法についての著書論文がある。

著書 (共著)

In welcher Weise empfiehlt es sich, die Grenzen des straffrechtlichen Ermessens im künftigen Strafgesetzbuch zu regeln (Ermessenfreiheit oder gesetzliche Bindung des Richters bei der Verhängung der Strafe und sonstiger Unrechtsfolgen)? Verh. des 41.

Deut. Jur. Tag. 1956. / Die Revision in Strafsachen. 4. Aufl. 1962. / Löwe=Rosenberg: Die Strafprozessordnung und das Gerichtsverfassungsgesetz mit Nebengesetzen. 21. Aufl. 1962 ff.

論文

Bezug durch Amtserheilehung. JR. 1952. S. 308 ff. / Nochmals: Bindung des Vorderrichters (§ 358. Abs. 1. StPO) trotz Verletzung der Vorlagepflicht (§ 121 Abs. 2 GVG) durch das Revisionsgericht. NJW. 1955. S. 1629 ff. / Rundfunkaufnahme im Gerichtsamt. JR. 1956. S. 121 ff. / Die Kontrolle der Ermessensfreiheit des Richters bei der Festsetzung von Strafen und dabei zu beachtenden Maaßregeln. ZStw. 1957. (Deutsche Beiträge) S. 133 ff. (原不・榎本邦雄) 刑事裁判の自由と法の支配 / Revisionsstatistik und Richterbeurteilung. DRiZ. 1959. S. 138 ff. / Über offensichtlich unbegründete Revisionen. JR. 1960. S. 1 ff. / Strafverfahren. DRiZ. 1960. S. 349 ff. / Methode und Technik höchster richterlicher Rechtsfindung. DRiZ. 1962. S. 164 ff. / Reform der Untersuchungshaft. De Justiz. 1963. S. 184 ff. / Der Überwachungsbericht zur Revision in Strafsachen. R. Pfl. Bl. 1963. S. 81 ff. / Der Richter und die Presse. DRiZ. 1964. S. 43 ff. / Gebundene Staatsanwaltschaft. NJW. 1964. S. 1752 ff. / Verspätete Absetzung von Strafurteilen. JZ. 1965. S. 238 ff.

著者名 (Walter Sax)

一九二二年四月一日、ソリンゲンに生れた。ケルン大学のボーネ教授のところに教授資格を取得したが、学位は民法関係の論文をフンニマン (Planitz) ノーマン (Lehmann) に取附した。Die verträgliche Wettbewerbsbeschränkungen im Rechts Englands und der Vereinigten Staaten von Amerika, 1936. 法学博士論文。従軍中たり、ボーネのところに助手を要するに動いたたが、その間に「私権の保護」となつたのは一九五二年のコンドール。論文題文は Das strafrechtliche, Analogieverbot. Eine methodologische Untersuchung über die Grenze der Auslegung im geltenden deutschen Strafrecht. 1953. 法学博士論文。ケルン大学に法学博士の正教授として、

著者 (邦訳)

Altavilla, übers. v. Bohne—Sax: Forensische Psychologie. I. 1955, II. 1958. (原不・榎本邦雄) 刑事裁判の自由と法の支配。法学博士論文。ケルン大学に法学博士の正教授として、

論文

ケルン大学に在りて Der strafrechtliche Schutz der Berufsgeheimnisse. Beitr. z. öff. Recht. 1950. S. 159 ff. / Das rechtliche Verhältnis von fälschlicher Herstellung (Verfälschung) und Gebrauch einer Urkunden in § 267 StGB. MDR. 1951. S. 587 ff. / Der Grundtatbestand bei den Tötungsdelikten und beim Delikt der Abtreibung. ZStw. Bd. 64. 1952. S. 393 ff. / Parlamentarismus durch Streik? NJW. 1953. S. 368 ff. / Das unrichtige Sachurteil als Zentralproblem der allgemeinen Prozessrechtlehre.

ZfP. 1954. S. 21 ff. / Der Begriff der „strafbaren Handlung“ im Helmenstatbestand (§ 259 StGB). MDR. 1954. S. 65 ff. / Zur Frage der Kuppelrei bei Geschlechtsverkehr unter Verlobten. JZ. 1954. S. 474 ff. / Verbotstrittum als strafrechtsdogmatisches Grenzproblem. Ann. Univ. Sar. Bd. 4. 1955. S. 415 ff.

ハインリッヒ・クニナルポリティク und Strafrechtsreform. JZ. 1957. S. 1 ff. / Dogmatische Streifzüge durch den Entwurf des Allgemeinen Teils eines Strafgesetzbuches nach den Beschlüssen der Grossen Strafrechtskommission. ZStw. Bd. 69. 1957. S. 414 ff. / Grundsätze der Strafrechtspflege. in: Neumann-Nipperdey, Grundrechte. IV. 1959. S. 909 ff. / Zur Frage der Notwehr bei Widerstandsleistung gegen Akte sowjetzonaler Strafjustiz. JZ. 1959. S. 385 ff. / Über Rechtsbegriffe. Gedanken zur Grenze rechtlicher Begriffsbildung. F. f. Notarp. 1961. S. 133 ff. / Der Bundesgerichtshof und die Täterehe. JZ. 1963. S. 329 ff. / Zum Verfahren in Staatsschutzsachen im Ausland. JZ. 1964. S. 41 ff. / Zum logischen und rechtlichen Gehalt des sogenannten „Umkrechlus aus § 59 StGB“. JZ. 1964. S. 241 ff. / Über die Zulässigkeit der prozessualen Verwertung privater Tagebuchaufzeichnungen als Beweismittel. JZ. 1965. S. 1 ff.

シヤンスタイン (Friedrich Schaffstein)

一九〇五年七月二十八日、マッテンゲンに生れた。ロバーター・フォ

西マントン刑法学の源流

ン・ロツベルの弟子である。ヒッセルはハルレ大学でマ・リストの助手を勤め、その指導にあつたから、シヤンスタインはマ・リストの孫弟子といふことになる。学位論文は *Die Behandlung der Schulderten im ausländischen Strafrecht seit 1908. Strafrechtl. Abh. Nr. 232. 1928* である。一九三〇年にマッテンゲン大学秘書師となつた。請求論文は *Die Entwicklung der allgemeinen Lehren vom Verbrechen in der deutschen Wissenschaft des gemeinen Strafrechts. 1930.* である。

一九三三年、ナチスの政權獲得の頃、ダムムとともに「自由刑法か権威刑法か」という小冊子を公刊し、フランクフルトでの刑法学会でラートブルフ、ロ・シエミット等から徹底的な批判を受けた。もう一つ、これによつてラートブルフは教職を追われてしまつた。

一九三三年にライプツヒヒ大学教授、一九三五年にキール大学に転じた。ここで、ダムムとともに、いわゆるキール学派とよばれるナチス刑法学、権威刑法を主唱した。一九四一年にシエトラスブルク大学に転じたが、終戦を迎え、暫く政治的に追放されていた。一九五四年に、故郷のゲッテンゲン大学教授にかえりやうした。

刑法学会の中では、その才能は認められてはいるが、ナチス時代の発言がたつて、何となく小さくなつてゐる。ガラスとかワエルのツェル等かつて同じような発言をした人達とは口もきいてゐるが、若い世代は何となく割り切れないものを感じてゐるようである。

殊に、ロ・シエミット教授は絶対に許さず、この両者はどちらかが欠席したときでないといふと出席しないといふことである。

私はシャフスタインに会うまで、何となく黒幕的な、切れ味のあるような、官僚的な感じの人を想像していた。ところが、学会の席で漁夫が農夫のような、全くばつとしない、およそ都会的ということとは違わない赤ら顔の野人の風貌をした風采のあがらない男がシャフスタインであると紹介されて面喰つたことを思い出す。戦後の内心の苦悩と反省がこのような人柄に変えたのであろうか。だが、このような素朴な人間の心をつかんだものこそ野暮の骨頂な、赤練々た力を前面に押し出し、ドイツ民族の栄光を誇示したナチスの魅力であつたのかも知れない。

戦勝の発言の多くは、今なら使用に堪えるものは多くないが、戦後のものはかなりすべれている。彼が、趣味だけをいじりまわつた理論をもつたフィナリストであることは余り知られていない。少年法については実務家達から最も信頼されてくる学者の一人であるが、このため、もう少し顧慮をわけてほしい。

書誌

Beiträge zur Strafrechtswicklung von der Carolina bis Carzow. GS. Bd. 101. 1932. S. 14 ff. / Die Carolina in ihrer Bedeutung für die strafrechtliche Begriffswicklung. ZStrw. Bd. 52. 1932. S. 781 ff.

ライオンチャヒド大学時代

Der Begriff der Zueignung bei Diebstahl und Unterschlagung. GS. Bd. 103. 1933. S. 292 ff. / Ehrenstrafe und Freiheitsstrafe in ihrer Bedeutung für das neue Strafrecht. DS. Bd. 1. 1934. S. 273 ff. / Bemerkungen zur gesetzlichen Regelung der Strafbemessung im kommenden deutschen Strafrecht. DS. Bd. 1. 1934. S. 369 ff. / Politische Universalität und Neuordnung des juristischen Studiums. DJZ. 1934. S. 511 ff. / Der Begriff „Strafanspruch“ und sein rechtspolitischer Gehalt. DJZ. 1934. S. 1174 ff. / Nationalsozialistisches Strafrecht. Gedanken zur Denkschrift des preussischen Justizministers. ZStrw. Bd. 53. 1934. S. 603 ff.

Dahn-Scharfstein: Liberales oder autoritäres Strafrecht? 1933. /

Die Nichtzumnutbarkeit als allgemeiner übergesetzlicher Schuldausschlussungsgrund. 1933. / Politische Strafrechtswissenschaft.

1934. / Die Erneuerung des Jugendstrafrechts (1936?) / Wilhelm von Humboldt. 1952. / Die europäische Strafrechtswissenschaft im Zeitalter des Humanismus. 1954. / Jugendstrafrecht. 1959.

(宇川重光監・筑紫寛政策三十一号 昭和三十一年一月)

書文

DR. Jg. 5. 1935. S. 520 ff. / Die weltanschaulichen Grundlagen der deutschen Strafrechtswicklung seit der Carolina. ZAk. 1935. S. 106 ff. / Das subjektive Recht im Strafrecht. DRW.

キール大学時代 Das Verbrechen eine Rechtsgrundsatzverletzung?

DS. Bd. 2. 1935. S. 97 ff. / Revision und Beratung im künftigen Strafverfahren. DS. Bd. 2. 1935. S. 465 ff. / Die Bedeutung des Ehrenschutzes im nationalsozialistischen Strafrecht. DR. Jg. 5. 1935.

S. 269 ff. / Grundsätzliches zur Erneuerung des Strafverfahrens.

1936. S. 39 ff. / Strafe und Erziehung im künftigen Jugendstrafrecht. DR. Jg. 1936. S. 64 ff. / Die materielle Rechtswidrigkeit im kommenden Strafrecht. ZStw. Bd. 55. 1936. S. 13 ff. / Die Bedeutung des Erziehungsgedankens im neuen deutschen Strafvollzug. ZStw. Bd. 55. 1936. S. 276 ff. / Die unechten Unterlassungsdelikte im System des neuen Strafrecht. F. f. Gleichsch. 1936. S. 70 ff. / Zur Problematik des teleologischen Begriffsbildung im Strafrecht. F. f. R. Schmidt. 1936. S. 47 ff. / Zur Neugestaltung des Jugendstrafrechts. DS. Bd. 4. 1937. S. 73 ff. / Der Streit um das Rechtsgrütsverletzungsdogma. DS. Bd. 4. 1937. S. 335 ff. / Rechtswidrigkeit und Schuld im Aufbau des neuen Strafrechtssystems. ZStw. Bd. 57. 1938. S. 295 ff. / Tiberius Decianus und seine Bedeutung für die Entstehung des allgemeinen Teils im gemeinen deutschen Strafrecht. DRW. 1938. S. 121 ff. / Gemeinschaftsarbeit am neuen Strafrecht. ZAK. 1938. S. 806 ff. / Zur Abkehr der strafrechtlichen Tatbestandsauslegung von der zivilrechtlichen Begriffsbildung. DRW. 1939. S. 241 ff. / Methodenwandel, Analogieverbot und Rechtsgrütslehre in der neuen italienischen Strafrechtswissenschaft. ZStw. Bd. 59. 1940. S. 518 ff.

ナホトホクノメニテホクセシク Zur Lehre vom Tätertyp im Kriegsstrafrecht. DS. Bd. 9. 1942. S. 33 ff.

塚本尚也 Putative Rechtfertigungsgründe und Anale Handlungs-

lehre. MDR. 1951. S. 196 ff. / Der Irrtum bei der Wahrnehmung berechtigter Interesse. NJW. 1951. S. 691 ff. / Notwehr und Güterabwegungsprinzip. MDR. 1952. S. 132 ff. / Die neuen Voraussetzungen der Wahlfeststellung im Strafverfahren. NJW. 1952. S. 725 ff. / Zum rechtswissenschaftlichen Methodenstreit im 16. Jahrhundert. Die „Apologia pro iurisprudentiibus qui responsa suadunt“ des Tiberius Decianus. F. f. Niedermeyer. 1953. S. 195 ff.

ナホトホクノメニテホクセシク

Zur jugendstrafrechtlichen Behandlung der Heranwachsenden. NJW. 1955. S. 1577 ff. / Die Kriminalität der Jugendlichen, Heranwachsenden und Jungerwachsenen in Niedersachsen von 1948 bis 1955. MKri. 1956. S. 126. ff. / Soziale Adäquanz und Tatbestandslehre. ZStw. Bd. 72. 1960. S. 369 ff. / Tatbestandsirrtum und Verbotstrittum. Gött. F. f. OLG. Calle. 1961. S. 175 ff. / Die Behandlung der Heranwachsenden im künftigen Strafrecht. ZStw. Bd. 74. 1962. S. 1 ff. / Die vorbeugende Verwahrung nach dem StGB-Entwurf 1962. F. f. v. Weber 1963. S. 121 ff. / Zur Abgrenzung von Diebstahl und Gebrauchsaemassung. insbesondere beim Kraftfahrzeugdiebstahl. GA. 1964. S. 97 ff. / Die Jugendkriminalität in der industriellen Wohlfandgesellschaft. MKri 1965. S. 53 ff.

シュミットホイザー (Eberhard Schmidhäuser)

一九二〇年一月一〇日にシュトゥットガルトに生れた。父ヘルマンは行刑官であったが、その論文 *Zur Frage des Jugendarrestes*. MKrt. 1939. S. 258 ff. はハイムクロンの少年刑務所長時代の実務上の体験に基づいたすぐれた論稿である。

ヘルムルトは一九五五年にチュービンゲン大学私講師となつたが、その論文は *Gesinnungsmerkmale im Strafrecht*, 1957. であり、ガラス教授の指導で研究を重ねた所産である。一九五九年ゲッチンゲン大学員外教授に就任したが、一九六二年ハンブルク大学の招聘を受け、正教授となり今日に至つてゐる。刑法理論学にも、刑事訴訟法学にも数こそ少ないが立派な仕事を残している。文章も上手である。はじめはガラスの影響でフィナリストのような論文を書いてきたが、最近はもう少し実地的な思考を示す。

真面目な、種厚な人柄であるが、戦争によつて雙脚となつた苦しみが今日の彼をつくつたのであろう。

著書

Vom Wesen der Strafe. 1963.

論文

Wirksamkeit und Finalität als Unrechtsmerkmal im Strafrechtssystem. ZStw. B. 66. 1954. S. 27 ff. (紹介・井戸田寛) 立命館法學一三(一六六頁) / Fluchtverbot und Anzeigebot bei Verkehrsunfällen. JZ. 1955. S. 433 ff. / Zum Begriff der bewussten Fahrlässigkeit. GA. 1957. S. 305 ff. / Der Begriff des bedingten

Vorsizes in der neuesten Rechtsprechung des BGH und in § 16 Kommissionsentwurf StGB. Allgemeiner Teil 1958. GA. 1958 S. 161 ff. / Zeuge, Sachverständiger und Augenscheinhilfe. Ein Beispiel prozessrechtlicher Begriffsbildung. ZJP. 1959. S. 365 ff. / Objektive Strafbarkeitsbedingungen. ZStw. Bd. 71. 1959. S. 545 ff.

ハンテングン大学時代 Aussagepflicht und Aussagegedelit. Gött. F. 4. OLG. Celle. 1961. S. 207 ff. / Zur Frage nach dem Ziel des Strafprozesses. F. 4. E. Schmidt. 1961. S. 511 ff. (紹介・阪村幸男) 法学論叢七二巻一(一八頁以下)

シュミット (Eberhard Schmidt)

一八九一年三月一六日、ユーテルホルクに生れた。父は医者であつた。一九一四年から二〇年まづ、ヘルリン大学でマ・リストの助手を勤めていた。学位論文は *Die Kriminalpolitik Preussens unter Friedrich Wilhelm I. und Friedrich II.* 1914. である。一九二〇年、ヘルリン大学私講師となつた。請求論文は *Fiskalat und Strafprozess. Archivalische Studien zur Geschichte der Behördenorganisation und des Strafprozessrechts in Brandenburg-Preussen.* 1921. である。

一九二二年ブレスラウ大学教授、一九二六年キール大学教授と転じ、一九二九年にはハンブルク大学教授に招聘された。一九三五年ライプツヒヒ大学、一九四五年ゲッチンゲン大学と次々に招聘を受

諾して転任を重ね、一九四八年ハイデルベルク大学にラートブルフ教授の後任として赴任して、ここで定年退職をした。その経歴が示すように、まことに輝かしい学者の道を歩み続けたのである。

シヒミット教授について、何も語る必要はない位有名である。ハイデルベルク大学で現役として最後の講義を聴講したときのことを私はすでに書いたことであつた(ヒュムルハント・シヒミット教授・綜合法学一九六一年三月号二八頁以下)。ここで強調したいことは、シヒミット教授をマ・リスト流の実証主義者と考えることは當りていないという点である。教授は医師であつた父親の影響をうけ、おられた博士論文、教授資格請求論文、主著の一つである刑法史学の研究に現われているように、研究資料を入手しうる限り蒐集して著実に事実を追及し、それに立脚した理論をくみ立てるといふ手順が、シヒミット教授の真価であり、その特色である。シヒミット教授には註釈書を書くことが最もおもしろい仕事なのである。又、シヒミット教授の筆蹟の美しきは定評がある。

教授の著作録は七〇才記念論文集六六二頁以下である。主な著書と、一九六一年以後の論文は以下の通りである。

著書

- Lehrbuch des deutschen Strafrechts. 23. Aufl. 1921. 24. Aufl. 1924. 25. Aufl. 1927. 26. Aufl. 1932. / Strafrechtsreform und Kulturkrisis. 1931. / Militärstrafrecht. 1936. / Die militärische Straftat und ihre Täter. 1936. / Der Arzt im Strafrecht. 1939. / Justitia fundamentum regnorum. 1947

- (紹介・平野龍一、刑法雑誌二巻一号一八九頁以下) / Einführung in die Geschichte der deutschen Strafrechtspflege. 1. Aufl. 1947. 2. Aufl. 1951. / Das neue Westdeutsche Wirtschaftsstrafrecht. Grundsätzliches zu seiner Ausgestaltung und Anwendung. 1950. / Lehrkommentar zur Strafprozessordnung und zum Gerichtsverfassungsgesetz. 1. Teil. 1952. (2. Aufl. 1965) 2. Teil. 1957. 3. Teil. 1960. / Die Reform des Strafrechts im Rückblick auf Berliner Impulse in der Geschichte der modernen Kriminalpolitik. 1955. (紹介・西原春夫、刑法雑誌九巻一号一〇四頁以下) / Die Bestehungs-tatbestände in der höchstrichterlichen Rechtsprechung von 1879-1959. 1960. / Die Sache der Justiz. 1961. / Empfiehlt es sich, dass der Gesetzgeber die Fragen der ärztlichen Aufklärungspflicht regelt? Verh. d. 44. Deut. Jur. Tag. 1962.

論文(一九六一年以後)

- Rechtsauffassung der Staatsanwaltschaft und Legalitätsprinzip. MDR. 1961. S. 269 ff. / Ist ein Folgerecht im Konkurs massenzugehörig? Versicherung u. Recht. 1961. S. 493 ff. / Verhaftungsantrag, Rechtsmittelerklärung und §136 a StPO. JR. 1962. S. 290 ff. / Probleme der richterlichen Unabhängigkeit. DRiZ. 1962. S. 401 ff. / Zieländerung bei der kleinen Strafprozessreform? DRiZ. 1963. S. 176 ff. / Probleme der richterlichen Verantwortung. DRiZ. 1963. S. 376 ff. / Das deutsche Richtergesetz. JZ. 1963. S. 73 ff. / Ein Gegenentwurf zum Entwurf eines StGB.

1962—Kritische Erörterungen. MDR. 1963. S. 629 ff. / Anklage-
erhebung; Eröffnungsbeschluss, Hauptverfahren, Urteil-Betrach-
tungen zur Strafprozessreform. NJW. 1963. S. 1081 ff. / Der
Beugnisprozess in ober- und niederbayerischen Rechtsquellen
des 15. und 16. Jahrhunderts. F. t. v. Weber. 1963. S. 32 ff. /
Der Stand der Rechtsprechung zur Frage der Verwendbarkeit von
Tonbandaufnahmen im Strafprozess. JZ. 1964. S. 537 ff. / Zur
Rechtseilung und Funktion der Staatsanwaltschaft als Justiz-
behörde. MDR. 1964. S. 629 ff. u. 713 ff.

シムリット (Rudolf Schmitt)

一九二二年四月九日、フランクフルトに生れた。一九六三年に借
しまれて世を去ったニーゼのもとで学んだ人である。一九五七年に
マインツ大学私講師となつたが、請求論文は *Strafrechtliche Mass-
nahmen gegen Verbündeten. Gleichzeitig ein Beitrag zur Lehre von
dem strafrechtlichen Unrechtsfolgen*. 1958. 246頁。一九六二年に
フライブルク大学員外教授に就任し、今日に至つてゐる。分析力の
あることは、その批判的な論文の中によく現われてゐる。

論文

Zur Systematik der Unterlassungsdelikte. JZ. 1959. S. 432 ff. /
Können Beschlüsse aus §§ 346, 349 StPO zurückgenommen werden?
JZ. 1961. S. 15 ff. / Rücktritt vor der Verabredung zu einem
Verbrechen. Jus. 1961. S. 25 ff. / Die Bestechungstatbestände

im Entwurf 1960 (Übersicht und Kritik). ZStw. Bd. 73. 1961.
S. 414 ff. (原典・邦訳第一、本報三六卷八号一〇四頁) / Vorsätzliche
Tötung und vorsätzliche Körperverletzung. JZ. 1962. S. 389 ff.
ノルンベルク大学博士、Subjektive Rechtfertigungselemente bei
Fahrlässigkeitsdelikten? Jus. 1963. S. 64 ff. / Die Konkurrenz
im geltenden und künftigen Strafrecht. I. Teil u. 2. Teil. ZStw.
Bd. 75. 1963. S. 43 ff. u. 179 ff. / Strafprozessuale Präventiv-
massnahmen. JZ. 1965. S. 193 ff.

シムローター (Harst Schröder)

一九一三年三月九日、ブレーメンに生れた。父親は銀行家であつ
た。その影響もあつてか彼の論稿は実務上の解決に資することを常
に留意したものである。一九三九年、ミンスター大学私講師とな
つた。請求論文はザウアー教授に提出した *Unwahrer und unzuver-
lässiger Eid. Eine rechtsdogmatisch-rechtspolitische Untersuch-
ung*. 1933. である。一九四二年、オーストリーのグラーツ大学の員
外教授に招聘され、一九四八年にはキール大学正教授となつた。一
九五五年にチュービンゲン大学に転じ、今日に至つてゐる。シエン
ケ教授の急逝後、その刑法と民事訴訟法の著書の改訂をひきうけた
が、これは師弟関係によるものではなくて、チュービンゲンにある
出版社ベックの都合によつたものであるといふ。

著書

Schönke-Schröder: Strafgesetzbuch, ab 7. Aufl. 1954. / Sch-

Take-Schröder-Niese: Lehrbuch des Zivilprozessrechts. 8. Aufl. 1956 / Gesetz und Richter im Strafrecht. 1953. / In welcher Weise empfiehlt es sich, die Grenzen des strafrichterlichen Ermessens im StGB. zu regeln? Gutacht. z. 41. Deut. Jur. Tag. 1955. / Die kriminalpolitische Aufgabe der Strafrechtsreform 1962.

備考

ワノンクキ一六新世セ Ehrenschutz von Gemeinschaften im kommenden Strafrecht. GS. Bd. 110. 1938. S. 77 ff. / Der Täterbegriff als „technisches“ Problem. ZStw. Bd. 57. 1938. S. 459 ff. / Über die Abgrenzung des Diebstahls von Betrug und Erpressung. ZStw. Bd. 60. 1941. S. 33 ff.

キ一六新世セ Die Teilnahme im internationalen Strafrecht. Zugleich ein Beitrag zur Lehre vom Geltungsbereich des deutschen Strafrechts. ZStw. Bd. 61. 1942. S. 57 ff. / Zum Aufbau der deutschen Gerichte. ZAk. 1943. S. 175 ff. / Notwehrüberschreitung und Putativnotwehr. ZAk. 1944. S. 123 ff.

キ一六新世セ Teilnahmeprobleme bei der Abtreibung. MDR. 1949. S. 391 ff. / Der Rücktritt des Teilnehmers vom Versuch nach § 46 und 49 a. MDR. 1949. S. 714 ff. / Begünstigung und Hehlerei. F. f. Rosenfeld. 1949. S. 161 ff. / Aufbau und Grenzen des Vorsatzbegriffs. F. f. Sauer. 1949. S. 207 ff. / Sicherungsbetrag und Sicherungserpressung. MDR. 1950. S. 398 ff. / Vorsatz und Schuld. MDR. 1950. S. 646 ff. / Zur Abgrenzung

der Vermögensdelikte. StJZ. 1950. S. 94 ff. / Der Aufbau der Tötungsdelikte. StJZ. 1950. S. 560 ff. / Der Eid als Beweismittel. ZJP. Bd. 64. 1950. S. 216 ff. / Tatbestands- und Verbotstrittum MDR. 1951. S. 387 ff. / Die Rechtsnatur der Begünstigung und Hehlerei. MDR. 1952. S. 68 ff. / Bedingte Verurteilung. NJW. 1952. S. 6 ff. / Zur Teilnahme an Tötungsdelikten. NJW 1952. S. 649 ff. / Zur Abgrenzung zwischen Mord und Totschlag. JZ. 1952. S. 526 ff. / Der Irrtum über Rechtfertigungsgründe nach dem BGH. MDR. 1953. S. 70 ff. / L'unification de la peine et des mesures de sécurité. Rev. int. dr. pén. 1953. p. 621 ff. / Die Irrtumsrechtsprechung des BGH. ZStw. Bd. 65. 1953. S. 178 ff. / Die künftige Gestaltung der Tötungsdelikte. Mat. Str.

Ref. Bd. 1. 1954. S. 283. (解合・米澤俊徳) キ一六新世セ Die Neugestaltung der Abtreibungsdelikte. Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 295 ff. (解合・前川寛夫) キ一六新世セ Die Vereinheitlichung der Strafe und der sichernden Massnahmen. ZStw. Bd. 66. 1954. S. 180 ff. / Gesetzliche und richterliche Strafzumessung. F. f. Mezger. 1954. S. 415 ff.

キ一六新世セ Rechtswidrigkeit und Irrtum bei Zweignungs- und Bereicherungssacht. DRiZ. 1956. S. 69 ff. / Die Freiwilligkeit des Rücktritts vom Versuch. MDR. 1956. S. 321 ff. / Konkurrenzprobleme bei den erfolgsqualifizierten Delikten. NJW.

1956. S. 1737 ff. / Verbotstratum, Zurechnungsfähigkeit, actio libera in causa. GA. 1957. S. 297 ff. / Der subjektive Tatbestand des § 330 a StGB. DRIZ. 1958. S. 219 ff. / Die Bindung an aufhebende Entscheidungen im Zivil- und Strafprozess. F. J. Nilsch. 1958. S. 205 ff. / Der Begriff der „gesetzlichen Unterhaltspflicht“ im § 170 b StGB. JZ. 1959. S. 346 ff. / Zur Zulässigkeit gesetzlicher Beweisregeln im Strafrecht. NJW. 1959. S. 1903 ff. / Die Not als Rechtfertigungs- und Entschuldigungsgrund im deutschen und schweizerischen Strafrecht. Schw. ZStr. Bd. 76. 1960. S. 1 ff. / Das Rechtsgut der Bestechungsdelikte und Bestechlichkeit des Ermessensbeamten. GA. 1961. S. 289 ff. / Eigenmächtige Heilbehandlung im geltenden Strafrecht und im StGB-Entwurf 1960. NJW. 1961. S. 951 ff. / Die Notstandsregelung des Entwurfs 1959 II. F. J. E. Schmidt. 1961. S. 290 ff. (梁冬・袴仁 氏 著 藤井○兼川 氏 訳 大貫 氏 訳) / Grundprobleme des Rücktritts vom Versuch. Jus. 1962. S. 81 ff. / Grenzen des Vermögensschadens beim Betrug. NJW. 1962. S. 721 ff. / Die Koordinierung der drei Begünstigungstatbestände. NJW. 1962. S. 1037 ff. / Konkurrenzprobleme bei Untreue und Unterschlagung. NJW. 1963. S. 1958 ff. / Beförderung von Gütern durch Handelsvertreter, Handelsmakler und Kommissionäre. Verkehrsleuer-Rundschau. 1963. / Eigenhändige und Sonderdelikte bei Fahrlässigkeitstatbeständen. F. J. v. Weber. 1963. S. 233 ff.

梁冬氏 氏 著 の 著 の 著 Die Herrschaft der Parteien im Zivilprozessrecht mit rechtsvergleichenden Hinweisen auf die neue italienische ZPO. Annuario di diritto comparato e di studi legislativi. XVI.

シヨットノム (Georg Schwalm)

モンの司法省事務官の、フライブルク大学の名誉教授をかむつらる。ハイデルブルク大学教授で転じたラックナーと共に入つて、法務省の中心で法律家として働いてゐる。

澤藤 (共著)

Dreher-Lackner-Schwalm: Wehrstrafrecht. 1958.

澤大

Heimliche und achtsenwerter Beweggrund. MDR. 1957. S. 260 ff. / Das Einführungsgesetz zum Wehrstrafrecht. JZ. 1957. S. 398 ff. / Zur Kasuistik der Mordmerkmale. MDR. 1958. S. 396 ff. / Strafrechtliche Probleme der künstlichen Samenübertragung beim Menschen. GA. 1959. S. 1 ff. (宮沢 浩一・人工授精に関する刑法上の諸問題・共著 刑法の諸問題——小池隆一博士還歴祝賀論文集——昭和四四年、四十七頁以下) 後述の人工授精の諸問題——ドイッ刑務省の報告——一四五頁以下に於て詳論。この論稿はシヨットノムの論文に於て編輯されたものである。 / Der Stand der Strafrechtsreform. MDR. 1959. S. 797 ff. 884 ff u. 965 ff. 1960. S. 6 ff. / Gibt es objektive Strafbarkeitsbedingungen? MDR. 1959. S. 906 ff. / Kriminal-

politik im Strafrechtentwurf 1960. DRiZ. 1960. S. 277 ff. / Die Schuldfähigkeit nach dem Strafrechtentwurf. MDR. 1960. S. 537 ff. / Die strafrechtliche Bedeutung der ärztlichen Aufklärungspflicht. MDR. 1960. S. 722 ff. / Gesetzliche Regelung der ärztlichen Aufklärungspflicht. MDR. 1962. S. 689 ff. / Strafrechtsreform und Sozialhygiene. Int. Jour. f. prophyl. med. u. soz. hyg. 1962. S. 121 ff. / Der strafrechtliche Schutz der Persönlichkeitsrechte im technischen Zeitalter. ZStrw. Bd. 74. 1964. S. 488 ff. / Die kriminalpolitische Bedeutung des Entwurfs eines Strafrechtbuchs (E) 1962, Bundestagsvorlage). GA. 1964. S. 257 ff.

シュヴィング (Erich Schwinge)

一九〇三年一月十五日、イエーナに生れた。一九二六年、ボン大学のリヒター教授に提出した学位論文 *Der Kampf um die Schwurgerichte bis zur Frankfurterationalversammlung, 1926.* により学位を得、引き続き同教授のもとで研究を重ね、一九三〇年、ボン大学私講師となった。請求論文は *Telologische Begriffsbildung im Strafrecht, 1930.* である。一九三二年、ホルン大学教授に迎えられたが、一九三三年の政変によつてヒタヤ系の恩師にそむくこととなった。つまり、ナチス的な思考をキーンマルトとみなし、推し進め、いわゆるマルンルク学派を形成することとなったのである。同大学には一九三六年に招聘を受けて赴任した。一九四〇年にはウィーン大学教授に転じている。戦後は一九四六年以来、マル

ンルク大学に在りて。

著書 (共著)

Der fehlerhafte Staatsakt in Militärvollstreckung. 1930. / Schwinge-Zimmerl: Der Methodenstreit in der heutigen Rechtswissenschaft. 1930.

ホルン大学時代 Das neue Untrennstrafrecht in strafrechtlicher und zivilrechtlicher Beleuchtung für die Praxis. 1933. / Grundlagen des Revisionsrechts. 1. Aufl. 1935, 2. Aufl. 1960. / Militärstrafgesetzbuch. 1. Aufl. 1936, 2. Aufl. 1940.

ペールンルク大学時代 Schwinge-Zimmerl: Wesensschau und konkretes Ordnungsgedanke im Strafrecht. 1937. / Irrationalismus und Ganzheitsbetrachtung in der Strafrechtswissenschaft. 1938. / Militärisches Gehorsam und Verantwortung. 2. Aufl. 1940. / Die Entwicklung der Mannes-Zucht in der deutschen, britischen und französischen Wehrmacht seit 1914. 1941. / Kommentar zum Militärstrafrecht. 6. Aufl. 1944. / Welt und Werkstatte des Forschens. 1957. / Der Jurist und sein Beruf. 1960. / Der Jurist in der modernen Gesellschaft. 1964.

論文

Identität der Tat im Sinne der Strafprozessordnung. ZStrw. Bd. 52. 1932. S. 203 ff. / Die Reform des höchsteninstanzlichen Rechtsmittels. ZAk. 1935. S. 546 ff.

ペールンルク大学時代 Abschaffung der Rechtsmittel im Straf-

prozess¹ ZAK. 1937. S. 539 ff. / Zur Neugestaltung der Revision wegen verfahrensrechtlicher Verstöße. F. t. Jung. 1937. S. 212 ff. / Befehl und Gehorsam. Bemerkungen zur Frage der Neugestaltung des § 47 MiStGB. ZAK. 1938. S. 147 ff. / Gehorsam und Verantwortung. Zur Frage des übersetzlichen Notstands im Militärstrafrecht. DRW. 1939. S. 119 ff.

フーレンツ博士の Angehörige der ehemaligen deutschen Wehrmacht und der SS vor französischen Militärgerichten. MDR. 1949. S. 650 ff. / Die deutsche Kriegsverjährbarkeit und die Kriegsgefangene. Neue-Welt-Kalender. 1950. S. 49 ff. / Zur Reform des Beleidigungsrechts. GA. 1956. S. 309 ff. / Die deutsche Militärgerichtsbarkeit im zweiten Weltkrieg. DRiZ. 1959. S. 350 ff. / Der Wissenschaftler und die Freiheit der Meinungsäußerung. F. t. Herrfahrdt. 1961. S. 177 ff. / Die Bekämpfung des Organen im anglo-amerikanischen Recht. F. t. v. Weber. 1963 S. 294 ff.

シーゲルト (Karl Siegelt)

一九〇一年七月二日、ウスマールに生まれた。フーレンツ博士のローゼンシュルト教授の下で一九二九年から助手を勤めた。学位を授けられた。Die Prozesshandlungen, ihr Widerruf und ihre Nachholung. Ein Beitrag zu dem Lehren des allgemeinen Prozessrechts, unter besonderer Berücksichtigung des Reichsstrafprozess-

rechts. 1929. という論文によつた。一九三一年フーレンツ博士の講義で就任したが、請求論文は Notstand und Putativnotstand. 1931. である。一九三三年よりマッテンゲン大学正教授になつたが、一九五八年、第一線を退いた。

シーゲルトは戦前、ナチス刑法に同調する論著を残したが、しかし、刑訴の分野に見るべきものが多い。戦後は外国刑法、特にイタリア刑法の研究を数多く発表し、同時に又、イタリアの学界にも論文を発表してゐる。

著書

Grundzüge des Strafrechts im neuen Staate. 1934. / Deutsches Wirtschaftsstrafrecht. 1939. (紹介) 因襲重米 法学博士兼法大入塾大生 一〇四 | 頁 (二) / Grundlinien der Reform des Zivilprozessrechts im Nachkriegseuropa. 1952. / Der Missbrauch der Schallaufnahmegeräte im geltenden Strafrecht. 1953. / Grundlinien des Völkerstrafprozessrechts. 1953. / Repräsentative, Requisition und Höh. Befehl. 1955.

論文

Unverrückbare Situation im Entwurf des Einführungsgesetzes zum ADSGB. ZStrw. Bd. 51. 1931. S. 379 ff. / Notstand und Putativnotstand. ZStrw. Bd. 52. 1932. S. 48 ff. / Kritische Bemerkungen zum Schnellverfahren. GS. Bd. 102. 1933. S. 30 ff. / Nulla poena sine lege. Kritische Bemerkungen zu den Vorschlägen der amtlichen Strafrechtskommission. DS. 1934. S. 376 ff. / Die

Rechtskraftwirkungen im künftigen Strafprozess. DS. 1935. S. 283 ff. / Wie lassen sich Riessprozesse abkürzen? ZAK. 1935. S. 549 ff. / Die Rechtsmittel im neuen Strafverfahren. DR. 5. Jg. 1935. S. 533 ff. / Die Zwecke des neuen Strafprozessrechts. DJZ. Bd. 40. 1935. S. 851 ff. / Richter, Staatsanwalt und Beschuldigter im Strafprozess des neuen Staates. ZStw. Bd. 54. 1935. S. 14 ff. / Der Einfluss der Strafzwecke auf Schuld und Strafmaß. ZStw. Bd. 54. 1935. S. 418 ff. / Berufung und Revision im Strafverfahren. F. f. Gleichsach. 1936. S. 138 ff. / Die Lage des Strafverfahrensrechts. DRW. 2. Jg. 1937. S. 47 ff. / Recht und Hochschule im Umbruch. DR. 8. Jg. 1938. / Haftung für fremde Schuld im Steuer- und Wirtschaftsstrafrecht. NJW. 1953. S. 527 ff. / Westeuropäisches Wirtschaftsstrafrecht. NJW. 1953. S. 1333 ff. / La protection de la liberté individuelle pendant l'instruction. Rev. int. dr. pén. 1953. p. 201 ff. / Idee fondamentali del nuovo diritto penale economico germanico. F. f. Manzini. 1954. / Allgemeine anerkannte und regionale Grundsätze im Zivilprozess. AcP. 1956. S. 28 ff. / Sechliche Unabhängigkeit des Staatsanwalts. DRiZ. 1956. S. 224 ff. / L'indipendenza del pubblico ministero. Studi di memoria F. Grisogni. 1956. p. 191 ff. / Verwertung rechtmässiger Tonbandaufnahmen im Strafprozess. GA. 1957. S. 265 ff. / Die aussergerichtlichen Tonbandaufnahmen und ihre Verwertung im Zivilprozess. NJW. 1957.

S. 689 ff. / Fehlerhafte Besetzung des Kollegialgerichts nach der Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs. NJW. 1957. S. 1622 ff. / Nachprüfung der Besetzung von Kollegialgerichten in der Revisionsinstanz. DRiZ. 1958. S. 191 ff. / Die §§ 139, 286 und 287 ZPO in der neuesten Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs. NJW. 1958. S. 1025 ff. / Universal, regional and national measures of further international commercial arbitrat. Martin Domke: International trade arbitrat. 1958. / Das italienische Strafrecht und Strafprozessrecht nach Frosali, Bettol und Battaglini. GA. 1959. S. 243 ff. / Die "offensichtlich unbegründeten" Revisionen. NJW. 1959. S. 2152 ff. / Schuld und Trunkenheit im deutschen und italienischen Strassenverkehrsrecht. DAR. 1960. S. 277 ff. / Italienisches Strafrecht und Strafprozessrecht in neuen Veröffentlichungen. GA. 1962. S. 74 ff. / Tradition und Fortschritt im neuesten italienischen Strafrecht. GA. 1963. S. 334 ff. / Fernrecht und Schutz der Einzelperson. NJW. 1963. S. 1953 ff.

シューベーン (Rudolf Steverts)

一九〇三年一月三日、ハンセンに生れた。父親は化学の教授である。グライプスワルト、ハンブルク、フランクフルトの諸大学や、ハンブルク大学のリーマン教授のところで研究を続け、学位を得た。著文は Die Wirkungen der Festsitzstrafe und Untersuchungshaft auf die Psyche der Gefangenen. Pflüchenerologische

Studien an literarischen Selbstzeugnissen ehemaliger Häftlinge. 1929. である。一九二八年にリーノマンが急逝したので、その後任として赴任したロ・シニヒット教授がいつておられた研究生活を続け、一九三二年にハンブルク大学私講師となった。講義論文は *Beiträge zur Lehre von den subjektiven Urrechtsmomenten im Strafrecht.* 1934. である。一九三三年にマールブルク大学員外教授に就任したが、一九三四年にはハンブルク大学正教授に迎えられる。今日に至るまで。

その研究領域は現在では殆んど刑事学、特に少年犯罪に限られている。刑法大改正委員会でも、この点について専門家として大いに活躍した。

著書 (共著、監著)

Die Behandlung der jungen Rechtstreuer in England unter besonderer Berücksichtigung des Borstal Systems. 1937. / Das englische Jugendwohlfahrts- und Jugendgerichtsgesetz vom 13. April 1933 (Childen and Young Act. 1933) 1938. / Die strafrechtliche Behandlung der Frühkriminalität. 1938. / Das englische Gesetz über Kriminalrechtspflege von 1948 (Criminal Justice Act 1948). 1952.

譯文

Die preussische Verordnung über den Strafvollzug in Stufen vom 7. Juni 1929, in: Rechtsstaatsidee und Erziehungsstrafe. Abh. z. Erinnerung v. Liepmann. 1930. S. 129 ff. / Die Arbeitsgemein-

schaft für die Reform des Strafvollzuges, Tagungen 1929 und 1930 ZStrw. Bd. 51. 1931. S. 255 ff. / Die englische Denkschrift über die Behandlung hartnäckiger Verbrecher (Report of the Departmental Committee on Persistent Offenders. May 1932). ZStrw. Bd. 53. 1934. S. 676 ff. / Kriminologische Forschung als Landschaftsaufgabe der deutschen Hochschulen. MKri. 1935. S. 1 ff. / Übergangsheime für entlassene Strafgefangene. ZStrw. Bd. 55. 1936. S. 307 ff. / Zur Frage der gerichtlichen Ermittlungshilfe. MKri. 1937. S. 449 ff. / Das englische Borstalsystem. ZStrw. Bd. 56. 1937. S. 551 ff. / Zur Neuordnung des deutschen Jugendstrafvollzugs. MKri. 1938. S. 31 ff. / Die Strafregistrierung bei Jugendlichen und ihre Reformbedürftigkeit. ZStrw. Bd. 57. 1938 S. 771 ff. / Das neue Reichsjugendgerichtsgesetz. ZAK. 1944 S. 5 ff. / Gegenwartfragen des deutschen Jugendrechts. Jb. d. Jugendarbeit. 1949. S. 58 ff. / Zur Frage der Unterbringung eines vermindert zurechnungsfähigen Gewohnheitsverbrechers in einer Heil- und Pflegeanstalt oder in Sicherungsverwahrung. SJZ 1950. S. 510 ff. / Der Jugendliche im Strafvollzug. St. Gen. 1952. S. 298 ff. / Zur Notwendigkeit und Gestaltung der Gerichtshilfe im allgemeinen Strafverfahren. MKri. 1953. S. 129 ff. / Würde sich ein neues Strafgesetzbuch die Einführung der unbestimmten Verurteilung empfehlen und in welchem Umfang? Wie wäre sie auszugestalten? Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 107 ff. (譯

介・前川信夫・フレイツァをける刑法改正論(九頁以下) / Das Jugendgerichtsgesetz von 1953 und die deutsche Jugendgerichtsbewegung. Neue Wege zur Bek. d. JKrim. 1955. S. 15 ff. / Die kriminalrechtliche Behandlung von jungen Rechtsbrechern (über 18 Jahren) in der Bundesrepublik Deutschland, in: Arbeiten zur Rechtsvergleichung. Bd. 2. 1958. S. 37 ff. / Zum Wasserhaushaltsgesetz der Bundesrepublik. F. f. Giesecke. 1958. S. 259 ff. / Die Verurteilung der Funktionen zwischen dem Jugendrichter und der anderen Mitarbeitern in der Jugendkriminalpflege. ZBl. f. Jugendrecht. u. Wohlfr. R. 1959. S. 241 ff. / The Evolution of Sexual Criminality in Germany, in: Sexual Crime Today. 1960. S. 51 ff. / Welche Aufgabe stellt der Regierungsentwurf eines Strafgesetzbuches dem Strafvollzug? ZStV. 1961. 45 ff. / Die „Grosse Strafrechtsreform“ und das materielle Jugendkriminalrecht. MKri. 1961. S. 222 ff. / Die Erziehungsaufgabe des Jugendarrestes. Krim. u. Vollz. d. Frei. Str. 1961. S. 150 ff. / Fachpsychologische Aufgaben innerhalb einer modernen Strafrechtspflege. Gerichtlich. Psychol. 1962. S. 91 ff.

シトノヒトメ (Günter Spendel)

一六二二二年四月一四日、マハクエントマンのシトノヒトメ、
ホーエンマンと共著した論文、*Die Kausalität der Bedingungs-
theorie für die Handlungsdelikte. Eine kritische Untersuchung*

原シトノヒトメ著の原典

der *Conditio-sine-qua-non-Formel im Strafrecht*. 1948. シトノヒトメ位を著した。師の逝去の後、マリンマンとト大学のシトノヒトメと共著した。一九五三年と同大学の私講師となった。論文論文の *Zur Lehre vom Strafmasse*. 1954. 頁 68 ff. 一九五八年と同大学員外教授となったが、一九六二年にマリンマンとト大学正教授に招聘されて今日に至る。

編者

Über eine rationalistische Geisteshaltung als Voraussetzung der Jurisprudenz. F. f. Radbruch. 1948. S. 68 ff. / Der Kausalzusammenhang im Strafrecht. StZ. 1949. S. 130 ff. / Zum Tode Gustav Radbruchs. NJW. 1950. S. 17 ff. / Das richterliche Beratungsergebnis und seine Grenzen im Strafprozess. ZStw. Bd. 65. 1953. S. 403 ff. / Zur Notwendigkeit des Objektivismus im Strafrecht. ZStw. Bd. 65. 1953. S. 519 ff. / Max Alberg (Neue Deutsche Biographie, Bd. 1.) 1953. / Materielle Straffrage und strafprozessuale Teilrechtskraft. ZStw. Bd. 67. 1955. S. 556 ff. / § 51 Abs. II StGB und das Problem des Strafmasses. NJW. 1956. S. 775 ff. / Der sogenannte Umkehrschluss aus § 59 StGB. nach der subjektiven Versuchstheorie. ZStw. Bd. 69. 1957. S. 441 ff. / Grundfragen jeder Strafrechtsreform. Eine Studie zur Systematik des Strafrechts. F. f. Rittler. 1957. S. 39 ff. / Paul Johann Anselm Feuerbach. NJW. 1958. S. 815 ff. / Zur Vollmacht und Rechtsstellung des Strafverteidigers. JZ. 1959. S.

737 ff. / Die kriminalpolitischen Aufgaben der Strafrechtsreform. NJW. 1960. S. 1700ff. / Zur Unterreichung von Tun und Unterlassen. F. f. E. Schmidt. 1961. S. 133 ff. (録々・中田恭一・法条論叢刊一巻五号九〇頁以下) / Die Begründung des richterlichen Strafmasses. NJW. 1964. S. 1758 ff.

シュトック (Ulrich Stock)

一八九六年五月八日、ライプツヒヒに生れた。父親は医師であつた。ミューンヘンとライプツヒヒに学び、リヒホルト・シヒミットのあとで研究を続けた。一九三一年に私講師となつたが、請求論文は *Bestrafung und Wesen der Amtserbrechen*. 1932. である。教授資格を取得して後、裁判官の生活を送つていたが、一九三八年にケルリン大学教授に就任した。一九四一年にはマールブルク大学に転じ、一九四七年までその任であつた。一九四八年にはザール大学教授に招聘され就任したが、一九五一年にはヴェルムブルク大学に転じ、久しくその任であつて退任したが、一九六二年である。

著書 (共著を含む)

Die Strafe als Dienst am Volk. Der Ausgleichungsgedanke in seiner Bedeutung für das Strafrechtssystem. 1933. / Wehrstrafrecht und allgemeines Strafrecht, in: Die militärische Gerichtsverfassung und ihr Verhältnis zur allgemeinen Gerichtsbarkeit. (録々・年報(不図) / Strafprozessrecht. Ein Grundriss. 1952.

論文

Über Staatsnotwehr und Staatsnotstand. GS. Bd. 101. 1932. S. 148 ff. / Die Reform der Strafprozessordnung unter dem Gesichtspunkt der Abkürzung sogen. Monatsprozesse. ZAk., 1935. S. 541 ff. / Zur Strafprozesserneuerung. F. f. R. Schmidt. 1936. S. 197 ff. / Zur Abgrenzung von Mord und Totschlag. StZ. 1947. S. 529 ff. / Die Abschaffung der Todesstrafe. Die Kirche in der Welt. III. 1950. S. 251 ff. / Die Schwangerschaftsunterbrechung. ebenda IV. 1951. / Die Strafe als Leistung. Ann. Univ. Sar. 1952. S. 97 ff. / Die strafrechtliche Behandlung des politischen Mordes. F. f. Senn. 1954. S. 97 ff. / Das Ziel des Strafverfahrens. F. f. Mezger. 1954. S. 429 ff. / August Schoensock zum 75. Geburtstag. JH. 1955. S. 98 ff. / Der Fritsch-Prozess 1839. Seine rechtliche Beurteilung und seine Lehre. F. f. Lehmann. 1956. S. 925 ff. / Zur Frage der Übernahme anglo-amerikanischer Strafprozessgrundsätze in das deutsche Strafprozessrecht. F. f. Ritter. 1957. S. 305 ff. / Ist Strafhaftung bei Rückfall berechnigt? F. f. Notarp. 1961. S. 149 ff. / Zur Neugestaltung des Strafvollzugs gegenüber Erwachsenen und zum Strafmass. F. f. v. Weber. 1963. S. 407 ff.

シムロート・ノットホルム (Günter Stratenwerth)

一九二四年一月三一日、ナウムブルクに生れた。一九四五年から五〇年まで、ヴァッテンマン大学に学び、ヴェルムブルク教授の指導を

受けた。学位は *Die Naturrechtslehre des Johannes Duns Scotus*, 1961. という論文による。一九五六年のボン大学私講師となったが、請求論文は *Verantwortung und Gehorsam*, 1958. による。一九六〇年にヘルマンマン大学員外教授、そして一九六一年より、ヘルム大学正教授である。

著書

Das rechtstheoretische Problem der Natur der Sache. 1957. (空襲被害に責任を加算したとの有名な説。空襲被害・空襲被害被害者五五第三号三五七四号以下)

論文

Zur Behandlung des Merkmals „böswillig“ in § 1 KWVO. JR. 1949. S. 408 ff. / Der agent provocateur. MDR. 1953. S. 717 ff. / Prinzipien der Rechtfertigung. ZStrw. Bd. 68. 1956. S. 41 ff. / Strafprozessuale Zwangsmassnahmen bei inzidenter Normenkontrolle. JZ. 1957. S. 299 ff. / Schuld und Sühne. Evang. Theol. 1958. S. 337 ff. / Zur Beschlagnahme von Behördenakten im Strafverfahren. JZ. 1959. S. 693 ff. / Dolus eventualis und bewusste Fahrlässigkeit. ZStrw. Bd. 71. 1959. S. 51 ff. / Objektive Strafbarkeitsbedingungen im Entwurf eines StGB. 1959. ZStrw. Bd. 71. 1959. S. 565 ff. / Arbeitstellung und ärztliche Sorgfaltspflicht. F. f. E. Schmidt. 1961. S. 383 ff. (坂本・忠義著・刑法講義「十一期」中「ヤク風」) / Entwicklungsstendenzen der neueren deutschen Strafrechtsdogmatik. JfB. Bd. 2. 1961/62. S.

195 ff. / Zum Verbrauch der Strafflage bei Fortsetzungs Zusammenhang. Jus. 1962. S. 220 ff. / Handlungs- und Erfolgsunwert im Strafrecht. Schw. ZStr. Bd. 79. 1963. S. 233 ff. (坂本・忠義著「本誌三八巻三三—三四頁以下」) / Zur Funktion strafrechtlicher Gesinnungsmerkmale. F. f. v. Weber. 1963. S. 171 ff. / Die fakultative Strafmilderung beim Versuch. F. f. Schw. Jur. Tag. 1963. S. 247 ff. / Die Definitionen im Allgemeinen Teil des Entwurfs 1962. ZStrw. Bd. 76. 1964. S. 669 ff. / Die Bedeutung der Analen Handlungslehre für das schweizerische Strafrecht. Schw. ZStr. Bd. 81. 1965. S. 179 ff.

シトルナー (Walter Stree)

一九三三年五月四日「シネレヌウイック・ホルシュタイン」のコーナーに生れた。一九五五年からチエーンゲン大学のシネレナー教授のものと助手として勤務し、研究を重ね、一九五九年私講師となった。請求論文は *Delictsfolgen und Grundgesetz. Zur Verfassungsmässigkeit der Strafen und sonstigen strafrechtlichen Massnahmen*. 1960. による。一九六二年「マインスター大学」の招聘を受けた。今日オプレンデブルグ教授の職位に在る。

著書

In dubio pro reo. 1962.

論文

Gesetzliche Schranken für vertragliche Wettbewerbsverbote.

NJW. 1964. S. 1025 ff. / Strafantragsrecht der Eltern eines Minderjährigen vor und nach der Ehescheidung. Fam. R. Ztg. 1966. S. 365 ff. / Zur Vertretung beim Strafantrag. NJW. 1966. S. 454 ff. / Zum Strafantrag durch Strafanzeige. MDR. 1966. S. 723 ff. / Strafantrag und Gleichheitssatz (unter besonderer Berücksichtigung des Strafantragsrechts der Behörden. öf. Verw. 1968. S. 172 ff. / Verfassungsbeschwerde bei Verstoß gegen Vorlegungspflicht. NJW. 1959. S. 2051 ff. / Zur Auslegung der §§ 224, 226 StGB. (Zugleich ein Beitrag zum Versuchserfolgsqualifizierter Delikte.) GA. 1960. S. 289 ff. (梁谷・和夫 梁谷一・木淵川中 中一 中一) / Mitwirken zum Absatz strafbarer erworbenes Güter. GA. 1961. S. 33 ff. / Die Ersatzheherei als Auslegungsproblem. Jus. 1961. S. 50 ff. / Abgrenzung der Ersatzheherei von der Heherei. Jus. 1961. S. 83 ff. / Der Irrtum des Täters über die Angehörigeigenschaft seines Opfers. Z. Fam. 1962. S. 55 ff. / Beteiligung an einer Schlägerei. Jus. 1962. S. 93 ff. / Teilnahme am Unterlassungsdelikt. GA. 1963. S. 1 ff. / Zur Problematik des publizistischen Landesverrats. JZ. 1963. S. 527 ff.

ネザール (Ottokar Tesar)

一八八一年二月三日ロンドンに生れた。ヴ・リスナーの直接の弟子の中、生存してゐる者の最長者である。一九〇八年にロー

ハ大学私講師となつたが、講求論文は有名な *Die symptomatische Bedeutung des vorrechtlichen Verhaltens*. 1907. である。一九一九年にはハイムン大学私講師で転じた。一九二〇年にケーニヒンブルク大学教授に招聘された。次いで一九三五年以来一九四九年まで兵役を免れ、ケーニヒンブルク大学教授の地位を占めた。Monatschrift für Krimnologie und Strafrechtsreform. 1961. の第24巻で、ネザールの生誕八〇歳を祝賀した特別号とが「トピア」

著書

Staatsidee und Strafrecht. Eine historische Untersuchung. I. Teil. Das griechische Recht und die griechische Lehre bis Aristoteles. 1914. / Die Überwindung des Naturrechts in der Dogmatik des Strafrechts. Ein Beitrag zur Problematik der Strafrechtswissenschaft. 1928.

論文

Gesetztechnik und Strafrechtsschuld. ZStw. Bd. 32. 1911. S. 379 ff. / Die Rechtserwirkung im Strafrecht. Öst. ZStw. Bd. 8. 1920. S. 368 ff. / Freiheitidee und Strafrecht. F. f. Frank. Bd. 1. 1930. S. 62 ff. / „Die Unwissenschaftlichkeit der Rechtswissenschaft.“ Bemerkungen zu der Lehre von Anders Wilhelm Landstedt. MKri. 1938. S. 94 ff. / Die Rechtsprobleme im Kontrollratsgesetz Nr. 50. Untersuchungen zum Wirtschaftsstrafrecht des Kontrollratsrechts. F. f. Wüstenhöfer. 1948. S. 222 ff. / Die naturrechtlichen Grundlagen der „crimes against Humanity“.

F. t. Laun. 1953. S. 423 ff.

ワルタ (Heinz-Günter Warta)

一九二六年二月二三日、東フロイセンのシロース・ロミンテンに生れた。一九四六年、兵役から復員の後、一九四九年までマールブルク大学で法律学を学び、同年司法官試補となつた。一九五四年にケルン大学のランゲ教授に提出した論文 *Die Abgrenzung von Tatbeständen und Verbotstratum bei Blanketttatgesetzen*. 1955. に学位を取得した。一九五六年地方裁判所判事と任命され、それと並んで一九五四年以来ケルン大学助手として研究を続けた。

一九六一年六月五日にケルン大学に提出した請求論文 *Dogmatische Grundlagen des richterlichen Ermessens im Strafrecht*. 1962. により私講師となり、一九六一年一〇月にエルランゲン大学教授に就任した。正教授に任ぜられたのは一九六二年二月である。その後、新設されたボンム大学の正教授に招聘されたのを機会に、これを受諾したとのことであり、本年三月に正教授に任命された。

論文

Die Verbotstratumregelung des § 31 WiStG in ihrer Abgrenzung gegen die allgemeine Irrtumsbestimmung des § 59 StGB. JR. 1950. S. 546 ff. / Tatbestandsbezogenes Unrechtsbewusstsein. NJW. 1953. S. 1052 ff. / Kann ein Beamter gegen seinen Willen in eine Richterstelle „versetzt“ werden? DRiZ. 1956. S.

107 ff. / Zur Zulässigkeit der Bildung mehrerer Sonderstrafkammern nach § 74 a GVG. DRiZ. 1957. S. 35 ff. / Um die Rechtsmittelbelehrung im Strafprozess. MDR. 1957. S. 717 ff. /

Zur gesetzlichen Regelung des vermeintlichen Verbotstratum. ZStw. Bd. 71. 1959. S. 252 ff. / Obligatorische Entziehung der Fahrerlaubnis. JZ. 1962. S. 304 ff. / Grundfragen der strafrechtlichen Konkurrenzlehre. Jus. 1964. S. 81 ff. / Das zweite Gesetz zur Sicherung des Strassenverkehrs. MDR. 1965. S. 1 ff. / Das Fahrverbot gemäss § 37 StGB GA. 1965. S. 65 ff.

▼・ウエーバー (Helmuth von Weber)

一八九三年七月四日、ナッセンに生れた。一九二四年、ライプニッツヒ大学私講師となつたが、請求論文はリヒバルト・シニミット教授に提出した *Das Notstandsproblem und seine Lösung in den deutschen Strafgesetzbüchern von 1919 und 1925*. 1925. によつて、一九二六年フラーン大学員外教授に就任、一九二八年にはイェーナ大学教授に転じた。一九三七年にボン大学教授に迎えられるその地位にとどまり、一九六二年に現役を退いた。一九六三年にはその七〇歳誕生を祝う論文集が公刊された。▼・ウエーバーの全著作はその四四五頁以下である。

著書の中、主なものとして一九六三年以後に発表された論文は次の通りである。

著書

Strafprozess. 5. Aufl. bearb. v. R. Schmidt und v. Weber. 1927. /
 Grundriss des tschechoslowakischen Strafrechts. 1929. / Rechts-
 einheit und Rechtsprechung. 1929. (フーナーナ大学法政學部出版部) /
 Aufgaben der deutsch-österreichischen Strafrechtsvereinheits-
 abung. 1931. / Internationale Strafgerichtsbarkeit. 1934. / Zum
 Aufbau des Strafrechtssystems. 1935. / Kriminalsoziologische
 Einzel Forschungen. 1939. / Die Grenzen der strafrechtlichen
 Verantwortlichkeit. 1943. / Benedict Carpzow (ein Bild der
 deutschen Rechtslage im Barockzeitalter). 1944. / Grundriss
 des deutschen Strafrechts. 1. Aufl. 1946. 2. Aufl. 1948. (藤本・
 藤田中・原田兼雄) | 藤田中 | 中川(頁六) / Die strafrechtliche Ver-
 antwortlichkeit für Handeln auf Befehl. 1948. / Anleitung für
 die Strafrechtsübung. 1952. / Die richterliche Strafzumessung.
 1956. (藤本・藤田中・原田兼雄) | 藤田中 | 中川(頁六) / Die
 Planung in der Unternehmung. 1963.

藤本

Zum Begriff des Staatsgeheimnisses. JZ. 1964. S. 127 ff. /
 Amtseidliche, Hwb. d. Kriminologie, 2. Aufl. 1965. S. 56 ff.

ウエルツヘル (Hans Welzel)

一九〇四年三月二五日、アルテルンに生れた。イエーナとハイデ
 ルムルックに学び、フーナーンドルフの自然法論に関する研究(その
 一) | 藤本 | Die kulturphilosophische Grundlagen der Naturrechtlichen Sammlung

Pufendorf und ihre kulturhistorische Bedeutung, Vertriebsrecht, f.
 Lit. W. u. Kunstgeschichte. Bd. 9. 1930. S. 585 ff. として発表された)
 ドイツり学位を取得し、一九三五年ケルン大学法政學部となり、講求
 論文 *Naturalismus und Wertphilosophie im Strafrecht*. 1935. (藤
 本・小島第一編・法學總論全集第五卷四号、七三(頁六)) は指導教授
 であり、藤本であるフーナーンと提出されたものである。一九三
 七年マッペンゲン大学員外教授、一九四〇年正教授となり、一九五
 二年には終職直前に逝去したシラーフ・シー・ドーナのあとをうけ
 つホン大学正教授となり、今日に至つてゐる。目的的行为論の推進
 者としてのウエルツヘルの名前は余りにも有名である。

藤本

Wahrheitspflicht im Zivilprozess. 1935. / Der allgemeine Teil
 des deutschen Strafrechts. 1. Aufl. 1940. 2. Aufl. 1943. 3. Aufl.
 1944. / Das deutsche Strafrecht. Eine systematische Darstellung.
 1. Aufl. 1947. 2. Aufl. 1949. 3. Aufl. 1954. 4. Aufl. 1954. 5. Aufl.
 1956. 6. Aufl. 1958. 7. Aufl. 1960. 8. Aufl. 1963. 9. Aufl. 1965. (1) | 藤本
 藤本・中井英太郎・刑法雑誌 | 藤本 | 中川(頁六) / Um die finale
 Handlungslehre. 1949. (藤本・藤田中・原田兼雄) | 藤本 | 中川(頁六)
 (一) / Vom irrenden Gewissen. 1949. / Das neue Bild des
 Strafrechts. 1. Aufl. 1951. 2. Aufl. 1952. 3. Aufl. 1957. 4. Aufl.
 1961. (藤本・藤田中・大塚仁・目的的行为論入門) (二) | 藤本・吉川
 藤本 | 法學雑誌 | 藤本 | 中川(頁六) | Naturrecht und materiale
 Gerechtigkeit. 1. Aufl. 1951. 4. Aufl. 1962. (大塚仁・原田中・

著の詳細な紹介、引用がなされてゐる) / Aktuelle Strafrechtsprobleme im Rahmen der finalen Handlungslehre. 1953. (澤々-邦臣大蔵・片岡中興 | 中 | 大蔵大佐) / Die Naturrechtslehre Samuel Pufendorfs. - Ein Beitrag zur Ideengeschichte des 17. und 18. Jahrhunderts. 1958. / Fahrlässigkeit und Verkehrswidrigkeiten. 1961. / Wahrheit und Grenzen der Naturrechtslehre. 1963. (澤々・邦臣大蔵・片岡中興 | 中 | 大蔵大佐) / Vom Belibenden und vom Vergänglichem in der Strafrechtswissenschaft. 1964. (澤々・邦臣大蔵 | 大 | 大蔵大佐)

論文

ケント大教授

Kausalität und Handlung. ZStrw. Bd. 51. 1931. S. 703 ff. / Über Wertungen im Strafrecht. Eine prinzipielle Bemerkung zur sog. emotional-normativen Logik. GS. Bd. 103 S. 340 ff.

ケント大教授の Tradition und Neubau in der Strafrechtswissenschaft. Bemerkungen zur Ideengeschichte. DRW. 1938. S. 113 ff. / Über die Ehre von Gemeinschaften. ZStrw. Bd. 57. 1938. S. 28 ff. / Studien zum System des Strafrechts. ZStrw. Bd. 58. 1939. S. 491 ff. / Persönlichkeit und Schuld. ZStrw. Bd. 60. 1941. S. 423 ff. / Über die substantiellen Begriffe des Strafrechts. F. f. Kohlrausch. 1944. S. 101 ff. / Über die ethische Grundlage der sozialen Ordnung. SJZ. 1947. S. 409 ff. / Zur Kritik der subjektiven Teilnahmelehre. SJZ. 1947. S. 645 ff. /

Der Irrtum über die Rechtswidrigkeit des Handelns. SJZ. 1948. S. 368 ff. / Das Gesinnungsmoment im Recht. F. f. v. Gierke. 1950. S. 290 ff. / Robert v. Hippel. JZ. 1951. S. 536 ff. / Eine wahlweise mit Zuechthaus oder Gefängnis bedrohte Handlung ist stets ein Verbrechen. JZ. 1951. S. 754 ff. / Schuld und Bewusstsein der Rechtswidrigkeit. MDR. 1951. S. 65 ff. / Nochmals der Verbotssirrtum. NJW. 1951. S. 577 ff. / Zum Notstandsproblem. ZStrw. Bd. 63. 1951. S. 47 ff. (澤々・片岡中興 | 中 | 大蔵大佐) / Der Irrtum über die Rechtmässigkeit der Amtsausübung. JZ. 1952. S. 19 ff. / Zur Systematik der Tätigkeitsdelikte. JZ. 1952. S. 72 ff. / Der Irrtum über die Zuständigkeit einer Behörde. JZ. 1952. S. 133 ff. / Der Irrtum über die Amtspflicht. JZ. 1952. S. 208 ff.

ケント大教授

Auf welche Bestandteile einer Strafvorschrift bezieht sich der Satz: nulla poena sine lege? JZ. 1952. S. 617 ff. / Zur Abgrenzung des Tatbestandsirrtums vom Verbotssirrtum. MDR. 1952. S. 584 ff. / Der Irrtum über einen Rechtfertigungsgrund. NJW. 1952. S. 564 ff. / Ein Kapitel aus der Geschichte der amerikanischen Erklärung der Menschenrechte (John Wise and Samuel Pufendorf). F. f. Smend. 1952. S. 387 ff. / ' Arten des Verbotssirrtums. JZ. 1953. S. 266 ff. / Zur Dogmatik der echten Unterlassungsdelikte, insbesondere des § 330 c StGB. NJW. 1953. S. 327

誤。 / Irrtumstragen im Strafrecht. NJW. 1953. S. 486 ff. /
 Zum Schadensbegriff bei Erpressung und Betrug. NJW. 1953. S.
 652 ff. / Naturrecht und Rechtspositivismus. E. f. Niedermayer.
 1953. S. 279 ff. (derselbe; in: Naturrecht oder Rechtspositivismus.
 1962. S. 322 ff.) / Über das Verhältnis der Strafbestimmung für
 die unethische Falschaussage und den Meineid. JZ. 1954. S. 227 ff. /
 Der Parteiverrat und die Irrtumsprobleme. (Tatbestands-, Verbotss-
 und Selbstkonstruktion). JZ. 1954. S. 276 ff. / Teilnahme an
 unvorätzlichen Handlungen? JZ. 1954. S. 429 ff. / Wie würde
 sich die finalistische Lehre auf den Allgemeinen Teil eines neuen
 Strafgesetzbuchs auswirken? Mat. Str. Ref. Bd. 1. 1954. S. 45 ff.
 (塚本・中田第一・ヘンツェ及び尾形田三三頁以下) / Der über-
 gesetzliche Notstand und die Irrtumsproblematik. JZ. 1955. S. 142
 ff. / Die Regelung von Vorsatz und Irrtum im Strafrecht als
 legislatives Problem. ZStw. Bd. 67. 1955. S. 196 ff. (塚本・
 井田氏、尾形兼徳博士中田三三頁以下) / Der Verbotakt im
 Nebenstrafrecht. JZ. 1956. S. 238 ff. / Die finale Handlungslehre
 und die fahrlässige Handlung. JZ. 1956. S. 316 ff. / Zur Pro-
 blematik der Unterlassungseinfälle. JZ. 1958. S. 494 ff. / Macht
 und Recht (Rechtspflicht und Rechtsechtung). F. f. Hugelmann.
 II. 1959. S. 833 ff. (塚本・金沢前田六三頁以下) / Der Gewähr-
 samsbegriff und die Diebstähle in Selbstbedienungsanlagen. GA. 1960.
 S. 257 ff. (塚本・宮本第一・本誌三五卷一四一四頁以下) / Gesetz

und Gewissen. F. f. 100 Jahre deut. Jur. Tag. 1960. S. 383 ff.
 塚本・金沢前田六三頁以下) / Vorteilsnicht beim Betrug. NJW.
 1962. S. 20 ff. / Das Verhältnis der Tötungseinfälle zu den
 Körperverletzungen. F. f. v. Weber. 1963. S. 242 ff. / Gesetz-
 mässige Judentötung? NJW. 1964. S. 521 ff. / Diskussions-
 bemerkungen zum Thema „Die Irrtumsregelung im Entwurf“.
 ZStw. Bd. 76. 1964. S. 619 ff.

なお、ウエルツェン教授の著作目録は、金沢文雄助教授の御芳
 作を参考されたら(後掲尾形兼徳博士中田三三頁以下)。

ウエルツェン (Ernst Amadeus Wolf)

チュービンゲン大学でガラス教授のあとを学位をとり(チャーチは
 目的行為論の立場に立った共犯論であった。公刊されていない)。そ
 の後長い間、ハイデルベルク大学でガラス教授の助手を勤めていた
 が、一九六三年二月、請求論文が受理され(公刊されていない)。翌
 年、同大学私講師となった。これらで、私講師就任講演 *Der
 Handlungsbegriff in der Lehre vom Verbrechen*. 1964. が公刊とな
 っている。

ウエルツェンベルガー (Thomas Württemberg)

一九〇七年一〇月七日、チューリッヒに生まれた。父親は美学の
 教授であった。チューリッヒ、フランクフルト、ムルリン、ミン
 ヘン、フライブルクの諸大学に学んだ。一九三四年より、E. ヴォ

ルフの助手となり、一九三九年でフライブルク大学私講師で任ぜられた。著書論文は *Das Kunstfälschertum. Entstehung und Bekämpfung eines Verbrechens vom Anfang des 15. bis zum Ende des 18. Jahrhunderts.* 1940. *ユギス*。一九四〇年キヨットマンヤン大学員外教授。一九四二年正教授となった。一九四六年新設されたインッホ大学法経学部教授となり、おらで一九五五年フョーニンント大学教授で招聘されて今日に至っている。

刑事学・行刑学研究所長を兼ね、その論文では法学者、法の精神、犯罪学者、多岐なものがあふる。

著書

Die deutsche Kriminalerzählung. 1941. / Der Kampf gegen das Kunstfälschertum in der deutschen und schweizerischen Strafrechtspflege. 1951. / Die geistige Situation der deutschen Strafrechtswissenschaft. 1. Aufl. 1957. 2. Aufl. 1959. (編者・小泉源一・原邦彦 著述集114・115・116・117・118・119・120・121号本巻)

論文

Philipp Alfeld. ZAK. 1940. S. 270 ff. / Aufgabe und Wege der deutschen Strafrechtsgeschichte. DRW. 1942. S. 114 ff. / Die deutsche Strafrechtsgeschichte im 19. Jahrhundert. Eine wissenschaftsgeschichtliche Studie. GS. Bd. 116. 1942. S. 261 ff. / Albrecht Dürer und das Strafrecht der Stadt Nürnberg. ZStw. Bd. 61. 1942. S. 139 ff. / Aus der Geschichte der unbestimmten Verurteilung. DS. Bd. 10. 1943. S. 81 ff. / Volk. Recht und

Gesetz bei Johann Gottlieb Herder. ZAK. 1944. S. 140 ff. / Die Legalität der staatlichen Herrschaft. Bemerkungen zur Wiederbelebung eines rechts- und staatsphilosophischen Begriffs. DRZschr. 1947. S. 241 ff. / Zur strafrechtlichen Bedeutung des Züchtigungsrechts des Lehrers. DRZschr. 1948. S. 291 ff. / Der Irrtum über die Völkerrechtmässigkeit des höheren Befehls im Strafrecht. MDR. 1948. S. 271 ff. / Humanität als Strafrechtswert. SJZ. 1948. S. 650 ff. / Von den Grenzen des Strafrechts. Univ. 1948. S. 785 ff. / Recht und Gerechtigkeit in der Kunst Albrecht Dürers. F. f. Fehr. 1948. S. 221 ff. / Recht—Gerechtigkeit—Gesetz. Aussprüche Goethes. Zur 200. Wiederkehr seines Geburtstags ausgewählt von Thomas Wirtenberger. DRZschr. 1949. S. 337 ff. / Historische und rechtliche Aspekte der Kunstfälschung. Univ. 1949. S. 655 ff. / Der Mainzer Professor Johann B. Horix (1730-92) als Kriminalist. F. f. Rosenfeld. 1949. S. 51 ff. / Naturrecht und Geschichte bei Josef Görres. F. f. Sauer. 1949. S. 279 ff. / Gustav Radbruch zum Gedenken. JR. 1950. S. 257 ff. / Karl Wilhelm Becker. Ein rheinischer Münzfälscher zu Anfang des 19. Jahrhunderts. F. f. Eckart. 1950. S. 121 ff. / Fehelon und das Naturrecht. JZ. 1951. S. 502 ff. / Ist die Anwendung des Lügendetektors im deutschen Strafverfahren zulässig? JZ. 1951. S. 772 ff. / Betrug durch Schweigen im Kunsthandel. NJW. 1951. S. 176 ff. / Der Jugendliche vor dem Strafrichter. St. Gen. 1951. S. 291 ff. / Die An

- rechnung der Untersuchungshaft. Grundsätze für die Bemessung, Revidibilität und Anrechnung in der Revisionsinstanz. JZ. 1952. S. 545 ff. / Zur Beurteilung der Persönlichkeit des Rechtsbrechers vor dem richterlichen Urteil. NJW. 1952. S. 249 ff. / Die Reform des Geldstrafenwesens. ZStw. Bd. 64. 1952. S. 17 ff. / Der zwölfte Internationale Kongress für Strafrecht und Gefängniswesen im Haag. ZStw. Bd. 64. 1952. S. 82 ff. / Jakob Burekhardt und die Strafrechtsgeschichte der italienischen Renaissance. ZStw. Bd. 64. 1952. S. 190 ff. / Versuch einer Typisierung jugendlicher Rechtsbrecher. Jugendkriminalität, hg. Schneider. 1952. S. 67 ff. / Zur Kriminologie der Kuppelrei. Krim. Biol. G. 1953. S. 34 ff. / Des Problèmes du droit pénal en matière économique. Rev. int. dr. pén. 1953. p. 437 ff. / Die Legalität (Versuch einer Deutung ihres rechtsphilosophischen Sinngehalts). 1953. / Zur Problematik der strafrechtlichen Zurechnungsfähigkeit. JZ. 1954. S. 209 ff. / Der internationale „Geigenkrieg“. Univ. 1954. S. 215 ff. / Die unbestimmte Verrurteilung. Mat. St. Ref. Bd. 1. 1954. S. 89 ff. (註文・藤野謙・ユルベリウネオカ栗谷出雲守(1954)) / Zur Rechtswidrigkeit der Kriegsverbrechen. F. f. Metzger. 1954. S. 193 ff. / Das Naturrecht und die Philosophie der Gegenwart. JZ. 1955. S. 1 ff. (Derselbe, in: Naturrecht oder Rechtspositivismus 1962. S. 429 ff.) / Über die Rechtsnatur der Bewährungshilfe im Strafrecht. MDR. 1955. S. 9 ff. / Considérations criminologiques sur les causes de la récidive. Rev. int. dr. pén. 1955. p. 202 ff. / Jugendliche Tätertypen. Bek. JKrim. BKA. 1955. S. 93 ff. / Rechtsphilosophisches in Gottfried Kellers „Grünen Heinrich“. F. f. Kisch. 1955. S. 283 ff. / Kriminologie—die Wissenschaft vom Verbrechen. Univ. 1956. S. 951 ff. / Über Rechte und Pflichten des Verletzten im deutschen Adhäsionsprozess. F. f. Penniger. 1956. S. 193 ff. / Johann Gottfried Herder und die Rechtsgeschichte. JZ. 1957. S. 137 ff. / Die Strafrechtswissenschaft in der Geschichte der Freiburger Rechts- und Staatswissenschaftlichen Fakultät, in: Aus der Geschichte der R.-Staw. Fak. zu Freiburg I. Br. 1957. S. 23 ff. / Vom Rechtsstaatsgedanken in der Lehre der strafrechtlichen Rechtswidrigkeit. F. f. Rittler. 1957. S. 125 ff. / Vom milieubedingten zum existenzialistischen Künstlertum. St. Gen. 1958. S. 63 ff. / Psychoanalyse, Psychohygiene und Verbrechensprophylaxe. Heinrich Mengs Beitrag zur Kriminologie und Kriminalpolitik. JZ. 1958. S. 430 ff. / Recht und Erziehung in der öffentlichen Jugendhilfe. ZStw. Bd. 71. 1959. S. 15 ff. / Das Kunstfälschertum. Bek. v. Betrug und Urkundenfälschung. BKA. 1959. S. 119 ff. / Über Entwicklung und Stand der Kriminologie in Deutschland. Etudes intern. d. psychosoc. crim. 1959. p. 69 ff. / Strafrichter und Aufgabe des Richters im modernen Strafrecht. F. f. Germann. 1959. S. 35 ff. / Kriminologie und Auslegung des § 183 StGB. JZ. 1960. S. 342 ff. / Er

und Verwarnung als erzieherische Aufgabe des Jugendrichters. F. t. Mathesius. 1960. S. 149 ff. / Les problèmes posés par la publicité donnée aux actes criminels et aux procédures pénales. Rev. int. dr. pén. 1961. p. 523 ff. / La doctrine de Franz von Liszt de la culpabilité et de la responsabilité pénale. in: La responsabilité pénale. 1961. p. 327 ff. / Das Problem der Todesstrafe. Univ. 1961. S. 1091 ff. / Zur naturrechtlichen Prothematik der Todesstrafe. F. t. Messner. 1961. S. 521 ff. / Zum strafrechtlichen Schutz von Fürst und Staat im Landrecht von Baden-Durlach (1622/1654). F. t. E. Schmidt. 1961. S. 54 ff. (譯文・註文・索引編纂山川菊一博士国大西三郎) / Die höchstichterliche Rechtsprechung und die Mitwirkung der Fachwissenschaft. DRiZ. 1962. S. 272 ff. / Erik Wolf zum 60. Geburtstag. JZ. 1962. S. 323 ff. / Der Jugendrichter als Mitzweier jugendlicher Rechtsbrecher. Kri. Blot. G. 1962. S. 154 ff. / Vom rechtschaffenden Gewissen. F. t. Wolf. 1962. S. 337 ff. / Sinnvoller Strafvollzug im Lichte der Strafrechtsreform. Bewährungshilfe. 1963. S. 19 ff. / Strafrechtspflege und Strafrechtsreform. ZStrw. Bd. 75. 1963. S. 98 ff. / Zur Strafbarkeit der Homosexualität. F. t. v. Weber. 1963. S. 271 ff. / Entwicklung und Lage der Kriminologie in Deutschland. Jb. Nr. 5. 1964 / 1965. S. 147 ff.

次にあげた人々は、近い将来、教授資格請求論文を書いて、学界に登場して下さると思われる新進の学者である。簡単に紹介して置く。

グインター (Günter Bemann)

フランクフルトの弟子であり、彼とともフランクフルトで暮り、その後、同大学で暮りて請求論文を執筆して下さるとする。フランクフルト大学の副学長に就任した法学博士 Zur Frage der objektiven Bedingungen der Strafbarkeit. 1957. 以下について知るべきである。西ドイツの中央裁判所の裁判官グインター・グンター・ベマン。

羅氏

Was bedeutet die Bestimmung „wenn nicht diese Tatsache erweislich wahr ist“ im § 186 StGB? MDR. 1956. S. 387 ff. / Zum Fall Rose-Rosahl. MDR. 1958. S. 817 ff. / Welche Bedeutung hat das Erfordernis der Raubthat im § 330 a StGB? GA. 1961. S. 65 ff. / Zur Rechtsbeugung des Schiedsrichters (Gedanken zu § 455 des jüngsten Strafgesetzbuchentwurfs). ZStrw. Bd. 74. 1962 S. 295 ff.

クレーマー (Peter Cremer)

チュービンゲン大学でクレーマー教授の助手を勤めている若手のホーンの一人である。一九六二年に公刊したモノグラフィー Der Vollrechtszustand als abstraktes Gefährdungsdelikt. 1962. 以下

位を取得した。この人も又、近い中に私講師となるであろう。

論文

Mischbrauch und Erschleichen von Ausweispapieren. GA. 1963. S. 363 ff. / Praktischer Fall. „Der Rabenrater.“ Jus. 1964. S. 360 ff. / Die Neuregelung der Sprengstoffdelikte durch das 7. Strafrechtsänderungsgesetz. NJW. 1964. S. 1835 ff.

ユルシン (Hans Joachim Hirsch)

ユルシンは、教授の兼任である。立派な作品をあげていよう。彼の手の緩やかなる助けであるのが彼の難な点である。容態が難かたが、その点で、彼は、著述論文 Die Lehre von dem negativen Tatbestandsmerkmalen. Der Irrtum über einen Rechtsfertigungsgewand. 1960. など、その著述である。著述論文を並べよう。

論文

Ist die versuchte falsche eidesstattliche Versicherung noch strafbar? JZ. 1955. S. 234 ff. / Soziale Adäquanz und Unrechtslehre. ZStw. Bd. 74. 1962. S. 78 ff. / Eigenmächtige Zueignung geschuldeter Sache. Rechtswidrigkeit und Irrtum bei den Zueignungstrafbestimmungen. JZ. 1963. S. 149 ff.

ホーベン (Ernst-Joachim Lampe)

マインツ大学のニーゼ教授の助手であったが、師の急逝により、ルドルフ・シエミットについて請求論文を提出しようとしている。しかし、シエミットはフライブルクの員外教授に転じ、自分はマイ

ンツに残っているから、はたして学究の道が続けてゆけるかどうかいかなる不安な状態にある。私はホンプルクの学会でルドルフ・シエミットとランペと三人で食事をしたとき、ランペの手柄と頭の良さを感心した。その手柄からいってマルトール・カウフマンに感心か位である。線の細いところ。

論文

Genügt für den Entschluss des Täters in §43 StGB sein bedingter Vorsatz? NJW. 1958. S. 332 ff. / Negative Tätermerkmale. GA. 1959. S. 367 ff. / Täterschaft bei fahrlässiger Straftat. ZStw. Bd. 71. 1959. S. 579 ff. / Ingerenz und dolus subsequens? ZStw. Bd. 72. 1960. S. 93 ff. (塚本・阿部第一・本誌三十五卷四号一一一頁) / Die sogenannte Gesamtturkunde und das Problem der Urkundenfälschung durch den Aussteller. GA. 1964. S. 321 ff. / Unterdrückung unechter Urkunden. JR. 1964. S. 64 ff.

通説

私は「法律のひろば」一八巻四号から七号まで、ドイツ刑法学の群像というものを書き、その中に十人余の近影をも併せて載せた。御参照を乞う。